

平成18年度 文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム採択事業

公募制の プロジェクト科目による 地域活性化取組報告書

—往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して—

2009年3月

同志社大学教育支援機構教務部教務課
プロジェクト科目検討部会事務局

あいさつ

同志社大学 副学長 文学部教授 田端 信 廣

プロジェクト科目は、地域社会や企業の方々に講師をお願いし、地域社会や企業が持つ「教育力」を大学の正規の教育課程の中に導入することによって、学生に生きた智恵や技術を学ばせるとともに、「現場に学ぶ」視点を育み、実践的な問題発見・解決能力など、いわば学生の総合的人間力を養成することを目的とし、2006年に全学共通教養教育を構成する大きな柱のひとつとして設置された。その背景には、現代の学生に、未知・未決の問題を考える力、問題を自分で考え抜く力や、地域社会とコミュニケーションする能力を習得させる機会を目的意識的に設定したいという思いがあった。とくに歴史、伝統文化、伝統産業に恵まれた京都、けいはんな地域に学修拠点を置いている利点を活かし、それらのリソースを十分に活用することが計画された。そこで、地域から講師を迎え、地域から学ぶことで、地域に愛着を持ち、問題意識を感じ、学び、貢献できる人材を育成するという、学生と地域との双方向による貢献―往還型地域貢献―を目指したのである。



本学では、現代社会の問題に焦点をあてた、学生にとってタイムリーで関心の深いテーマをプロジェクトとして提供している。「興味のあること」や「知りたい・学びたいと思っていること」を学ぶのは、苦痛を伴っても最後までやり抜くことができる。自ら、能動的・積極的に関与して学んだことは、記憶に強く留まる。プロジェクト科目におけるPBL (Project-based Learning) は、このような学習の原点とも言える「学びへの渴望」を誘発する環境を提供、創出することで、失いかけた学習への情熱やワクワクした気持ちを取り戻すことができる「新しく」て「旧い」学習方法である。本学では、全学共通教養教養科目として設置しており、プロジェクトメンバーが異学部・異学年で編成されるという、一見、デメリットとも思える状況をメリットとして捉え直し、チーム学習を通じて、他者を理解し、他者から学び、教えあう姿勢を体得させることで、より深く、拡がりのある学修へと昇華させることが可能となっている。

昨今、大学教育においては「学士課程教育」、「学士力」という言葉が躍っている。PBLもその「学士力」を獲得する教育手法の一例として紹介されている。これまで、大学は、〈何＝科目〉を履修したかを成績証明書に記し、社会に一方的に通達して、品質保証を行ってきた。しかし今後は、〈科目＝手段〉を履修することによって〈何＝能力〉を獲得できたかが問われる時代となっている。このことは、大学教育が知識やスキルの習得のみに留まることなく、実践による「知」のさらなる昇華―総合知―を期待されているとも理解できる。

プロジェクト科目では、このような実践知、総合知を「良心を手腕に」駆使できる人材の養成を目指している。不透明な現代社会の状況を打破し、社会や地域のリーダーとして活躍できる人材の養成に貢献できる科目として大いに期待している。

開設して3年を経過し、学内外における科目への認識・理解も漸く高まりつつある。学生には、人気とともに充実度の高い科目として定着しつつある。アンケート結果では、受講した学生のみならず、担当した教員の満足度も非常に高い。しかし、一方で、開講科目数が25科目前後と学生数に比して、満足のいく数にはなっていないなど、改善すべき点もある。例えば、必修科目でないために、冒頭で懸念したような学生（受講してもらいたい学生）に、受講してもらえない、あるいは受講してもドロップアウトしていくという皮肉な現実がある。こうした学生の受講を促し、受講中もモチベーションを維持・向上させるような工夫が必要であると認識している。さらに、大きな課題として、PBLの評価システムの確立が望まれる。本科目の成果には、測定・数値化できる成果とできない成果があり、特に後者の可視化できない成果の検証には長期的な視点に立った測定が必要であろう。4年目を迎えるに当たり、例えば、卒業学生を対象に、本科目を受講した体験が実社会の現場でどのように活かされているか、等のアンケートの実施も行っていきたいと考えている。

以上のように、まだまだ手探りで、工夫と改善に取り組んでいる状況ではあるが、本科目において何かにチャレンジし、やり遂げた経験―それが例え失敗体験であったとしても―は、現代社会を生き抜くための道標となって、生涯、道を照らし続けることを我々は固く信じている。その上で、少しでもこの取組が他大学の模範となり、教育の改善に資することを願い、今後も邁進していく所存である。

この報告書がPBLを推進する他大学への一助となり、PBLの情報提供およびその意義の理解の共有の場となれば幸いである。

同志社大学 全学共通教養教育センター所長 文学部教授 圓 月 勝 博

「エウレカ」という言葉がある。「私は見つけた」という意味の古代ギリシャ語に由来する単語で、アルキメデスがその名を冠して伝えられることになる有名な原理を入浴中に発見したとき、思わず市中に裸のまま飛び出して大声で叫んだ言葉として、2200年以上の時を超えて今もなお広く記憶されている。「エウレカ」という言葉が現代人にも愛用され続けている理由は、それが学問の本質を端的に集約しているからであろう。一見したところ何の変哲もない日常生活の中で課題と解決策を発見し、その発見の感動を社会において万人と分かち合う喜びの中こそ、今も昔も人間を学問に駆り立ててきた原動力がある。



本学のプロジェクト科目は、あらゆる学問の原点にある発見の感動と喜びに立ち返って、現代高等教育を総合的に考え直してみる試みである。2008年12月24日に公表された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」が「学士力」を「課題探求や問題解決等の諸能力を中核とする」と定義しているように、めまぐるしく変容し続ける社会の中、現代の大学が達成しなければならない最大の教育目標の一つとして、課題探求能力と問題解決能力の育成があることは、今さらここで再説するまでもない。

本学のプロジェクト科目は、2006年度以来、課題探求能力と問題解決能力の育成に先進的に取り組んできた。当初、社会に開かれた実践型授業運営形態に関して、懐疑的な声があったことも事実であるが、全学共通教養教育科目として、3年間にわたる教育的実績を残した今、プロジェクト科目が基盤とするPBL（Project-Based Learning）の普遍性が学内外において広く認知されるようになってきている。たとえば、2008年度文部科学省「質の高い大学教育プログラム」に採択された本学政策学部の「相互啓発による創造的学力育成カリキュラム」がPBLを学部専門教育にも応用した成功事例であったことは、枚挙の暇がない副次的成果の一つにすぎない。現状において、プロジェクト科目の教育的波及効果は、取組開始時点の予想をはるかに超えるものであることを確認したい。

プロジェクト科目の今後の課題は、この3年間の豊かな実践経験を踏まえつつ、大学教育方法論としてのPBLの理論化を推進して、その普遍性を学内外に積極的に発信することである。上に触れた中教審答申においても、成績評価基準の明示や単位制度の実質化が現代高等教育の焦眉の課題として力説されているが、PBLが日本の大学の中で確固たる地位を築くためには、組織的なFDあるいはSD活動と連動させながら、その成績評価方法や学習時間保障方策などに関する汎用的モデルを確立していくことが必須の作業となるであろう。本学の大きな財産となったプロジェクト科目の成果をさらに発展させるために、PBLの拠点化に向けた全学的支援体制の整備に今後も取り組む所存である。

公募制のプロジェクト科目による地域活性化

～往還型地域連携活動によるモデルづくりを目指して～

同志社大学 プロジェクト科目検討部会長 文学部教授 山田和人

はじめに

プロジェクト科目は2006年度開講の全学共通教養教育科目の一群として設置された。昨今、大学教育の質的な向上を目指す動きが活発化しており、社会人基礎力の育成が経済産業省から提唱されて久しい。それは産業界からの要請を受けて進められてきたという面もあるものの、大学生が複雑で不確実性に満ちた現代社会のなかで、自分自身のキャリアをデザイン（人生設計）できる力を養成することは高等教育機関の担うべき役割になってきていると言える。



同志社大学プロジェクト科目は、学生の自主的・自発的な学びの意欲を引き出していくためにプロジェクトの遂行をベースにしたPBL（プロジェクトベースラーニング）の手法をいち早く導入して、社会的な実践・行動を起こすことができる人材の育成を目指した。その活動の新規性・独創性が評価され、2006年度現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）に「公募制のプロジェクト科目による地域活性化～往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して～」として採択された。

プロジェクト科目は、全学設置の教養教育科目であるために、全学部・全学年の学生が登録できる。毎年250名から300名程度の学生が履修している。学部別に見ても、それぞれバランスよく履修されており、男女比もほぼ均等という状況である（資料 学部・年度別登録者数データ P148参照）。3年間の実績の中で、全学的に認知された科目として着実に広がりを見せている。

公募制のプロジェクト科目

プロジェクト科目では、従来の教養教育科目が座学中心の受動的な啓発的講義科目にとどまっていたのに対して、社会との連携によるプロジェクト遂行型の実践型・参加型のプログラムによって、専門教育の知識や技能の継承と体系的・系統的な教授法の枠にとどまることなく、社会に偏在するプロフェッショナルな人材を大学教育に新しい風として導入していこうと試みている。それが、テーマの公募制という大胆な試みだった。毎年、企業、団体、個人から70～80件の応募があり（初年度は160件余）、提出された書類をもとにプロジェクト科目検討部会と教務主任連絡会議にて採否を審議・決定し、採択されたテーマ提案者を本学の嘱託講師として採用し、学生指導に責任を持って取り組んでもらっている。なお、本学の専任教員が科目代表者としてアドバイザーの役割を果たしている。また、担当者には、授業運営の手引き（資料 各種フォーム 授業運営の手引き P134参照）を配布して、授業の趣旨や運営方法、成績評価、施設・設備の案内などを周知している。開講科目数は、毎年25科目から30科目程度である（年次別事業報告 P27、P30、P39参照）。

具体的には、「まちづくり」や「政策提案」に関するテーマ、「環境」に関するテーマ、「こども」の教育に関するテーマ、「演劇」や「スポーツ」などの身体表現を通して交流を提案するテーマ、あるいは、「高齢化社会」「地域福祉」など時代を反映したテーマ、「ものづくり」、「交流」、「企画制作」、「提案」といったキーワードを持つテーマなど多岐にわたる。

専任教員には思い浮かばないようなユニークなテーマが提案されている。こうしたテーマの多様性も、学生の学習意欲を引き出していく大切な要素である。いわゆる教材の鮮度と担当者の感化力が学生に伝わるのだろう。

なお、京都という三方を山に囲まれた地理的な条件、寺社を含めた豊かな文化遺産、職人の技を結晶させた伝統文化を有する文化環境が、こうした公募を可能にしている条件と言えるだろう。伝統を歴史的にとら

えていくだけではなく、現代社会の問題として引き受けていくところにプロジェクト科目の現代性と社会性がある。学生はそうしたメッセージを敏感に感じ取っている。

視点を変えれば、京都の代表的な企業もまた、そうした伝統からエッセンスを得た会社が多い。京セラ、オムロン、村田製作所しかり。常に多様な文化を吸収してひとつに同化・同調させていくという文化的な地場を持ち続けた京都の特性が読み取れる。いまでも京都は日本文化の中心として常に超越的な空間であり続けている。そうした重層性と多様性を兼ね備えた国際都市・学際都市という側面も大きいように思う。

応募総数が例年、80件程度に及んでいるのは、こうした歴史的な背景とともに、「学生さん」という呼び名に象徴されるように、学生を大切に作る気風がいまも色濃く残っていることも、公募制という制度を支えている要素である。いわば「学生の街京都」という精神的な風土がこうした制度を自然に受け止める土壌であり、まさに地域・社会と結びついて学生を育てていく精神風土が京都には伝統的に存在していたことにあらためて気づかされる。そこに「公募制」というシステムがフィットしたものと考えられる。

現場から問題を発見して、それを解決するというプロセスの中で、最終的に具体的な解決の方策を提示・提案するところまで持っていくのが社会連携型のプロジェクト科目の特徴である。

表面的にたどるのではなく、問題意識を持って歩き出せば、現代社会の直面する厳しい現実が、一つひとつの現場に立ち現れてくる。その現場で何が問題であるのか真剣に考え抜くことを通して、自分たちの課題を見つけ、その課題解決のための方策を提示・提案していこうと主体的に取り組んでいくことが重要である。もちろん、解決のための課題を的確に設定するためには、地域・社会の現場に足を運び、調査と分析を丹念に行うことが不可欠である。そのプロセスで、学生は課題解決のために試行錯誤を繰り返して、最善の解決策を実行していく。課題設定・調査・分析・理論化というプロセスを経なければ、問題解決のための方法は見えてこない。プロジェクト科目が「行動する科学」とされる所以である。

言い換えれば、学生一人ひとりが、自分たちのテーマを自分自身のテーマとしてどれだけ引き受けられるのかが問われている。そうした授業への取組みの姿勢を引き出していくのが科目担当者の手腕であり、社会経験に裏打ちされた実践的な指導力が発揮される場所である。学生もそれに感化されて、自らテーマを引き受け、自分たちの視点からテーマの再構築を試みようとするところまで変化していく。いわば、憧れの存在、メンターとしての学外の科目担当者が、学生に社会とのつながりを実感させるという大きな教育効果を生み出していると言える。

本学では、公募制に対応した運営体制と公募システムを構築しており、毎年、運営の体制とシステムの見直しを行い、広範なジャンルと人材の応募を促すように工夫を加えている。詳細は、後掲の資料に譲る。

ここでは、概略を記す。以下は、科目担当者が出席・参加したり、提出したりすることがらである。

9月 公募の告知（新聞・web等）、公募説明会、9月から10月 公募受付、学内科目代表者公募、11月プロジェクト科目部会と教務主任連絡会議にて審査・人件審議、採択結果の告知、12月 採択後の授業運営について科目担当者・科目代表者説明会、シラバス作成、学生告知文のweb掲載、3月 学生の登録説明会・先行登録、4月 科目登録、5月 各種講習会・ワークショップ 7月 最終成果報告会、担当科目の最終成果報告書の提出、8月 成績評価提出、以上の科目の運営を事務局を中心に推進している。秋学期も、春学期科目と同様の展開となる（取組について（4）年間スケジュール P21参照）。

公募制にとって、審査・採択は最も重要な作業であり、採択基準の明確化と審査方法の厳密化により、公平性を確保するように配慮している。まず、全学から選出された20数名の審査委員によって提出書類について事前審査（1点から5点）を行い、その得点集計をもとに、テーマ別のバランスや、希望開講校地のバランスにも配慮してプロジェクト科目検討部会において集中審査を行なう。その結果を教務主任連絡会議にて検討し、承認を得るという一連の流れで審査・採択を行なっている（取組について（3）組織図 P19参照）。採択後に、審査結果をwebに公表するとともに、応募・審査についての「総評」を公開している。3年間の経験の中で、審査・採択の基準や審査方法がほぼ確立されたと言える（資料 プロジェクト科目ホームページ P139参照）。

往還型地域連携のモデル

プロジェクト科目は、学生が自発的・自律的にプロジェクトを推進していくことで、地域・社会の現場から多くのことを学び取っていく科目である。プロジェクト科目は、大学が取り組む地域・社会との連携教育のひとつと言える。ただし、学生の自発性・自律性がきわめて重要であり、その点で、いわゆるボランティア活動とは異なる（図1）。

プロジェクト科目の位置づけ

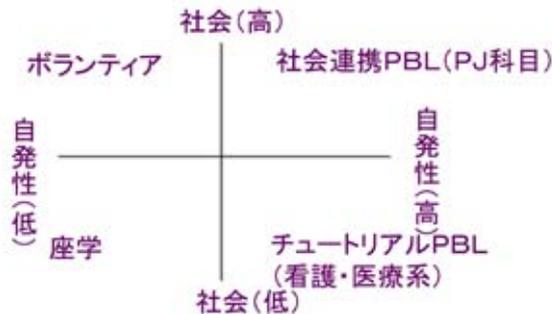


図1

この点から言えば、必ずしも自働的かつ双方向的な活動とは言えない。それとは逆に、社会連携は弱い、学生の自発性が高いのが、チュートリアル型のPBLである。一定のシナリオやストーリーの中で、自分たちで課題を発見し、その解決方法を考えるスタイルの授業である。医療・看護系のシナリオ型のPBL（プロブレムベースドラーニング）がそれにあたる。同志社大学の各学部・大学院に設置されているPBL型の専門科目（学部・大学院）にもこうしたチュートリアル型のPBLが取り入れられている。

プロジェクト科目は、学生の自発的・自律的な活動を何よりも重視している。ボランティアの場合は、地域・社会から要請を受けて、学生が自らの知識やスキルを地域・社会に還元していく関係であり、ある意味で、一方的な関係であるのに対して、プロジェクト科目は、学生が地域・社会の現場で課題を発見し、それを解決するために取り組むことで、大学と地域・社会の間に双方向的な関係を構築していくところに特徴がある。これを「往還型地域連携」ととらえている（図2）。

プロジェクトの特性: 流動と増殖 往還型地域連携

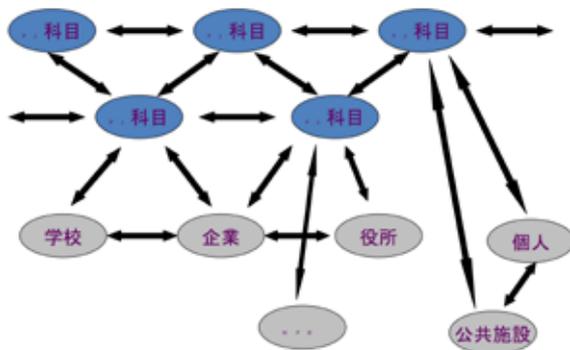


図2

いくことが重要課題であった。

それが社会連携型のPBLと結びついた最大の理由である。

次の図のように、社会連携を縦軸に、自発性を横軸にマトリックスを作成すると、社会連携が強く、学生の自発性も高い活動が、社会連携型のPBLである。プロジェクト科目は、こうした社会連携型のPBLである。これに対して、社会連携は強いが、学生の自発性が低い活動がボランティアとなる。すなわち、ボランティアの場合、学生が主体的、自律的に参加するというケースもあるが、地域や住民のニーズに応える、もしくは自分たちでできることで社会貢献を行っていく場合の方が多い。学生の自発性と

多岐にわたる公募テーマによる地域・社会との連携教育が学生の学びと一体に進められていく。地域・社会の現場で調査し、現場の抱える問題を地域・社会とともに考え、その解決策を模索していくことに重点がある。

そして、往還型の地域連携を担うのがまさに学生であり、その意味で、学生がどれだけ自発的・自律的にプロジェクトに関わるのかが、往還型地域連携を推進していくための最も大きな課題であり、それがそのままプロジェクト科目の教育課題でもあった。そのために、学生の学習意欲を引き出していく環境と条件を整備して

PBL とは何か

「プロジェクト」とは本来何なのか。「プロ」は「前に」、「ジェクト」は「投げる」ことであり、未来に向かって自分自身を投影していくこと、未来に向かって、自分自身をプロデュースしていくことが原義に近い定義になる。それゆえ、自分自身のキャリアを自らデザインしていく総合的な人間力を持った人間の育成を目指すことと言える。

そこで、あらためてプロジェクトとはいかなる活動のことを言うのか、考えてみたい。

そのために、まず、プロジェクトの属性を列挙してみることから始めたい。

- ・期間が限定されている
- ・目標を明確化する必要がある。
- ・自分たちでスケジュールを決めなければ進まない。
- ・手近なマニュアルがない。
- ・リスクとトラブルがつきものである。
- ・大小の問題点の発見と解決を図らなければ進めない。
- ・情報共有と時間管理が必要である。
- ・社会に発信する行為である。

まさにこれらの属性は、現代の学生にとって未体験の領域であり、コミュニケーション不足や行動力の不足を指摘される学生には「逆境」そのものと言える。われわれは、これらの困難な属性を「プロジェクトの教育力」ととらえ、大学のなかに社会を呼び込み、トラブルやリスクを抱えながら、学生に実践的に生き方を学んでもらいたいと企図している。厳しく鍛えられることが少なくなったキャンパスライフの中で、あえて「逆境」に立ち向かうことで、学生が自ら成長していくことを待つという大胆な運営方針を貫いている。こうしたプロジェクトの教育力を活かした教育をPBLと考えておきたい。

もう少し、厳密に定義しておく次のようになる。

「一定期間内に、一定の目標を実現するために、自律的・主体的に、学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決しようと、チームで協働して取り組んでいく創造的・社会的な学び」

プロジェクトでは、常に「考え抜くこと」「チームで活動すること」「行動すること」が求められる。そこでは、時々刻々変化する状況の中で、情報共有をしながらチームのメンバーの合意を形成して、計画的・持続的にプロジェクトを遂行していかなければならない。学生は、受験時代から馴れ親しんだ個人学習ではなく、ともに学ぶチーム学習へと意識を変革していかざるを得ない状況に立たされることになる。そうした未体験の現場の中で揉まれることで自分自身のありかたを見つめ直し、自己啓発のレベルから自己変革へと自らを成長させていく。

プロジェクトを遂行する過程で求められる能力を列挙してみよう。

常に求められるのは：コミュニケーション能力・問題発見解決能力

議論の場面：論理的思考力・企画立案能力・情報交換共有力・交渉力

活動報告書：自己表現力・自己認識力・自己管理能力

タスク管理：目的遂行力・マネジメント能力・交渉調整能力

データ管理：情報収集整理活用力・情報伝達能力・情報発信能力

このように多様な能力がプロジェクトの日常において求められる。学生は、そうしたなかで自分の長所を伸ばそうと努力するとともに、チームのメンバーとの対話の中で自分の弱点に気づく。そして、お互いにメンバー同士で信頼し合い、励まし合って、ともに学ぶ姿勢を獲得していく。まさに同期同調型の協調学習と言える。このプロジェクト遂行プロセスの中で、学生は自分自身を客観的にとらえるメタ認知、多様な人やものとの出会いによる気づきを得ることができる。プロジェクトを通して、自ら学び、自ら気づく。まさに自発性をもって行動することができるきっかけをつかむことができるようになる。社会連携型のPBLがもたらす学生の成長は、こうした不断の気づきのプロセスの中でもたらされていく。

プロジェクト科目とコミュニティ

往還型地域連携を推進することはそのまま地域・社会との連携教育への模索でもあった。そこで、まず、公募制という教育運営システムを整備するとともに、担当者を公募することのメリットを最大限活かすことができるように、科目そのものも社会に開かれた仕組みに変えていく必要があった。しかし、その仕組みが従来の科目運営とかけ離れた運営になることは、教務システムとの連携から避けなければならない。いかにユニークな試みであっても、将来的に大学のシステムの中に定着させていくことができなければ、意味がない。短期的なひとつの実験で終わってしまう。現代 GP などの競争的な資金を導入する場合には、当初から大学のシステムに定着させる方策と展望をもって臨む必要がある。そのために、既存の授業運営との緊張関係の中でバランスをとりながら、従来の科目運営の延長線上で理解できるシステムにする必要があった。

そこで、まず授業のあり方を見直すことから始めた。科目を固定的にとらえるのではなく、ひとつのコミュニティと位置づけて、学生が地域・社会のコミュニティと連携していくことが自然にできるような環境と条件を組み込んだ科目として整備するようにした（図3）。

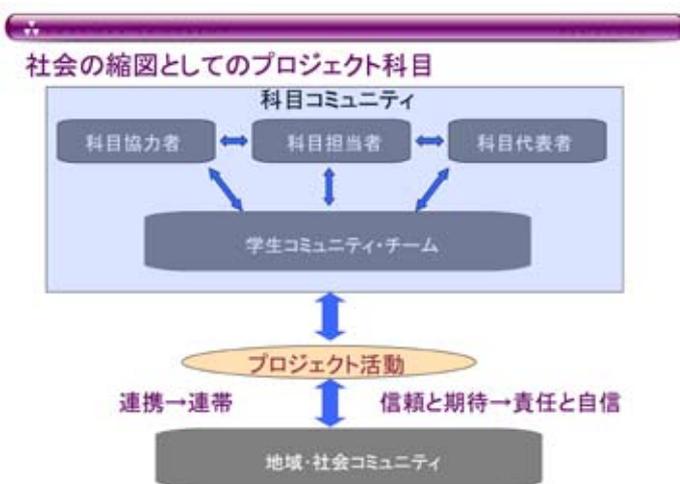


図3

つまり、学生と科目担当者、科目代表者、科目協力者がひとつの開かれたコミュニティを形成するものととらえた。プロジェクト科目では、あらかじめ登録された協力者やゲストスピーカーを授業のなかに組み込むことができるようにフレキシブルな構造にしてある。また、協力者が学外者の場合も、学内の学生の場合もあるので、学生と科目代表者の承認を得ていることを前提に科目協力者と連携ができるようにしている。科目を開かれたコミュニティとする場合に、参加者を無限定にしてしまうと、科目受講生の安心・安全に関わる諸問題が生じるケースが想定されるので、こうした歯止めを設

けるようにしている。

授業は、他の科目と同様に時間割の中に設置されている。授業時間が担当者やゲストスピーカーによるレクチャーやワークショップの場にもなるが、基本はプロジェクトを推進していくための連絡会議である。さらに、学生は授業時間以外にも、ミーティングを繰り返して、プロジェクトを推進していく。授業時間での報告が、科目担当者、科目代表者も含めたプロジェクトの方向性の決定や問題点の分析・検証の場になっていく。そこで検討・議論を通して課題化されたコンセプトをもとに企画書が作られ、企画案と役割分担に基づく行動計画をもとにプロジェクトが実行されていく。そして、プロジェクトの現場での調査や打合せを積み重ねて、最終的にイベントの実施やコンペや競技会への出展・出品、提案書の作成・プレゼンテーション等が行われる。広義の意味で、チームで力を合わせて作品を作り出していくことをプロジェクト活動と位置づけるとわかりやすいかもしれない。授業とミーティングと現場をつなぐことがプロジェクト科目の授業展開と言える。

学生のプロジェクト運営を観察すると、学生は、まず、プロジェクトを実施する基盤としてのコミュニティの形成からスタートしていく。とりわけ、プロジェクト科目は、全学共通教養教育科目として設置されているので、異学部、異学年の多様な学生同士が初対面のところから「なかまのコミュニティ」を作り上げていかなければならない。そこで、「なかまのコミュニティ」「学びのコミュニティ」「チームのコミュニティ」を作って、受講生全員をコミュニティのメンバー同士として、快適な「学びの共同体」を作り出していく。いわば、自分たちの「居場所」を自ら作り出していく。このコミュニティは居心地のよい信頼と期待、安心と安全、慰めと癒しの精神的なアジールであり、「安全基地」であり、学生自らが作る

プロジェクトの重層構造



図4

して、プロジェクト活動を推進していく。そのことで、学生は、自分たちのプロジェクトの活動を客観的に把握し、真の意味で他者を理解し、社会に貢献しようとするようになり、地域・社会のコミュニティーと自然に連携できるような関係を作り出していくことができるようになる。まさにプロジェクトを推進していくことで、学生コミュニティーと地域・社会のコミュニティーが双方向的に連携していくことができる。

こうして見てみると、実際に進行するプロジェクトには、プロジェクトの遂行プロセスとコミュニティーの形成プロセスが重層的・相乗的に展開していることがわかる（図4）。

CNSの開発と運用

そこで、プロジェクトのプロジェクト遂行プロセスとコミュニティー形成プロセスを支援するために、SNSをベースとしたプロジェクト科目支援システムを開発した。CNSと呼称している。Communication・Networking・Systemの頭文字から来ている。ねらいは、Community・Communication・Collaborationの頭文字の三つのCを充実させていくことにある。学生が自らコミュニティーを作り上げ、そのコミュニティーをベースとして、コミュニケーションを促進し、他者を理解し、コラボレーションしていくことを促す。プロジェクトに必要な情報共有と時間管理機能を中心にプロジェクト遂行プロセスを支援していくコンテンツを提供し、各自が選択して活用できるようにした（CNS開発・運用について P117参照）。

開発の経緯を簡単にまとめておきたい。現代GP採択の当初から前述のようなコミュニティーベースのアカデミックSNSを構築することを企図しており、2006年度から開発の基本設計を開始した。基本コンセプトに基づいて、共同開発の企業との連携を模索し、最終的に株式会社SIGELと共同開発することが決定した。システム設計を行い、コミュニティーベースのアカデミックSNSの開発に着手した。2008年度には実質運用を始め、申請制で利用を開始した。その間、問題点を整理して、検証と改善を積み重ねて、機能強化を図った。2009年度からは、携帯電話にも対応して、全員登録制で全プロジェクトでの本格的な活用を開始する。

CNSでは、すべての提供しているツール・機能をモジュール化しており、各プロジェクトは自分たちに必要なものを意志的に選択し、活用することができるように自由度の大きいものにしており、フレキシブルに利用できることを第一に考えた。たとえば、プロジェクトを遂行していくと、その過程でチームをグループに分割して活動していく必要が出てくる場合もある。ところが、チームをグループに分割すると、チームの目的やねらいを離れて、グループの活動が中心になって、プロジェクトの方向性が混乱する場合が多い。そこで、グループに細分化されても、常に科目のコミュニティーを意識できるように設計した。階層構造になっているので、グループへの細分化は理論的にはメンバー一人ひとりの単位まで可能である。プロジェクトは、常に現在進行形で進んでいくので、こうしたフレキシブルな構造を持ったシステムの方が運用しやすい。

この科目コミュニティーには参加者を全員登録することができるが、登録者以外にはアクセスを認めない。受講生、科目担当者、科目代表者、科目協力者、事務局だけが利用できるようになっている。ミクシイ



図5

るように工夫されている（図5）。

プロジェクト遂行プロセス支援

プロジェクトを推進していく上では、情報共有と時間管理がもっとも重要な機能であり、そのために、カレンダー機能、タスク機能、データバンク、メッセージ、ミーティングボード等のツール・機能を提供している。これ以外に、ジャーナル機能がある。ジャーナル機能については後述する。

カレンダー機能は、プロジェクト単位でスケジュールを調整したり、予定を確認するために活用されている。事務局からの行事予定などもインフォメーション機能で告知している。

タスク機能は、プロジェクトで役割分担が決まったタスクを管理する機能であり、タスクの達成度が視覚化されている。タスクの期限を過ぎると、警告メッセージが表示されるようになっている。

データバンクは、プロジェクトの遂行プロセスで作成した文書をここに収納して、いつでもそれを引き出してメンバーが活用できるようになっている。プロジェクトで調査したデータ、情報もすべて一元管理できるようにしている。そのために、ワード、エクセル、パワーポイント、PDF、JPGなど多彩な添付ファイルに対応できるように配慮している。ミクシィ等のエンターテインメント系のSNSは、趣味や興味を共有するメンバーやコミュニティーへの参加を基本とするために、アカデミックな活動には有効性がない。やはり、多様な文書、情報のやりとりが前提になるものでなければならない。ミクシィを活用してプロジェクト運営を試みたが、失敗に終わった。議事録、企画書、報告書、会計報告等の多彩な文書がプロジェクトを運営していく上では必要になる。それらを一元管理できることはプロジェクトの効率を引き上げることになる

（図6）。

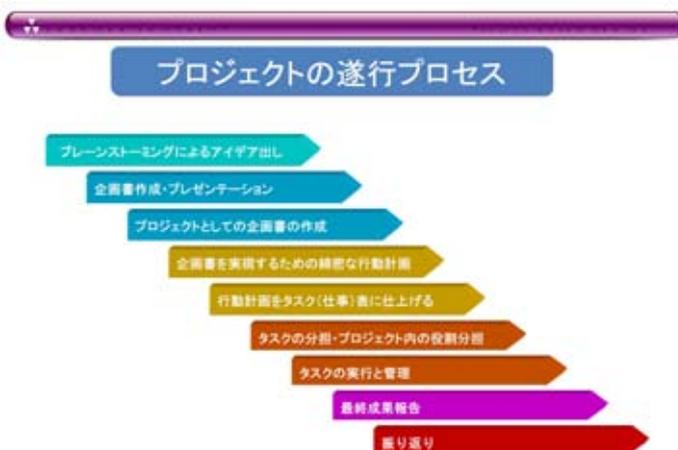


図6

メッセージ機能は、プロジェクトメンバー同士のメッセージのやりとりだが、メールのようにアドレスを登録する必要はなく、すでに登録されているメンバーをプルダウンで選択して、発信することができる。全員に周知したいことはこの機能を使うと便利である。

ミーティングボードは、授業やミーティングで終わらなかった議論や特定の課題についての意見交換、細かなタスクの賛否、決定を急ぐ細かな情報交換等に使われている。対面式のコミュニケーションを補うための意見交換ツール

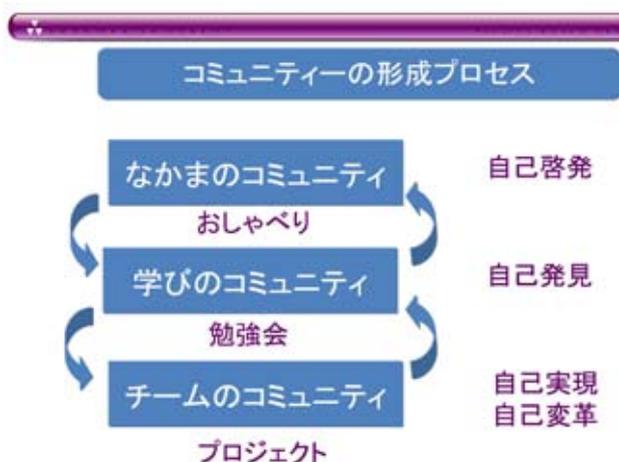


図7

るツールとともに、コミュニティ形成プロセスの支援にも対応するように工夫を加えた。「なかまのコミュニティ」「学びのコミュニティ」「チームのコミュニティ」の形成を促していくように配慮されている。

CNSは、マイページを起点として設定されており、それと科目のコミュニティが連携している。マイページには、プロフィール画面があり、自己紹介、得意なこと、不得意なこと、プロジェクトでの役割、プロジェクトでの個人目標を記入するようになっており、自分自身とプロジェクトとの関係を意識するように作られている。

マイページには、マイフレンド機能があり、他の科目の受講生や科目担当者や科目代表者を登録できる。また、お気に入りコミュニティを登録できるようになっており、自分たちの活動と関連するコミュニティをいつでも参照できるようにしている。

科目のコミュニティには、受講生・科目担当者・科目代表者以外に、学内外の科目協力者を登録することができる。地域・社会の現場で継続的に協力・提携していきたい場合には、コミュニティ内で協議の上、事務局に連絡して登録することができるようにしており、プロジェクト科目が往還型地域連携を推進していくためのツールとして有効に機能している。

こうした機能によって、他者を意識する機会を設け、自分たちのプロジェクトの客観的な位置づけを行っていききっかけを作っていくように促している。プロジェクトを推進していく上での情報交換のためのコミュニティの数も増加していくことが予想される。ただし、現状では、ミクシィのように自由にコミュニティを作成できるのではなく、受講生同士や科目担当者・科目代表者、事務局と話し合っ合意を得られたコミュニティを開設できるようにしている。たとえば、プロジェクト推進のためのお薦めの参考図書等を「ブックレビュー」コミュニティで紹介しており、学生は、それらを参照・活用していることが確認できる。担当者コミュニティ等の非公開のコミュニティを作成できるように配慮もされている。

ここでもうひとつ紹介しておきたいのが、ウェルカムログ機能である。いわゆる足あと機能であり、そのページを参照した足あとが確認できるようになっている。ミクシィにも採用されている。「ブックレビュー」で学生の参照を確認できるのは、このログ機能による。

自分のページへのアクセスを確認できるとともに、プロジェクトのコミュニティへのアクセスログも表示される。コメントを残していない場合でも、そのページを参照したかどうかを確認できることによって、個人のプロジェクトに対する関心や興味の程度を知ることができる。たとえば、出席が悪くなっている学生がいる場合でも、ウェルカムログを見ることで関心がなくなっているわけではないことを確認することができる。そうなれば、メンバーや担当者から連絡をとるタイミングも把握しやすくなる。

ウェルカムログもまた他者とのつながりを視覚化していくための機能であり、社会的なコミュニケーションを促進していくために有効に活用できる。ここでは、ウェルカムログも、コミュニティ形成の基盤整備の支援ツールとして機能している。

として活用されている。

CNSを活用することによって、誰が何をどのように担当しているのか、タスクが視覚化されてくるという効果も見落とすことはできない。それによって、プロジェクトに対する貢献度が自覚されることで、メンバーに対するリスペクトが醸成されるようになるとともに、タスクの再分配などを行うことができるようになる（図7）。

コミュニティ形成プロセス支援

こうしたプロジェクト遂行プロセスを支援す

プロジェクト学習とポートフォリオ

最後に、ジャーナル機能に触れておきたい。

CNSでは、学生の学習履歴を記録し、自ら振り返る機会を設けるようにしている。日々の活動に対するリフレクション（振り返り）が学習者に自分自身を客観的に振り返る習慣を身につけさせることになる。いわゆるポートフォリオとしてジャーナル機能を持たせている。ただし、このジャーナルは、パーソナルなポートフォリオではなく、メンバーに対して公開されており、自分の活動が常にメンバーに見えている。そのために、ジャーナルに対するコメントが、お互いの活動のフィードバックになっており、そのコメントが信頼や期待となり、学生に自信と責任を自覚させるきっかけになる。

こうしたリフレクションとフィードバックを受けることによって、自らの学びを客観的に点検・評価することができるようになる。それと同時に自分の進むべき方向を見失うことなく、プロジェクトに関わることができるようになるのが大きな教育効果である。学生同士がお互いに学びあう同期同調型の協調学習になっている。

このジャーナルが、デジタルポートフォリオになっているために、いつでも全文検索ができ、自分の気づきを歴史的に振り返ることを容易にしている。時系列的に表示されるようになっていて、いつどのようにして、その気づきをもたらされたのかをすぐに確認できるので、振り返りの機会を増やす効果もある。CNSのこれらの機能をどのように活用していくかは、ユーザーである学生に任せるようにしている。科目担当者・科目代表者の判断でフォルダー管理を学生に任せる場合もある。さまざまなモジュールを組み合わせさせて自分たちが快適に利用できる環境や条件を自ら作っていくのも、ひとつのプロジェクトマネジメントと考えている。

プロジェクト学習とポートフォリオの関係は、必ずしもジャーナルをつけることに限られたものではなく、CNSで実行されていく表現行為のすべてのプロセスをポートフォリオととらえている。ポートフォリオは、自ら振り返り、自ら気づき、自ら行動を起こしていくための未来の羅針盤であるとともに、自分自身の学びのプロセス評価のための行動記録とも言える。

議事録の書式なども「プロジェクト科目」サイトにアップされており、適宜学生がダウンロードして使うようになっている。各種書類や情報は今後、CNSによって提供されるようになる。

さらに、CNSは、すべてにコメントをつけることができるように設計されており、常になかまを意識することができるように企図されている。

ただし、個人日記やプライベートなスケジュールとして使っているために、コミュニティーを非公開にするという閉じられた人間関係を作ろうとする傾向も見られる。こうしたプロジェクトのあり方について、学生自身にいかに関活用していくべきか、議論する場を設けていきたいと考えている。

あくまでプロジェクトは、対面型のコミュニケーションを前提にしているが、実際の学生生活のなかで、プロジェクトに注力する時間と労力には自ずから限界があり、それを補う支援ツールは今後のプロジェクト科目には不可欠のツールとなっていこう。ただし、CNSは、単なるコミュニケーションツールではなく、プロジェクト推進のための基盤となるコミュニティー形成支援とリフレクションとフィードバックによる自己形成を円滑に行うことができるように設計している。このシステムは、プロジェクト活動の省力化を図ることを目的に作られたものではなく、コミュニティーをチームのコミュニティーへの成熟させていくために作られたものであり、学生の自ら学んだことを自己評価できることを目指している。SNSを大学に導入する試みは、カスタマイズしやすいオープンソースのOpenPNEを含めて活発であるが、やはり、導入の目的と設計思想を明確化し、メンテナンスと更新・管理に留意して導入することが必要であろう。

元来、プロジェクトには、流動性・増殖性・越境性という他とつながろうとする特徴が備わっている。現在進行形で進展していくプロセスの中で、課題発見・課題解決を行っていくためには、どうしても、多くのモノ・ヒト・コトと出会うことになる。そこで、実行した成果がまた次の成果を生み出していくように、現在進行形で、関係の連鎖を生み出していくことになる。その意味で、従来のシステムと衝突が起こってくる

のも当然である。「つながる」ことがプロジェクトの特性だからである。

PBLは、既存のシステムとのバランスをとりながら、同時に従来のシステムの問題点を改善していくことを通して、大学の教育の質を向上させていく機会を常に生み出していくFD・SD的な対応が求められる。常に教育の原点とは何なのかという問題提起に答えていくことが求められていると言える。

プロジェクト学習の機動性

プロジェクト科目は現在進行形で進んでいく。そのために、支援ツールも機動性が重要である。

そこで、CNSも、2009年度から携帯版が実用段階に入る。これによって、情報へのアクセスのスピードアップと更新頻度の向上が期待される。PC版CNSと携帯版を組み合わせることで、機動性を持ったプロジェクトの展開が可能になる。

さらに現在編集中なのが、「プロジェクト手帳」である。次のような特性を備えている。

* 携帯性と機動性

現在進行形のプロジェクトに対応して、常にプロジェクト手帳を携行して、いま自分が何をすべきなのか、何をしたいのかを意識させることを目的に作成している。プロジェクトの進行に応じて、情報も新陳代謝を繰り返していく。そこで、必要な情報を必要なだけ持ち歩けるようにファイル機能を持たせて、着脱可能にすることで、携帯性を高めるとともに、機動性を発揮できるようにした。



* 情報共有・時間管理

プロジェクトはチームで活動するために、情報共有と時間管理がもっとも重要である。そこで、日々更新される情報を速やかに共有して、それをスケジュール化していく必要がある。そこでプロジェクト期間をじゃばら式にして一覧できるような工夫をするとともに、自分の活動を振り返ることができるように各種リフィールを揃えた。



* A4サイズ

A4サイズの用紙を挟み込むことができるようにした。これは、パソコンとの連携を意識しており、プリントアウトした文書をそのまま折り込んで持ち歩くことができる。

* CNSとの連携

PCのCNSと連動してモバイル版が追加開発され、これによって、情報へのアクセスのスピードアップと更新頻度の向上が期待される。プロジェクト手帳は、CNSと連動して使うといったその機動性を発揮する。CNSには、プロジェクトを支援するための各種リフィールがアップされているので、適宜プリントアウトして使うことができる。

PC版CNSと携帯版CNSとプロジェクト手帳を連動して使うことによって、プロジェクト活動を円滑に運営していくことができるようになる。

プロジェクト型教育の共同研究

プロジェクト実践型のカリキュラムを実施している大学と共同研究を推進したいと、本取組の当初から計画していた。そこで、東京電機大学、専修大学、本学でPBL研究会を発足させて、事例報告から理論と実践の研究につなげていこうと、幅広くPBLの教育方法について検討を重ねてきた。会場も各大学で持ち回りとして、施設・設備・教室等の見学も兼ねることにして、研究会の会員およびゲストスピーカーの発表を定例として開催することとした。その後、甲南大学、法政大学が加わり、5大学で2ヶ月に1回のペースで研究会を開催してきた（PBL研究会について P108参照）。

なお、PBL研究会の活動以外にも、本取組の中で、PBLの実践校の訪問調査を行い、教育方法やカリキュ

ラム、地域連携、授業支援等幅広い意見交換を行うことができたことを付記しておきたい。

PBL 研究会では、それぞれの事例報告を通して、PBL の可能性と課題が明確になりつつある。

- 1) 教育方法
- 2) カリキュラム編成
- 3) 産官学地域連携
- 4) 成績評価
- 5) 授業評価・改善
- 6) 教室・教具
- 7) 授業支援体制

1)2) 学部のプロジェクト型授業には、専門科目と教養教育科目がある。専門教育の場合にも、必修科目と選択科目に設置されている場合がある。それぞれの導入形態によって、教育方法やカリキュラム編成に特徴が見られる。各大学での事例報告を通して、PBL の可能性と問題点について各論として検証できた。同志社大学では、大学院教育のなかにも導入され始めている。

プロジェクト型授業は、授業形態としては社会連携型とチュートリアル型に大別できる。PBL 研究会の多くが社会連携型 PBL の授業を展開しており、地域・社会に偏在する課題を発見・解決しようとするチーム PBL スタイルである。ただし、課題発見・解決型の授業としては、医療・看護系の PBL にみられる一定のストーリーもしくはシナリオのなかで課題の発見・解決の手法を学ぶチュートリアル PBL スタイルもある。幅広く PBL を導入していく場合には、これらとの組み合わせも必要である。

また、授業担当者のポジショニングの問題も大きい。学生主体の PBL の場合、担当者はどのようなスタンスで学生と向き合うのか、アドバイザー、コーチ、ファシリテーター、プロデューサー等、いわば PBL 型ティーチングのあり方を事例報告から導き出そうとしている。

3) 社会連携型 PBL の場合には、産官学地域連携教育でもあり、学生が地域・社会と大学をつなぐ役割であり、両者をどのようにコーディネートしていくかも、授業運営の問題として検討する必要がある。

4) 成績評価については、実践型参加型の授業としての評価指標の検討が課題である。客観的な評価指標に基づく定量的な評価とプロセスを重視する定性的な評価をどのように組み合わせしていくか。アンケート調査によるデータ分析やポートフォリオプロセス評価等について検討を加えている。

5) 授業評価・改善については、PBL が旧来のカリキュラムと異なっているために、常に授業を見直してカリキュラム編成を弾力的に運用するとともに、学生にわかりやすいカリキュラムやプログラムを整備するために各大学が取り組んでいる課題と改善策について意見交換をしている。

- 6) 教室・教具

PBL を実施するために適した学びの空間としての教室デザインや、そこで必要とされる教具について、実例を含めて具体的に提案できるように検討している。

7) 授業運営体制についても、PBL が従来の授業形態と異なるために、運営体制も教職一体のプロジェクト方式をはじめとして、既存のゼミとの連携・協力や地域・社会との具体的な提携の方法とシステムについて検討を加えている。

次年度から各大学の学生同士の発表会を企画しており、学生が所属を越えて PBL の教育効果を考える総合的な教育・研究の場としていきたい。こうした大学を越えた教育・研究両面から、PBL の可能性と課題を追求していくことは学生の学習意欲を向上させていくためにも有効であろう。

今後の課題と展望～ PBL の拠点校を目指して～

同志社大学内で展開されている PBL 型の授業の調査を行っている。学部専門科目・大学院専門科目、教養教育科目として実施されている。また、社会連携型 PBL とチュートリアル型 PBL がそれぞれに実施されており、多彩な展開を見せている。さらに課外活動における PBL の活動も盛んに行われている。学内には、

こうした多様な PBL 型の教育が実践されており、それらをモデル化して大学教育における PBL についての理論的・実践的な研究、そのための教育方法、成績評価の問題についても情報交換できる拠点が求められている。また、同志社小学校との連携に見られるように、一貫教育のなかに PBL を普及させていくことも視野に入れておきたい。

これは学内だけに止まらず、国内外で実施されている PBL の実施校との連携、共同研究を推進していくことができれば、さらに PBL の教育・研究を深化させることができるだろう。PBL 研究会における議論をベースに多くの大学との連携を模索しつつ、事例報告を基本に理論化を図っていきたい。

また、PBL 支援システム CNS の活用方法についても申請制から登録制に移行していく中で、すべてのプロジェクトに浸透させていくことを目指す。すでに、同システムを導入している大学もあり、相互の教育・研究交流を深めながら、学生の意欲、自発性を涵養していく分野に浸透させていきたい。

おわりに

本取組を通して、学生はわれわれの予想を上回る成長を遂げた。そのことが、テーマ公募制と往還型地域連携の教育効果を証明している。3年間を通して、800人余の学生が履修し、80科目程が開講された。それぞれのプロジェクトの成果はマスコミ、新聞にも取り上げられるとともに、地域・社会の現場からあたたかい支援と協力と肯定的な評価をいただいた（資料 新聞記事 P159参照）。授業アンケートでも、受講生・科目担当者の満足度は高く、自発的、自律的にプロジェクト活動を通して得た学びの奥行きを痛感させられた（資料 授業アンケート P151参照）。

2回実施されたシンポジウムも多くの参加者を得て、とりわけ、学生の事例報告に対する高い評価を得ることができた。地域・社会との連携教育の成果が、学生の実践の中に結実するとすれば、今回の取組は大きな成果を導き出すことができたと考えられる。企画したシンポジウムそのものが、学生と教員と職員が実践したプロジェクトであったとも言えよう（シンポジウム P66参照）。

同志社大学は、協働的・集団的なプロジェクトの推進を通して、問題発見・解決能力を備え、社会に貢献することができる「一国の良心」に満ちた人材を育成する（新島の良心教育の現前化）ことを目指す。また、自己評価・自己管理・自己表現ができる人材を育成するとともに、コミュニケーション能力やリーダーシップ・サポーターシップを発揮できる人材を育てたい（自由主義教育）。そして、自分のキャリアを自らデザインできる自主自立の精神をもって社会貢献できる人材を育てていくプロジェクト型教育の充実と発展を目指す。こうした歩みの中で、PBL 教育の拠点校として、教育機関の壁を越えて、全国の PBL 実践校とともにネットワークを組んでいきたいという思いを述べて、私からの報告を終えたい。

取組について

(1) 取組の概要

本学では、教養教育改革の一環として、2006年4月からプロジェクト・ベースド・ラーニング (PBL) を主眼とする「プロジェクト科目」の設置を決定し、その授業担当者を広く学内外から募っている。民間企業、NPO・NGO等の公益法人、学外の個人、学内専任教員等、多数の応募の中から、25科目前後を採択させて頂いている。

その多くは、地域社会の活性化を主題としており、正課授業によるプロジェクト遂行の実践を通して地域活性化策の具体化を追求する。加えてこのプログラムは、「社会の教育力を大学へ」という趣旨から科目担当者公募制を採用し、大学⇒地域社会という従来型、一方通行型の地域連携・活性化を超えて、地域社会⇔大学の往還型地域連携－活性化の新たなモデル形成を目指している。

(2) 取組の趣旨・目的

①取組における学生教育の目的、養成する人材像、その人材像のニーズについて

いわゆる「海図なき」時代の到来が叫ばれ始めて久しい。時代は断片的知識やマニュアル習得型人間を不要にしつつある。これからの社会で活躍できる人材は、未知の状況の只中であっても状況を的確に把握し、状況を打開する方策を自ら創案し、それを具体化できる人間であろう。それゆえ、大学教育においても学生の問題発見能力、問題解決能力を育成することの重要性が指摘され続けてきた。

しかし、そのような能力の目的意識的な育成には、従来の教育方法、授業形態の大胆な変革を必要とする。すなわち、座学中心で教員主導による知識・理論の一方的伝授という授業形態に代えて、学生主導のプロジェクト遂行型・参加型・実践型の授業形態を導入・援用していく必要がある。そのような授業形態においてこそ、学生は——特定の課題について一定の予備的知識を習得した後は——その課題解決のために「何が問題であり、問題はどこにあるか」、「どのような方策を採れば課題が解決されるか」を真剣に考え、模索する。つまり、学生はマニュアルなしで、事柄自身に即して問題を一から自ら考え抜かなければならない。

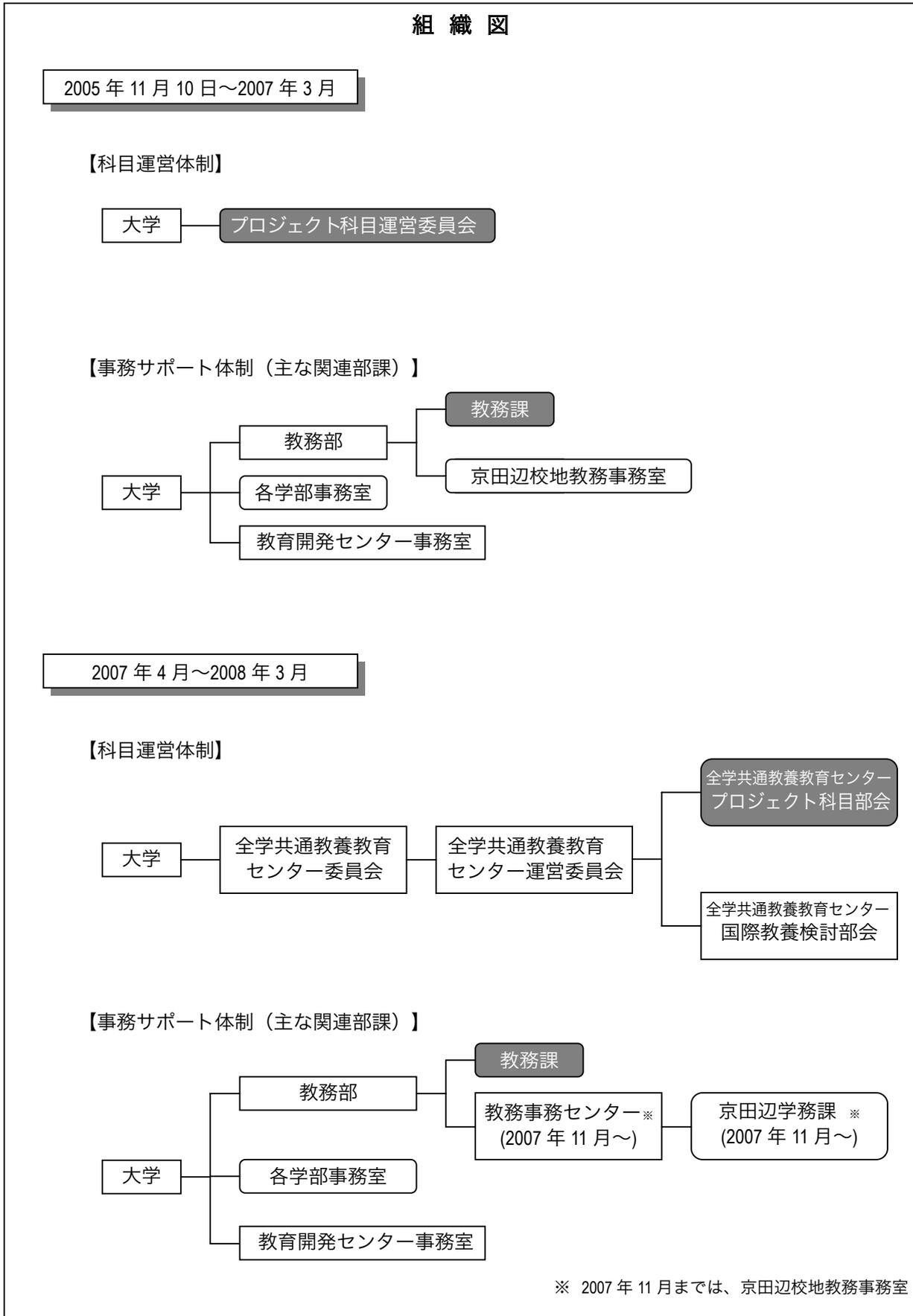
本取組は、そのようなプロジェクト遂行型の「プロジェクト科目」を全学部の学生を対象に25～30科目設定し、教養教育の一環として展開している。その目的は第一に、学生と教員が共同して「解答」なき「課題」の解決策を模索していくプロジェクトの遂行を通して、学生が自らで考え、自力で問題を発見し解決していく能力を育てることにある。それに加えて、学生はそれぞれのプロジェクトを自ら主導する——すなわち、参加メンバーと協同して「活動記録」を整理し「活動報告書」を提出する、また経費を自主管理し「会計報告書」を作成・提出する、さらに最終的には成果発表のプレゼンテーションをおこなう——ことによって、企画立案能力やコミュニケーション能力とともに、自己管理能力、マネジメント能力、プレゼンテーション能力などを身に付けることが期待できる。

「プロジェクト科目」を正課科目として導入する際のもう一つの着眼点は、プロジェクトの具体性・実践性を担保するために、科目担当者を広く学外の個人や企業、自治体、NPO等から公募するという点である。地域社会には、具体的な実践的事例や経験に基づいて「人を育てる力」が蓄積されている。本取組はその「教育力」をプロジェクトの遂行に援用し、上述のような学生の能力育成に活用することを試みる。2006年度開講科目の準備過程で発した「社会の教育力を大学へ」という訴えは、地域社会から大きな反響と賛同を得ている。本取組は、地域社会の教育力をプロジェクト科目に導入することで、同時にオフ・キャンパスの授業開催を利用して学生に生きた智慧や技術を学ばせ、「現場に学ぶ」視点を育むことも狙っている。

②取組が求める成果、効果等について

本取組が求めている第一の教育効果は、すでに上述のごとく、学生主導の授業体験によって授業に対する学生の受動的構えを変え、自律的・能動的態度を養うことである。第二の効果は、学生自らの力による問題発見・解決能力を育成することである。第三に、学生は具体的目標を共有した集団的・共同的活動のなかで、コミュニケーション能力、自己管理能力、マネジメント能力などを身につけることが期待できる。プロジェクト遂行型の授業ではそのような効果が大きいと望めることは、本学で試行的・先行的に実践された課外活動や正課授業の活動例によって確かめられている。

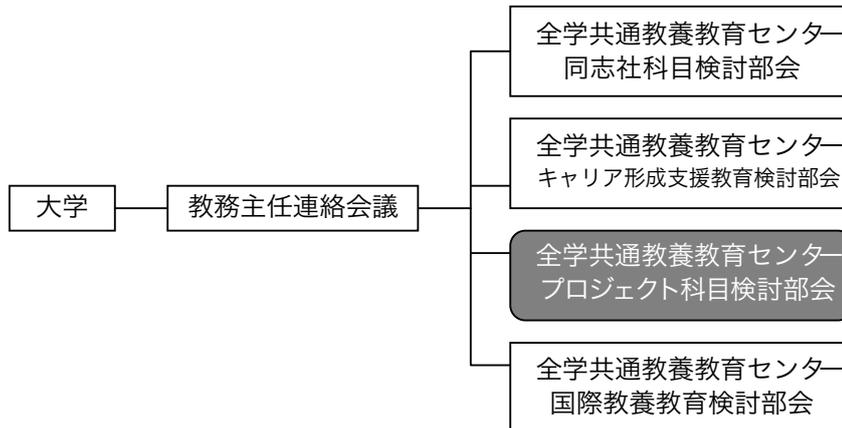
(3) 組織図



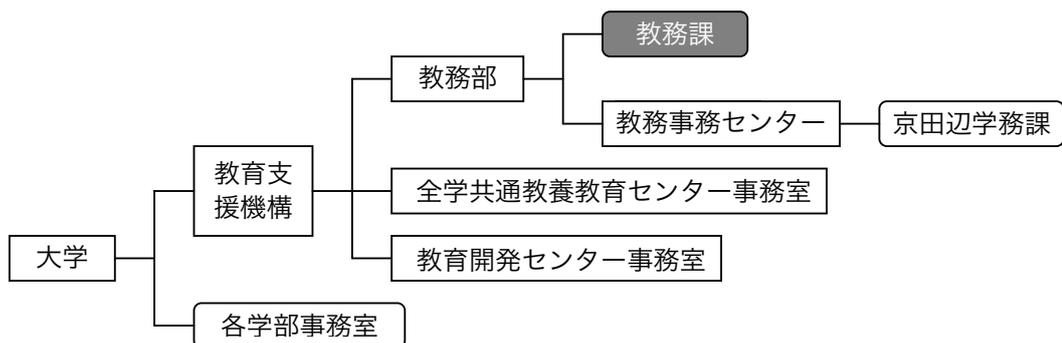
組織図

2008年4月～

【科目運営体制】

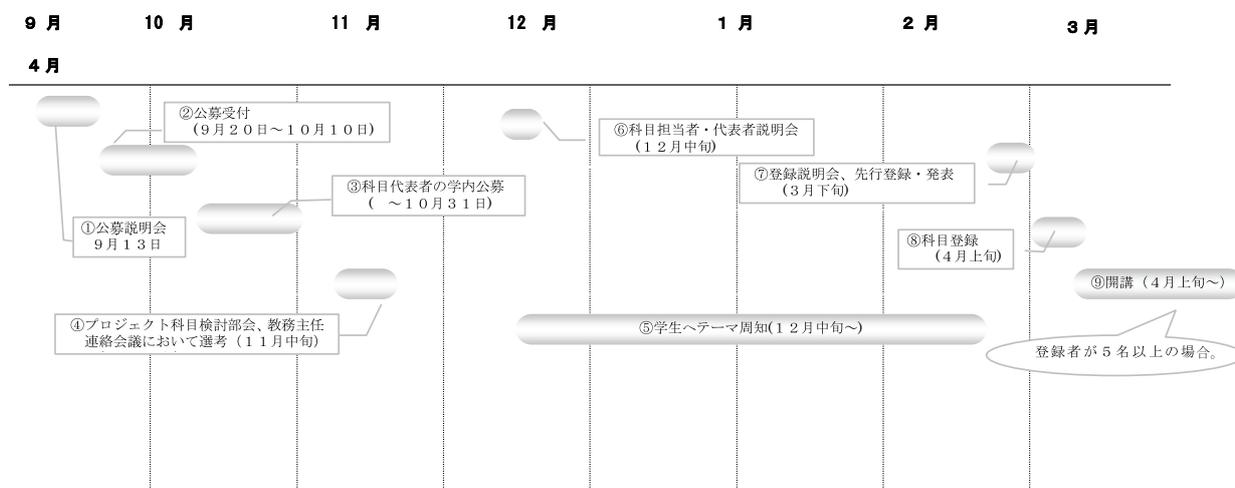


【事務サポート体制（主な関連部課）】



(4) 年間スケジュール

※開講までのスケジュール



※開講後スケジュール (2009年度予定)

年月	2009年度 開講科目について
4月初旬	科目登録 春学期科目 授業開始 (プロジェクト活動)
5月中旬	春学期科目 履修中止受付 春学期 学生リーダー・会計講習会
7月初旬	春学期 受講者・担当者アンケート
7月中旬	春学期科目 成果報告会開催
7月下旬	春学期 成果報告書提出
~8月上旬	春学期科目 成績評価提出
9月中旬	春学期・秋学期連結科目 登録修正 (削除) 秋学期科目 登録修正 (削除・追加) ガイダンス・面接・選考・発表
9月下旬	秋学期科目 授業開始 (プロジェクト活動)
11月初旬	秋学期科目 履修中止受付 秋学期 学生リーダー・会計講習会
2010年 1月上旬	秋学期 受講者・担当者アンケート 学生リーダー懇談会
1月下旬	秋学期科目 成果報告会開催 秋学期 成果報告書提出
~2月中旬	秋学期科目 成績評価提出 科目代表者・担当者懇談会

(6) プロジェクト科目関連 会議 一覧

日時	場所	会議等 (審議内容)	備考
■2005年度			
2005年7月27日(水)	有終館第1会議室	教養教育検討委員会 議事：「プロジェクト科目」の設置について →了承	
10月20日(木)	有終館第1会議室	部長会 議事：「プロジェクト科目」の設置の提案・説明 →継続審議	
10月27日(木)	有終館第1会議室	部長会 報告：「プロジェクト科目」の設置について、各学部等の意見報告	
11月10日(木)	有終館第1会議室	部長会 議事：「プロジェクト科目」の設置について →承認、決定 議事：プロジェクト科目運営委員会内規制定について →承認、決定 (大学評議会に上程)	
11月10日(木)	有終館第1会議室	大学評議会 議事：プロジェクト科目運営委員会内規制定について →承認、決定	※プロジェクト科目運営委員会、設置
11月25日(金)	光塩館地下1階 会議室	第1回プロジェクト科目運営委員会 議事：2006年度プロジェクト科目募集要領(案)について →了承 議事：プロジェクト科目授業運営の手引き(案)について →了承 懇談：プロジェクト科目 科目採択の選考基準(案)について	
2006年1月26日(木)	(TV会議) 至誠館会議室 交隣館多目的ルーム	第2回プロジェクト科目運営委員会 議事：2006年度プロジェクト科目テーマの採択について →了承	
■2006年度			
2006年5月31日(水)	至誠館会議室	第1回プロジェクト科目運営委員会 報告：2006年度科目登録結果について 報告：2006年度授業運営状況について 議事：成果報告会について →了承 議事：アンケート調査の実施について →了承	
6月28日(水)	有終館第1会議室	第2回プロジェクト科目運営委員会 報告：懇談会の開催について 報告：プロジェクト科目応募書類の利用申請について 報告：成果報告書の提出について 議事：成果報告会について →了承 議事：2007年度 プロジェクト科目 募集要領(案)について →了承 議題：プロジェクト科目 科目採択の選定方法について →了承	
11月15日(水)	有終館第1会議室	第3回プロジェクト科目運営委員会 報告：『平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)』の採択について 議事：2007年度プロジェクト科目テーマの採択について →了承	

日時	場所	会議等（審議内容）	備考
■2007年度			
2007年4月12日(木)	光塩館会議室	第1回全学共通教養教育センター委員会 議事：全学共通教養教育センター運営委員会内規について →了承	※プロジェクト科目部会、設置
6月7日(木)	(TV会議) 寧静館会議室 交隣館多目的ルーム	第1回全学共通教養教育センター運営委員会 議事：プロジェクト科目部会の設置について →了承	※プロジェクト科目部会、設置
6月21日(木)	弘風館5階会議室	第1回プロジェクト科目部会 報告：2007年度科目登録結果について 報告：2007年度春学期リーダーズ研修、会計説明会の開催結果について 報告：春学期担当者・受講生アンケートの実施、春学期成果報告会の開催について 議事：2007年度プロジェクト科目部会の事業について →了承 議事：2008年度プロジェクト科目 募集要領(案)について →了承 議事：プロジェクト科目 科目採択の選定方法について →了承 議事：プロジェクト科目に参加した学生への意識調査への協力について →了承	
6月28日(木)	(TV会議) 寧静館会議室 交隣館多目的ルーム	第2回全学共通教養教育センター運営委員会 報告：第1回プロジェクト科目部会について 報告：2007年度プロジェクト科目登録結果について 報告：2007年度プロジェクト科目春学期成果報告会の開催について 報告：2007年度プロジェクト科目部会の事業について →了承 議事：2008年度プロジェクト科目募集要領(案)について →了承 議事：プロジェクト科目 科目採択の選定方法について →了承	
7月26日(木)	光塩館会議室	第2回全学共通教養教育センター委員会 報告：2008年度プロジェクト科目の公募について	
10月25日(木)	(TV会議) 寧静館会議室 交隣館多目的ルーム	第5回全学共通教養教育センター運営委員会 報告：プロジェクト科目の応募状況及び審査について	
11月12日(月)	有終館担当理事室	第2回プロジェクト科目部会 報告：文部科学省平成20年度分の申請について 報告：PBL研究会について 報告：SNSを活用した教育・学修支援システムの構築について 議事：2007年度プロジェクト科目テーマ選定について →了承	
11月21日(水)	至誠館会議室	第6回全学共通教養教育センター運営委員会 報告：『平成20年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)』の予算について 報告：SNSの開発について 議事：2008年度プロジェクト科目 科目採択について →了承	

日時	場所	会議等（審議内容）	備考
■2008年度			
2008年4月10日(木)	寧静館会議室	第1回教務主任連絡会議 報告：全学共通教養教育センターの運営について	
4月17日(木)	光塩館会議室	第2回教務主任連絡会議 議事：全学共通教養教育センターの運営の件 →了承	※プロジェクト科目検討部会、設置
5月15日(木)	光塩館会議室	第3回教務主任連絡会議 報告：全学共通教養教育センター 部会委員について	
6月19日(木)	寧静館会議室	第5回教務主任連絡会議 報告：2008年度プロジェクト科目成果報告会について	
6月19日(木)	有終館担当理事室	第1回プロジェクト科目検討部会 報告：2008年度科目登録結果について 報告：2007年度授業運営費執行率について 報告：2008年度春学期CNS説明会、リーダーシップ講演会、会計説明会の開催結果について 報告：春学期担当者・受講生アンケートの実施、春学期成果報告会の開催について 議事：2008年度プロジェクト科目部会の事業について →了承 議事：2009年度プロジェクト科目 募集要領（案）について →了承 議事：プロジェクト科目 科目採択の選定方法について →了承	
7月3日(木)	寧静館会議室	第6回教務主任連絡会議 報告：全学共通教養教育センタープロジェクト科目検討部会 2008年度事業計画について 議事：2009年度プロジェクト科目募集要領（案）及び選定方法の件 →了承	
10月2日(木)	光塩館会議室	第8回教務主任連絡会議 報告：PBL教育に関する調査について 議事：嘱託人件 →了承 議事：2008年度全学共通教養教育科目（プロジェクト科目）担当者変更の件 →了承	
10月16日(木)	寧静館会議室	第9回教務主任連絡会議 報告：2009年度プロジェクト科目テーマ募集結果及び審査要領について	
11月17日(木)	弘風館会議室	第2回プロジェクト科目検討部会 報告：現代GP期間終了について 報告：PBL研究会について 報告：秋学期履修登録状況について 報告：秋学期講演会について 報告：PBL型教育学内調査について 議事：2009年度プロジェクト科目テーマ選定について →了承 議事：2009年度事業案について →了承 議事：シンポジウムについて →了承 議事：大学間学生交流について →了承 議事：授業運営費の取扱いについて →了承	
11月20日(木)	光塩館会議室	第11回教務主任連絡会議 議事：2009年度プロジェクト科目科目採択の件 →了承 議事：嘱託人件 →了承	
12月4日(木)	光塩館会議室	第12回教務主任連絡会議 議事：2009年度プロジェクト科目科目代表者の件 →了承	

年次別報告

2006年度

■京田辺校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」	春	株式会社 タカラトミー	工学部 片山 傳生
京エコソーププログラム制作プロジェクト	春	京都市環境保全活動センター (京エコロジーセンター) 他	工学部 光田 重幸
研究と社会をつなぐ研究会のプロデュース	春	特定非営利活動法人 KGC	工学部 下原 勝憲
官学連携による道路管理支援システム開発と自治体事業評価研究プロジェクト	春	工学部 金田 重郎	工学部 金田 重郎
地域連携子育て支援システムe子育てネット	春	工学部 芳賀 博英	工学部 芳賀 博英
サイエンス・メディアーションによる社会貢献	集中	特定非営利活動法人 けいはんな文化学術協会	工学部 田中 和人
地域(京田辺市)の中小製造業のモノづくり強化への支援	秋	NPO'ホンモノづくり プロデューサー開発センター'	工学部 佐々木 和可緒
「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)	春・秋連結	NPO法人 けいはんな薬膳研究所	工学部 渡辺 好章
F1を作ろう!('2006 JSAE学生フォーミュラカー大会出場を目指して)	春・秋連結	中村 成男	工学部 藤井 透

■今出川校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
水環境政策～「雨水局」から総合的に考える～	春	NPO法人 京都・雨水の会	総合政策科学研究科 新川 達郎
安心・安全のまちづくり実践研究調査	春	奥山 文朗	研究開発推進機構 石黒 武彦
京都の文化的景観 その伝統と保存活用 プロジェクト	春	西川 幸治	文学部 武藤 直
生活者が町の歴史と文化を守る—祇園のママとまちづくり—	春	アーバンデザイン工房	政策学部 真山 達志
隠れた京都を探索する—上京を中心に—	秋	出雲路 敬直	文化情報学部 鋤柄 俊夫
生きた「京ことば」映像アーカイブ化プロジェクト	秋	株式会社 空	文学部 橋本 和佳
感情ロボットを活用した小学生創造力育成講座設計プロジェクト	秋	株式会社 ベネッセコーポレーション 株式会社 空	文学部 余語 真夫
アートに立ち会う—美術・演劇・パフォーマンスの創造の場との共生—	秋	文学部 岡林 洋 文学部 越前 俊也	文学部 岡林 洋 文学部 越前 俊也
映像で描き出す「京町家文化」	春・秋連結	Pang Jun	社会学部 森川 眞規雄
京都暮らしの音と映像	春・秋連結	NPO 京都の文化を映像で記録する会	文化情報学部 高橋 美都
織りの世界—伝統技術の保存と伝承—	春・秋連結	龍村 光峯	文学部 山田 和人
知的障害のある人達が暮らすグループホームの設立	春・秋連結	特定非営利活動法人 わくわく	社会学部 小山 隆
私が創る京都—学生による文化イベントの企画・推進	春・秋連結	富士谷 あつ子(京都生涯教育研究所)	社会学部 岡本 民夫
コミュニティのエンパワーメントとNGOにおけるプログラム開発～滞日外国人支援プログラム～	春・秋連結	榎本 てる子	社会学部 Martha Mensendiek
小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究	春・秋連結	文学部 山田 和人	文学部 山田 和人

2007年度プロジェクト科目代表者・担当者科目説明会の開催

2007年度の科目代表者、担当者を対象に、2007年度プロジェクト科目代表者・担当者科目説明会を下記の日程で開催された。内容は1) プロジェクト科目の主旨、2) 授業の流れ、3) 評価方法について、4) その他留意事項について。

〈今出川校地〉日時:2006年12月20日(水) 1時間程度、場所:同志社大学 今出川キャンパス 明德館1番教室

〈京田辺校地〉日時:2006年12月18日(月) 1時間程度、場所:同志社大学 京田辺キャンパス 知真館1号館232番教室

2006年度秋学期の成果報告会

2007年1月22日(月)【京田辺校地】、1月23日(火)【今出川校地】において2006年度プロジェクト科目成果報告会を行った。

どのプロジェクトの発表も、映像やホームページの出来栄もプロに迫る作品が幾つかあり、学生にとっては、大きな会場でたくさんの人を前に発表する貴重な経験になった。



2006年度プロジェクト科目担当者・代表者懇談会

2006年度科目担当者・代表者の懇談会を開催した。

日時:2007年2月24日(土)12時30分～ 1時間半 場所:今出川校地 寧静館5階会議室

2007年度開講科目の先行登録・登録説明会

登録説明会・先行登録を2007年3月31日(土)に開催した。登録を希望する学生は、必ず先行登録説明会に出席し、各科目ごとに志願票を提出のうえ、科目担当者・代表者により選考が行われた。選考結果は後日は発表され、再募集の科目は引き続き日程に沿って再募集の選考を行い、科目開講が決定された。

貸出機材について(2006年度購入分)

教務課、京田辺校地教務事務室にプロジェクト科目用として下記の機材を購入した。プロジェクト科目での利用に限定して、貸出を行っている。予約可能。貸出(予約)希望者は、事務室のカウンタで申請が必要。申請は、学生・教員いずれでも問わないが、プロジェクト科目の受講生・担当教員に限定して行った(学生の申請については、学生証を提示を必要とする)。<貸出用機材> ※両校地とも同一の機材、仕様です。

●デジタルビデオカメラレコーダー(両校地、各1台) SONY DCR-SR100 ※バッグ、三脚、バッテリー2個、マイク ●デジタルカメラ(両校地、各1台) CANON IXY DIGITAL 1000 ※ケース、SDカード(512MB)

プロジェクト科目授業活動(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

プロジェクト科目「アートに立ち会う-創造の場との共生」企画展開催

2006年度プロジェクト科目『アートに立ち会う—創造の場との共生—』の授業の一環として、受講生が企画した展示会を開催した。以下は受講生からのインフォメーションです。

現在、京都国立近代美術館にてスチューデント・セレクト展の第二期展<芸術家×モデル—モデルの力>展を開催しています。プロジェクト科目【アートに立ち会う—創造の場との共生】では京都国立近代美術館の協力のもと、スチューデント・セレクト展と題して二つの展示を科目受講生が企画しました。



開催期間 2007年1月30日(火曜日)～2月25日(日曜日)

毎週日曜日午後2時から科目受講生によるギャラリートークを行っています。

是非参加してください

会場 京都国立近代美術館4階常設展示室

主催 京都国立近代美術館、同志社大学プロジェクト科目

《芸術家×モデル～モデルの力》展では人物をモチーフにした作品を集めました。私たちは人格を持つ人を取り上げた作品には〈モデルの力〉が存在すると考えました。そして芸術家とモデルの個性のぶつかり合いによって生まれる力を〈モデルの力〉と名づけました。作品にはどのように〈モデルの力〉が現れるのか。常設展の一室は人の顔がずらっと並ぶ異様な空間で体感してみてください。

2007年度

■京田辺校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」	春	株式会社 タカラトミー	工学部 片山 傳生
次世代モバイルプレーヤーの商品企画及び商品具現化	春	株式会社 ニコン	商学部 岡本 博公
「けいはんな知的特区」におけるまちづくりデザイン提案	春	株式会社 東洋設計事務所	工学部 千田 二郎
“知的財産”の最前線から学ぶ 一社会で役立つ知財を身につける	春	NPO 同志社大学産官学連携支援ネットワーク	工学部 廣安 知之
新しい学びの場としてのこども向けワークショップのデザインと実践	春	株式会社 CSKホールディング	工学部 芳賀 博英
けいはんな観光素材発掘プロジェクト	春	株式会社 日本旅行	商学部 青木 真美
「けいはんな子どもサマーキャンプ」企画運営プロジェクト	春	財団法人 京都キリスト教青年会(京都YMCA)	総合政策科学研究科 西村 仁志
京都企業に共通する優秀なDNAを探る	春	石田 勝士	工学部 和田 元
からだと心のための演劇+音楽ワークショップ	集中	矢中 紫帆	工学部 長岡 直人
「科学者のたまごで学ぼう!!N けいはんな」企画運営プロジェクト	秋	工学部 田中 和人	工学部 田中 和人
日本のモノづくりを支え元気な地域(京田辺市)中小製造業の発掘	秋	NPO ホンモノづくりプロデューサー開発センター	工学部 佐々木 和可緒
F1をつくろう!(2007 JSAE 学生フォーミュラカー大会出場を目指して)	春・秋連結	中村 成男	工学部 藤井 透
3Dコンテンツ制作プロジェクト～企画から制作まで～	春・秋連結	株式会社 アントラッド	文化情報学部 下嶋 篤
クロスカルチュラル・プレゼンテーション	春・秋連結	林 洋子	工学部 下原 勝憲
「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)	春・秋連結	NPO法人 けいはんな薬膳研究所	工学部 渡辺 好章

■今出川校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
新京都ブランドの創造	春	株式会社 おたべ	商学部 石川 健次郎
改革!京都観光～京都観光の課題リサーチと改善策プロポーザル～	春	京都市	工学部 下原 勝憲
「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト	春	植村 照	工学部 佐々木 康成
new文化創生 町屋の伝統的な行事を知り日本人の心を取りもどす(先人の知恵)	春	西陣くらしの美術館 国登録有形文化財 富田屋	文学部 井上 一稔
誰にもやさしい喫茶店をいっしょに作ろう!～地域の中の居場所作りを目指して～	秋	NPO法人 きょうと福祉ネットワーク「一期一会」	社会学部 空閑 浩人 社会学部 野村 裕美
新しいワークスタイルとオフィス環境の関係性を考える	秋	コクヨ 株式会社	文学部 鈴木 直人
京都暮らしの音と映像	春・秋連結	NPO法人 京都の文化を映像で記録する会	工学部 小泉 孝之
京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ	春・秋連結	末川 協	文学部 武藤 直
「京町家文化」再考－再生利用と伝統の継承	春・秋連結	Pang Jun	社会学部 森川 眞規雄
京都紹介ブログ・ポッドキャスト制作・配信	春・秋連結	中伏木 寛	商学部 志賀 理
量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通	春・秋連結	京都産学地域経営研究会	文学部 伊達 立晶
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト	春・秋連結	株式会社 空	文学部 橋本 和佳
新しい京都の逍遥ガイドスを作ろう!	春・秋連結	元橋 一裕 (株)フェイム「京都CF(シーエフ)」	文学部 山田 和人

2007年度プロジェクト科目リーダー・会計講習会(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

2007年5月19日京田辺校地、5月26日今出川校地でプロジェクト科目リーダー・会計講習会が開催されました。リーダー・サブリーダーを対象に、外部講師による「プロジェクト推進のための技術」と題して講演会とワークショップ、会計担当者には「授業運営費について」の講習会がありました。座談会では昨年度受講生を交え、プロジェクト推進に必要な要素は?一番苦しかったときはいつ?など、和やかな中にも真剣なやりとりが行われました。欠席者にはDVDの貸し出し、会計資料の配布がありますので、教務事務室または教務課までおこしください。



リーダー・会計講習会座談会

プロジェクト科目資料室を開設

2007年6月12日、プロジェクト科目資料室が、今出川校地弘風館5階に開設された。プロジェクト科目の活動を目的としたミーティングに使用できるほか、昨年度プロジェクト科目の資料の閲覧も可能。使用申込は今出川校地教務課で受付を行う。



プロジェクト科目資料室

◇プロジェクト科目授業活動(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

七夕コンサートのお知らせ

「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクトでは、京都のまちに似合ったクラシック・コンサート文化創りを考え、実践することを目指しています。その第1弾として、7月8日(日)、午後2時から「七夕コンサート」と題し京菓子資料館でのリュート & ソプラノによるコンサートをプロデュースしました。主催：同志社大学「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト
後援：株式会社 俵屋吉富

俵屋吉富さんの京菓子 & お抹茶付きです。チケット代は700円です。(会場の都合により32名様限定) 外国人留学生を優先に明德館前にてチケット販売を行います。

同志社大学今出川校地明德館前(10:30~16:45)

☆ for foreign students ☆

Hello!

We are planning classical concerts to create the culture of classical concerts in Kyoto. As our first event, we're going to hold a "Tanabata" concert on July 8th. At the concert, a soprano and a lutenist are going to play English love songs. After the concert, you can eat Japanese sweets. We hope you can enjoy both music and Japanese culture, "Tanabata". We're looking forward to see you!!



「クラシック・コンサート文化を創る」からのお知らせ(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)



七夕コンサート

2007年7月8日「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクトによる「七夕コンサート」が行われました。リュートとソプラノによる「イギリスの愛の歌」を聞いた後、受講生の考案した七夕の主菓子で抹茶をいただき、短冊に願いを結ぶという、総てが七夕にちなんだ企画です。留学生を含む多くの市民の方が参加し、心に染み透るようなリュートの音色と、美しいソプラノの歌声に魅了されながら、七夕のひとつときを過ごされました。

浴衣姿の受講生の行き届いた気配りが、お客様にも好評だったようです。

科目代表の佐々木康成先生から「七夕コンサート」の写真、科目担当の植村照

先生から以下のメッセージをいただきました。

「七夕コンサート」にご来聴頂きました皆様方に御礼申し上げます。

何かを創造するためには、矛盾したものを一つの場所に集めることが重要だと思います。この科目の設定も、そのような試みの一つでした。そして、どんなことでも実際に行動に移してみても初めて見えてくることがあり、見えてくれば次の行動に移せる、ということも伝えられていれば幸いです

2007年度プロジェクト科目春学期成果報告会（今出川）（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

2007年度春学期成果報告会

1) 京田辺校地開講科目

日時：2007年7月17日（火）13:00～16:00

場所：恵道館201番教室（京田辺校地）

2) 今出川校地開講科目

日時：2007年7月18日（水）13:00～15:30

場所：明德館21番教室（今出川校地）



2007年度春学期成果報告会（今出川校地）

報告は受講生が行い、発表形式は自由。各プロジェクトの内容や特性を生かし、趣向を凝らした、独創性溢れるプレゼンテーションを行った。※報告は、各科目発表12分、質疑3分の計15分。成果報告会は公開方式で、ホームページ、学内掲示板、立看板で学生だけでなく、教職員の方、一般の方にも告知を行っている。

2007年度春学期成果報告会（京田辺）が終了（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

2007年7月17日（火）2007年度春学期プロジェクト科目成果報告会（京田辺校地開催科目）が行われました。30名を超える参加者の前で、受講生が半年間の活動とその成果を報告しました。写真や図を入れて解り易く作成されたパワーポイント、パフォーマンスや手作り大絵本、報告会前日に初めて完走したマシンの動画など、各科目工夫を凝らしたプレゼンが行われました。受講生からは「伝えたいことが伝えられた」「緊張して声がかすれた」「公の場で発表することで、何が足りないかがわかった」「半期間では時間がたりなかった」「もう少し内容を煮詰めればよかった」「学んだことを活かして講習会をしたい」などの声が聞かれました。



2007年度春学期成果報告会（京田辺校地）

2007年度春学期成果報告会（今出川）が終了（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

7月18日（水）2007年度春学期プロジェクト科目成果報告会（今出川校地開催科目）が行われました。

前日の京田辺校地報告会を上回る多くの方々に参加され、受講生による成果報告が行われました。手作りの京都観光マップや科目の活動を伝えるビデオ、解り易いパワーポイントだけでなく、寸劇などのパフォーマンスもありました。また、イベントのアンケートを分析したり、引き続き活動を計画するなど、どの科目も受講生の意欲が伝わる報告会でした。受講生からは「他の発表が刺激になった」「それぞれの活動の他と違うところが発見できた」「プロジェクトを始める前と今との自分の成長を振り返りたい」などの声も聞かれました。



2007年度春学期成果報告会（今出川）

2007年度秋学期成果報告会は2008年1月22日（火）です。ご来聴歓迎します！

2008年度公募説明会を開催

2007年9月15日(土)9:30～ 京田辺校地

2007年9月15日(土)14:00～ 今出川校地

両校地において次年度の公募説明会を開催し、プロジェクト科目の趣旨やこれまでの活動を紹介するほか、授業運営上の注意点などの説明が行った。



2008年度公募説明会(今出川)

秋学期科目追加登録

秋学期開講にあたり、予め再募集を告知していた科目について再募集の選考が行われ、履修生を決定した。

「からだと心のための演劇+音楽ワークショップ」の作品発表会(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

『The Story from Ten』はじめて出会った10人が3日間で紡いだ物語—探しものはなんですか?—

日時:2007年9月27日(木)14:00～14:45

場所:京田辺校地 ローム記念館劇場空間

科目担当・矢中紫帆/科目代表・長岡直人(工学部)

「からだと心のための演劇+音楽ワークショップ」の作品発表会がローム記念館劇場空間でありました。



ローム記念館劇場空間での発表会

音楽鑑賞・演奏など、様々なワークショップの体験を積み重ねるうちに生まれたテーマをもとに、メンバーが演劇を創作しました。日常と非日常の物語の世界、自己に内在する過去と現実を織り交ぜるなかで、—探しものはなんですか?—の答えを模索していきます。物語の所々では音楽にあわせた即興のパフォーマンスもありました。

びわこトリートセンターにおいて合宿形式で行われた講義の成果が、チームワークとなって舞台上に表現されました

「new文化創生」の発表会(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)



新聞社の質問に答えるメンバー

日時:2007年10月2日(火)15:00～16:00

発表会場所:今出川校地 寧静館5階会議室

科目担当・田中峰子/科目代表・井上一稔(文学部)

暮らしの中の行事や伝統的な町家のしつらいに接し、茶道、香道、能楽などの伝統文化や歴史に関心を持つことから、学生の視点による新しい日本文化を発信することを授業のねらいとしています。発表会当日の会場では「豆腐の日」「39の日」「箸の日」「和の日」にちなんで、おみくじ付きのオリジナル豆腐や花の種が配布され、日本の食文化のよさを再確認したり、箸袋を箸守りとして使うことで、箸作法や物を大切にする気持ちを伝えたりと、身近なところからの「new文化」が提案されました。

「改革!京都観光」清水寺マップ、京都市観光局HPにUP!(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「改革!京都観光～京都観光の課題リサーチと改善策プロポーザル～」

科目担当:西村 健吾(京都市)/科目代表:下原 勝憲(工学部)

このたび、プロジェクト科目「改革!京都観光～京都観光の課題リサーチと改善策プロポーザル～」の成果として、京都の修学旅行生むけに作成した「清水寺クイズラリーマップ」が京都市観光局のHP「きょうと修学旅行ナビ」に掲載されました。<http://kyotoshugakuryoko.jp/>

プロジェクト科目専用掲示板の設置

受講生よりプロジェクト活動のイベントの告知等の掲示の希望があった場合、学生支援課の掲示板を活用していたが、“スペースが狭い”、“貼るスペースが無い”などの声が多かったことをうけ、状況を改善すべく、11月より、今出川校地にプロジェクト科目専用の掲示板を設置した。プロジェクト科目事務局からの案内やおしらせを掲示する他、プロジェクト科目の活動の一環で実施する講演会やイベントの告知などにもご利用を可能にし、科目の活動を周知する。場所は、弘風館1階の通路（教務課の北側、証明書発行機の隣）。



今出川校地弘風館1階東

量から質への「京都型ニューツーリズム」からのおしらせ（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通

科目担当：青柳 良明（京都府）

科目代表：伊達 立晶（文学部）からのお知らせです。

プロジェクト科目、<量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通>において企画中の、京都府綴喜郡井手町を中心としたモニターツアーの提案が、国土交通省のニューツーリズム創出・流通促進事業「実証事業」の採択を受けました。

旅行企画としての商品化は旅行会社がしますが、ベースの企画はプロジェクト科目の受講生が提案しているものです。

4月から本科目受講生が京都府観光部、京都府綴喜郡井手町、旅行会社とともに、住民との交流や体験をメインとした地域密着の滞在型観光「ニューツーリズム」の開発にとり組む活動が、京都新聞（2007年10月20日夕刊）に紹介されています。

さらにもうひとつ、受講生から亀岡町でのとり組みのお知らせがありました。

10月23,24日に行われた亀岡祭で、亀山城前の公園に保津川をイメージした竹灯路を作り、ライトアップを企画。訪れた人々には竹灯路の幻想的な雰囲気を楽しんで頂きました。竹灯は市内の小学生数百人に竹の灯籠の紙に絵を描いてもらい作成したものです。また、亀岡駅には巨大スクリーンを設置し、亀岡市民の笑顔を撮影した映像を流して祭りを盛り上げました。

この亀岡祭を広く知っていただくための取り組みは、亀岡市役所の方、Leafの編集者の方のご協力のもと、情報誌「Leaf」に「亀岡祭着物デートプラン」として掲載されたほか、京都新聞電子版（10月22日）でも紹介されています。



亀岡祭（10/23・24）保津川をイメージしたライトアップ

「会計・リーダーシップ講習会」開催

【日時・場所】 1) 今出川校地 会計・リーダーシップ講習会

日時：2007年11月10日（土）午前9時30分～11時30分

場所：弘風館35番教室（今出川校地）

2) 京田辺校地 会計・リーダーシップ講習会

日時：2007年11月10日（土）午後2時～4時

場所：知真館1号232番教室（京田辺校地）

【対象】 ◇会計講習会：秋学期開講科目会計担当者

◇リーダーシップ講習会：プロジェクト科目受講生、プロジェクト科目に関心のある学生

【スケジュール】 科目開講校地に限らず、どちらの講習会にも参加が可能。

1) 今出川校地 ◇会計講習会（弘風館35番教室）9：30～10：00

- ◇リーダーシップ講習会(弘風館35番教室)10:00~11:30
- 2) 京田辺校地 ◇会計講習会(知真館1号232番教室)14:00~14:30
- ◇リーダーシップ講習会(知真館1号232番教室)14:30~16:00

薬膳ジュース完成!「食育と健康」からのお知らせ(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

プロジェクト科目「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)

科目担当:井原 浩二(NPO法人 けいはんな薬膳研究所)

科目代表:渡辺 好章(工学部)

「大学生が提供する未来社会の健康促進企画~学生の為の薬膳ジュースの商品化~」として3種類の薬膳ジュースを考案し、11月末まで新町キャンパス・京田辺キャンパス生協で販売します。疲労回復、むくみを解消する人参、なし、りんご等をベースにした「秋の味覚祭」、美肌、美髪効果のあるはちみつ等の素材を紅茶仕立てにした「潤いフルーティー」、喉の渇きや肺に優しい柿を使った「秋のジュース”KAKIKA”」の3種類です。プロジェクト科目で学んだ薬膳の知識をもとに、20回の試作を重ねた成果をレシピにまとめ、生協に製造を委託しました。「秋の味覚祭」「潤いフルーティー」は生協で、「KAKIKA」は「レストランあわさい」で販売されるそうです。この機会に、食生活の中に自然の恵みを取り入れ、日ごろの健康管理を考えるきっかけにしてみてもは如何でしょうか。メンバーの取り組みは、毎日新聞(11月3日)に「秋の味覚まるやか 薬膳ジュース」「同志社大生5人が考案」として紹介されました



薬膳ジュース、お試しください!

「文化的景観」シンポジウムのお知らせ(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

プロジェクト科目「京都の文化的景観~その保全活用とまちづくりを結ぶ」

科目担当:末川 協(末川協建築設計事務所代表)

科目代表:武藤 直(文学部)

以下の日程でシンポジウムを開催します。

第一部は科目受講生の学習成果発表会、第二部では京都にフィールドをおいてご活躍されている4名のパネラーの方々にご参加いただき、かなり具体的なレベルで京都の景観について議論が行われる予定です。会場は新町キャンパス! 沢山のご来場をお待ちしています

■公開シンポジウム 「共有・継承すべき京都の文化的景観とは何か~

自問と対話を通じて」

■日 時:11月10日(土)13:00~16:00(開場12:30) 参加費:無料

■場 所:同志社大学 今出川校地 新町キャンパス 臨光館301番教室

■内 容:第一部 プロジェクト科目受講生による学習成果発表

第二部 パネルディスカッション 「共有・継承すべき京都の文化的景観とは何か」

- <パネラー> 西川幸治氏(京都大学名誉教授・滋賀県立大学名誉教授・国際日本文化研究センター客員教授)
- 井上信行氏(-京町家専門の不動産屋-エステイト信代表・NPO法人「京町家・風の会」代表理事)
- 山田公子氏(京町家友の会事務局)
- 高木勝英氏(財団法人 京都市景観・まちづくりセンター事業第二課長)

<コーディネーター>樋口 勇斗(同志社大学 商学部三年)

◇受講生からのメッセージ

本プロジェクト科目では、<景観をある時代の、ある社会の価値観を、ある領域で視覚的に体現する総体である>との前提に立ち、文化的景観について考え、その保全や発展について考察を行っています。



今回のシンポジウムではある一定の結論を出すのではなく、会場にいる全ての人に“京都の文化的景観とは何か”を考える引き出しのようなものを提供する場として位置づけています。参加された皆さんには様々な意見を参考に、改めて文化的景観とは何かを自分の胸に問いかける“自問”と、他の人の意見と照らし合わせる“対話”をして頂きたいのです。そしてこのシンポジウムをきっかけに、私たち一人一人が京都らしさを実感に持って暮らしていくことでより良い景観が形成され、ますます京都がすばらしい都市・町となっていくことを望んでいます。

「文化的景観」シンポジウム終了（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

「京都の文化的景観～その保全活用とまちづくりを結ぶ」シンポジウムが終了しました。

第一部では鴨川、堀川、上七軒などの景観について受講生からの報告があり、第二部のシンポジウムでは一般市民の方や京都をテーマとする他のプロジェクト科目の受講生など、文化・景観・環境などの京都をとりまく問題に深い関心のある参加者の間で活発な意見交換が行われました。



シンポジウム会場の様子

「F1を作ろう！」から大会報告（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

「F1を作ろう！」受講生の皆さんから、9月12日～15日の4日間、静岡県掛川市で行われた「2007学生フォーミュラーカー大会」の大会報告が届きました。

紙面の関係で全部をご紹介できませんが、車検、プレゼン審査、デザイン&コスト審査、チルト試験、重量測定、騒音試験、ブレーキ試験、スキットパッド（8の字旋回）やアクセラレーション（0→75m 加速）の走行技術などの様々な審査をクリアした過程をpptの画面で報告を受けました。颯爽とコースを走るF1の姿だけでなく、メンバー全員の地道で精密な作業やチームワークを感じます。

詳しくはプロジェクト科目テーマ一覧の以下のURLをご覧ください。

<http://www1.doshisha.ac.jp/~prj-0620/>



F1大会報告から

2008年度プロジェクト科目テーマ決定

2007年度の公募件数を上回る83件の中から2008年度プロジェクト科目として29のテーマを決定した。応募者の内訳は、民間19件、NPO13件、NGO2件、その他団体5件、個人44件である。テーマ一覧と採択結果詳細はプロジェクト科目ホームページに告知した。

学生懇談会を開催

2008年1月19日（土）、今出川校地徳照館1階会議室において、2007年度プロジェクト科目学生懇談会を開催した。出席者は2007年度のプロジェクト科目受講生16名（28プロジェクト中16プロジェクトより各1名）、山田プロジェクト科目部会長、プロジェクト科目事務局4名の、合計21名。昼食をとりながらのリラックスした雰囲気の中、山田部会長の司会のもとに、プロジェクト型教育についての感想や科目運営について意見、提案など、学生諸君より活発な意見交換が行われ、各科目のリーダーからは「社会や地域の方とのふれあいを通じて、コミュニケーション能力の向上がはかれた。いろいろと知識を吸収して楽しく活動できた反面、同時に責任も伴うのでいい加減な事はできないと思うようになった。」「メンバーのモチベーションを維持するのに、苦労した。」「最初は、プロジェクトのゴールや目標を設定するのが難しく、スタートが遅れた。」「チームを



懇談会の様子

成立させるには、目標やタスクを明確（目に見えるような形）にしないといけない。」「情報共有は大事だ。」「違うプロジェクトの学生(教員も含め)と交流できるような場や機会を用意してほしい。」などの意見が出た。

2007年度プロジェクト科目秋学期成果報告会を開催

《京田辺校地開講科目 2007年度プロジェクト科目成果報告会》

2008年1月21日（月）に京田辺校地で2007年度秋学期成果報告会（京田辺開講科目）を開催した。各プロジェクトからは、秋学期科目は半年間、春・秋連結科目は1年間の成果について力のかもったプレゼンテーションが行われた。フロアからの質問も活発に行われ、充実した報告会となった。



2007年1月21日
京田辺校地成果報告会

《今出川校地開講科目 2007年度プロジェクト科目成果報告会》

2008年1月22日（火）に今出川校地で2007年度秋学期成果報告会（今出川開講科目）を開催した。今回は動画を使った発表が目立ったが、演劇仕立ての演出に凝ったプレゼンテーションなどもあり、和やかな雰囲気の良い発表会となった。

現代 GP シンポジウム開催

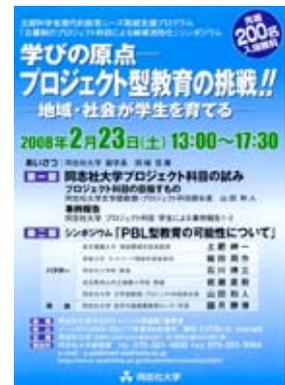
シンポジウム

『学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!—地域・社会が学生を育てる—』

【日時】 2008年2月23日（土）13:00～17:00

【場所】 今出川キャンパス（明德館1番教室）

2006年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択された「公募制のプロジェクト科目による地域活性化」の取組の一環としてシンポジウムを行った。



シンポジウム開催の報告（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

2月23日（土）にシンポジウム『学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!—地域・社会が学生を育てる—』が開催されました。大学関係者、小学校教員、教育関係機関、企業、一般、学生のたくさんの方々（132名）にご参加いただきました。ありがとうございました。

まず、第1部では、本学の取組について、紹介させていただきました。特に学生による事例発表について、フロアからたくさんの質問をいただきました。アンケートの結果でも大変ご好評を頂きました。

第2部では、PBL・チーム学習を実践されている各大学・小学校の取組をパネリストの皆さんから紹介していただき、その後、パネリストの皆さんにご登壇いただき、シンポジウムを開催しました。こちらの方もフロアから活発な質問が寄せられ、シンポジウム終了後もパネリストの皆さんへの質問が相次ぎました。

引き続き、寒梅館のHamac de Paradisで行われたレセプションにも約50名の方にご参加いただきました。レセプション会場でもPBLについてのホットな議論が行われました。殆どの学生は、こうしたシンポジウムのレセプションへの参加は、初めての経験だったようですが、終始楽しく盛り上がり、いろんな方々と意見交換ができたようで良い経験になったとのことでした。

※シンポジウムのアンケートを集計したデータはプロジェクト科目のホームページで公開しています。



科目担当者・代表者懇談会を開催（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

2008年3月1日今出川校地寧静館会議室において2007年度プロジェクト科目担当者・代表者懇談会が開催されました。当日は2007年度春学期科目、秋学期科目、春・秋連結科目の担当・代表の先生方、26名のご出席を頂きました。懇談会は、本年度の科目を終えて初めて今出川・京田辺両校地の科目担当者が会う機会でもあり、昼食をとりながら、終始和やかに行われました。



プロジェクト科目部会長による現代GPシンポジウム（2月23日開催）の報告に始まり、先生方の自己紹介、プロジェクト活動の報告から、実際の授業でのチーム作りのご苦労や、ターニングポイントとなった時のアドバイスなど、具体例を交えながらお話が続きました。共感や質問の手が挙がるなど、会場はプロジェクト型教育を行う上での率直な意見交換の場となり、あっという間に時間が過ぎました。

1月19日に行われた学生懇談会と同様に、もっと早くこのような機会が欲しかったなどの声も頂きました。事務局としても、当日頂いた貴重なご意見の数々は、今後のプロジェクト科目の活動に役立てていきたいと思っております

2008年度

■京田辺校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
新しい学びの場としてのこども向けワークショップのデザインと実践	春	株式会社 CSKホールディングス	理工学部 芳賀 博英
けいはんな観光素材発掘プロジェクト	春	株式会社 日本旅行	商学部 青木 真美
「けいはんな子どもサマーキャンプ」企画運営プロジェクト	春	財団法人 京都キリスト教青年会 (京都YMCA)	生命医科学部 田中 和人
けいはんなから世界へ真の環境対策を…	春	株式会社 カネカ	理工学部 山下 正和
地域団体商標から見た「京都ブランド商標」の育成提案	春	NPO法人 同志社大学産官学連携支援ネットワーク	理工学部 出口 博之
学生とともにつくる京たなべ・同志社総合型地域スポーツクラブ	春	竹田 正樹	スポーツ健康科学部 竹田 正樹
からだと心のための演劇+音楽ワークショップ	集中	矢中 紫帆	理工学部 長岡 直人
現場のプロに活かしたノウハウを学ぶ!～情報誌企画制作を体験～	秋	凸版印刷 株式会社	理工学部 松岡 敬
「食育と健康」(菜膳の食養生を中心として)	春・秋連結	NPO法人 けいはんな菜膳研究所	生命医科学部 渡辺 好章
「F1をつくろう!(2008 JSAE 学生フォーミュラーカー大会出場を目指して)」	春・秋連結	中村 成男	理工学部 藤井 透
玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」	春・秋連結	株式会社 タカラトミー	生命医科学部 片山 傳生
「けいはんな知的特区」におけるまちづくりデザイン提案	春・秋連結	株式会社 東洋設計事務所	理工学部 千田 二郎
体感型コンテンツの企画・運営を通じた実践的キャリア形成教育	春・秋連結	株式会社 グーデックス	文化情報学部 杉尾 武志

■今出川校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
水環境政策～「雨水局」から総合的に考える～	春	NPO法人 京都・雨水の会	総合政策科学研究科 新川 達郎
新京都みやげの創造	春	株式会社 おたべ	商学部 石川 健次郎
商店街を核にした産・官・学・民協働のコミュニティ創成研究	春	株式会社 トラベルニュース社	政策学部 今川 晃
京都暮らしの音と映像	春・秋連結	NPO法人 京都の文化を映像で記録する会	理工学部 小泉 孝之
京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ	春・秋連結	末川 協	文学部 武藤 直
京都紹介ブログ・ポッドキャスト制作・配信	春・秋連結	中伏木 寛	文化情報学部 鋤柄 俊夫
学生が拓く観光の未来「京都型ニューツーリズム」の開発と実現	春・秋連結	京都産学地域経営研究会	商学部 西村 幸子
「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト	春・秋連結	植村 照	法学部 長谷川 一年
出会いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～	春・秋連結	NPO法人 遊プロジェクト京都	理工学部 金田 重郎
「演劇で地域子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト	春・秋連結	NPO法人 フリンジシアタープロジェクト	文学部 山田 和人
私の「着てみたいきもの」をプロデュースしてみよう	春・秋連結	丸池藤井 株式会社	商学部 中村 宏治
3Dウェブ空間事始:京都学生ミュージアム創製プロジェクト	春・秋連結	株式会社 空	文学部 余語 真夫
ダンス・つながり・創造—身体で考える共生社会—	春・秋連結	原田 純子	文化情報学部 阪田 真己子

2008年度先行登録説明会・選考登録会の開催

2008年度プロジェクト科目の登録説明会および先行登録を、今出川・京田辺両校地で行った。今年も多数の履修希望者が各会場に集まり、面接や志願票による選考が行われた。選考結果は4月2日（水）10時に、今出川校地はプロジェクト科目掲示板（弘風館1F教務課東側）、京田辺校地は全学共通教養教育掲示板で告知した。また、両校地とも募集人数に達していない科目について、4月3日に行い、2008年度プロジェクト科目登録者を決定した。



印刷機の利用について（今出川校地）

今出川校地に全学共通教養教育科目で使用する発表用レジュメ印刷用に新しく印刷機（リソグラフ）を設置した。

【場 所】 明德館1階「法・経済共同印刷室」

【利用時間】 教務課開室時間と同じ

【利用方法】 印刷機利用申込書に記入して、学生証と一緒に 教務課教務係に提出する。

CNS 利用説明会を開催

今出川校地1回、京田辺校地2回の合計3回を開催した。

説明会では、ICTを活用してプロジェクト科目の活動を支援し、関係者間のコミュニケーションの機会をより一層拡大できるCNS（Communication Networking Service）システム（教育・学修支援SNS）の使い方について説明が行われた。

【今出川開講科目】

日時：2008年4月24日（木） 16時45分～（90分程度） 場所：情報処理実習教室 K21（弘風館）

【京田辺開講科目】

日時：2008年4月26日（土） 10時45分～（90分程度） 場所：情報処理実習教室 JM206（情報メディア館）

日時：2008年4月26日（土） 13時15分～（90分程度） 場所：情報処理実習教室 JM206（情報メディア館）

CNS に参加しよう（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

教育・学修支援システムCNS（Communication Networking Service）の説明会は終了しましたが、未参加のプロジェクトで使ってみたいけど、中身がよく分からないと思っているのであれば、気軽に教務課にご相談ください。随時、説明を行います。既に9つのプロジェクトから申請があり、利用されています。プロジェクト活動に関する情報やお知らせ、イベント情報などを掲載しています。プロジェクト間の交流もできます。



2008年度プロジェクト科目会計講習会

2008年5月15日・5月16日の両日、プロジェクト科目会計担当者（履修生）を対象に、京田辺・今出川両校地で会計説明会を開催した。2008年4月に学内規程が改正されたこともあり、説明会には各科目から多数の会計担当者が出席した。当日出席できなかった会計担当者に対しては教務事務センター（京田辺校地）、教務課（今出川校地）に資料を用意し、個別に説明を行った。

「F1を作ろう！」からのお知らせ（活動報告 No. 1）（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

「F1を作ろう！（2008JSAE 学生フォーミュラー大会出場を目指して）」

<京田辺校地開講科目> 科目担当：中村 成男 先生（掘場製作所）

科目代表：藤井 透 先生 (工学部)

受講生のみなさんから、今年の子体の写真と活動報告を頂きました。

昨年の子学生フォーミュラー大会で見事完走した車体は解体され、少し広くなった作業スペースに2008年度の子体が並べられ、例年より1ヶ月早いペースで今年子活動がスタートしているそうです。フレーム一本の取り付けにも2時間の討論が続けられるとか!受講生子熱い想子がF1エンジンの原動力かもしれません。

受講生のみなさんからのメッセージ

毎日、真剣に、そして楽しく活動しています。活動に興味のある方はぜひお越しになってください。



F1-2008年度車体

私の「着てみたい・きもの」からのお知らせ (活動報告 No. 2) (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう <今出川校地開講科目>

科目担当：三甲野 春二 先生 (丸池藤井株式会社)

科目代表：中村 宏治 先生 (商学部)

三甲野先生から活動報告を頂きました。5月7日には学外活動で実際に着物を手に取り、袖をとおし、最新の着物づくりの現場や、友禅の作業工程を見学したそうです。以下、科目からの活動報告をご紹介します。



4月9日、初対面の16人のメンバーが集まりプロジェクト科目がスタート。きものに関する知識や思い、プロジェクトに関する考え方も当然それぞれ違うなかで、プロジェクトとは何か、これからどのように進めていくかなど模索が始まりました。

5月に入り行動開始。きものに関する意識調査をすることで、アンケートの質問を考えるうちに、きものに関する様々な疑問が沸いてきました。5月7日には実際に色々なきものを見たり、触れたり、制作のプロセスを聞いたり、友禅工房を訪問して職人さんの話を聞くなど、きものに関する基礎知識を学習するために、きもの問屋 (丸池藤井株式会社) を訪問しました。沢山の種類のきものを見ておどろき、藤井寛さんの工房で手描き友禅を見て感激したところでした。藤井寛さんも同志社大学のOBで二度感激です。

今まで何となく「きもの」と思っていたものが、少しずつ見えてきている気がします。ミーティングの度に新たな疑問点が浮かんできます。作りたいもの、やりたいこともどんどん広がっています。今後、アンケートの分析など多くの問題点を整理していく中で、素敵な「私のきもの」を見つけていくことを楽しみにしています。

日に日にみんなの積極的な行動が増え、声が大きく聞こえてきました。ただいまプロジェクトメンバー全員で楽しんでます

「けいはんなから世界へ真の環境対策を…」からのお知らせ (活動報告 No. 8) (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「けいはんなから世界へ真の環境対策を・・・」

<京田辺校地開講科目>

科目担当：大石 孝洋 先生 (株式会社 カネカ)

科目代表：山下 正和 先生 (理工学部)

科目担当の大石 孝洋先生より活動報告を頂きました。

「21世紀は環境の世紀」と云われるなか、けいはんなから、そして受講生のみなさんからの「真の環境対策」の発信・提案を期待しています。成果報告会に向けて頑張ってください



6月7日
情報メディア館での授業

本科目では「真の環境対策」とは何かを、けいはんなから世界へ提案することを目指しプロジェクトを進めています。非常に難しいテーマですが、受講生のみなさんは熱心に議論し、まずは現状の環境対策の分析からスタートしようということになりました。考え方のひとつとしてグリーンサステナブルケミストリーを紹介しましたが、基本的には受講生のみなさんの考えを重視しています。既に環境対策にはアクティブなものやパッシブなものがあるのではないかと我々独自の分析方法を考案し、この考え方に基き各々で「真の環境対策」への提案を作製するべく、情報収集と議論を重ねています。

「商店街を核にした産・官・学・民」からのお知らせ(活動報告No.10)(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

商店街を核にした産・官・学・民協働のコミュニティ創成研究

<今出川校地開講科目>

科目担当：中奥 良則 先生（株式会社 トラベルニュース社）

科目代表：今川 晃 先生（政策学部）

SA（スチューデント・アシスタント）のOくんから活動報告が届きました。市役所、歴史研究家、高松市の商店街の方などから色々と教えて頂く一方、樟葉宮商店街のみな様のご好意で商店街の中に活動の拠点もできたそうです。



「樟葉宮歴史懇話会」
会長の方からお話を聞く

スチューデント・アシスタントO君からのメッセージ

私たちは「商店街を核にした産・官・学・民協働のコミュニティ創成研究」と題しまして、大阪府枚方市の樟葉地域をフィールドとして研究をしています。研究の主軸としては商店街というものの政策的交流というものがあるのですが、テーマにもあるように、商店街は「核」であります。しかし、核は飽くまで核であり、商店街だけを対象として扱っているというわけではありません。つまり、私たちがテーマとするところは、単なるどこにでもあるような商店街活性化プラン程度にはとどまらず、あくまで「樟葉地域」全体にたいして、どういった道筋を提示できるか、ということなのです。

これまで私たちの科目では、4月から5月にかけては、枚方市役所の方や枚方市の歴史研究家、樟葉との交流のある福井県庁の方や商店街の先進的事例を学ぶために高松市の丸亀町商店会の方などをゲストスピーカーとしてお招きしました。6月以降は実際に樟葉地域にフィールドワークに入り、商店街の各お店の方への個別ヒアリングにおいて商店街の現状などをうかがい、樟葉中学校の校長先生には教育的観点から見た樟葉地域についてご意見を伺いました。このほかにも多くの人からのヒアリングを通じ、多角的な観点から樟葉地域を考えている最中です。

写真にありますのもそのヒアリングの一環でありまして、樟葉地域の歴史について顕彰しておられる「樟葉宮歴史懇話会」の長濱一郎会長に、樟葉という土地の持つ歴史性や市民団体と地域・行政などのかかわりについてお話を伺っているところです。

「出会いを楽しめる空間づくり」からのお知らせ(活動報告No.11)(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

出会いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～<今出川校地開講科目>

科目担当：上野 康治 先生（NPO 法人 遊プロジェクト京都）

科目代表：金田 重郎 先生（理工学部）

科目担当の上野康治先生から活動報告を頂きました。ラジオカフェで、プチイベントをされるそうです。ラジオカフェ、ご存知ですか？京都のまんなか、三条御幸町通り角のレトロでおしゃれな建物の中にあるラジオ局です。放送日が決まったら、聞きたいですね！以下、上野先生からのメッセージです。



5月29日新風館での見学風景

わたしたちは、まずはじめに、各々が、【自分にとっての遊び】【自分にとって楽しいこと】について発表

しました。それから、3名ずつのユニットをくみ、【出会いをつうじて伝えたいこと】のコンセプトづくりをおこない、発表しました。そして、それらをふまえ、いま、みんなで、メインイベント（およびラジオ）へ向けた、企画策定・チーム編成・計画づくりをおこなっております。

また、それと並行して、会場見学や番組収録現場見学（ラジオカフェ）をおこないました。写真は、会場候補のひとつである新風館での見学風景です。そのなか、メインに向けた課題を見つけるための試みが必要であると気づきました。現在、計17名のメンバーが、2チーム（各8名）およびディレクター（1名）に分かれ、メインイベント（およびラジオ）へ向けた、プレのプチイベント（およびラジオ）の準備をおこなっております。

プチイベントの会場は、ラジオカフェのカフェスペース。開催時期は、7月8日火曜日です。また、プチラジオは、メインと同じ、ラジオカフェにて放送をおこないます（放送日未定）。

本科目においては、教員が、あらかじめコンセプトやアウトプットのモデルを指定し、それに沿って、学生さんが、カタチにしていく、「答え合わせ」のようなプロセスを、とっていません。学生さんが自分たちで、「何をすべきか」を考え、メインのアウトプットにつなげる。そのきっかけのひとつに、プチイベント（およびラジオ）が位置づけられればと思っております。

「演劇で地域の子ども達と学ぶ」からのお知らせ(活動報告 No.12) (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「演劇で地域の子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト < 今出川校地開講科目 >

科目担当：蓮行 先生（NPO 法人フリンジシアタープロジェクト）

科目代表：山田 和人 先生（文学部）

科目担当の蓮行先生から活動報告を頂きました。写真は通常の授業風景ですが、座っているだけで、これだけ自然な笑顔！何かが始まりそうな予感がします。お迎えするゲストも毎回個性的で魅力的な方ばかりだそうです。以下、蓮行先生からのメッセージです。



6月19日 糸井先生を囲んで

「演劇を通して、コミュニケーション力、表現力、段取り力を学びます。子どもたちには演劇体験を通じて、人とのつながりを感じ、自分を表現するきっかけにしてほしいと思っています。

そんな演劇を体験してもらうためには、まず、私たちがコミュニケーション力、表現力を身に付けなければなりません。授業ではこれまでに、演技に必要な発声練習、体をつかっの表現方法、コミュニケーションゲームを実施してきました。私の主導で行う時もあれば、学生諸君の主導で進行する時もあります。なにせ子ども達をナビゲートするのはPJメンバーです。毎度緊張している様子ですが、日々能力アップしている頼もしいメンバーです。

先日、同志社小学校さんへ企画書を持って演劇ワークショップのプレゼンに行きました。見事プレゼン成功！春学期中に1日、そして秋学期には1週間以上のワークショップ実施の機会を頂き、これからいよいよ本格的に、小学校での演劇ワークショップに向けての準備が始まります。

「京たなべ・同志社総合型地域スポーツクラブ」からのお知らせ(活動報告No.13) (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

学生とともに作る京たなべ・同志社総合型地域スポーツクラブ < 京田辺校地開講科目 >

科目担当・科目代表：竹田 正樹 先生（スポーツ健康科学部）

「学生とともに作る京たなべ・同志社総合型地域スポーツクラブ」科目担当・科目代表の竹田先生から活動報告を頂きました。他にも、プロジェクトメンバーを真剣な表情で見つめる小学生のみなさんの様子や、ボールを使っての和やかな雰囲気授業風景など、写真も沢山頂きました。以下、竹田先生からのメッセージです。



このクラスは学生6名と私（科目代表者兼プロジェクト代表者）の7人でスタートしました。受講生はすべて4年生でそれぞれ就職活動で忙しく、全員が揃ったことは未だに一度もありませんが、出席してくれた学生は非常に積極的で、毎回、活発な意見交換が行われています。

そもそも自治体を中心とした総合型地域スポーツクラブの設立は、それぞれの自治体における全国共通の課題です。市民・町民・村民の皆が、いつでも気軽に、世代を超えてスポーツが出来る機会が与えられるよう整えることがスポーツクラブ設立の主たる目的です。

京田辺市としてもどのようなクラブを作るべきかに関して、3年前から議論を重ねてまいりました（たまた私が京田辺市のスポーツ振興審議会会長であったので）。そこで考えついた案が、京田辺市の特長を生かすということでの同志社大学との連携でした。幸いにも、大学としても地域への社会的貢献が叫ばれる中でしたので、京田辺市と同志社大学における包括協定の一環として、このクラブをスタートさせることが出来ました。このプロジェクト科目は、本スポーツクラブの事業の一環と位置づけております。そして、地域住民にスポーツに触れる機会を提供するためのプロジェクトを計画しております。

現在計画中のものは、大学体育会のいくつかの武道系クラブの協力を得て、演武大会を行い、対象としている小学生に経験をして貰うというものです。学校教育の改善や子どもの精神的・肉体的増強が叫ばれる中、日本古来の精神論に基づく武道の復活と人気の回復は、多少なりとも、教育的効果があるものと判断し、武道を取り上げることとしました。

プロジェクトは現在進行中であり、計画段階ですが、秋・冬頃の開催を目指して取り組んでいます。まだ時間があると思っても、色々この先のことを考えるとそれほど悠長なことはいってられないことに気づき、今から、計画的に事を進めていかなければならないと皆が認識しております。掲載した写真は、京たなべ・同志社スポーツクラブの活動の一環として現在行っている子どもを対象としたフラッグフットボール教室を授業で見学に行ったときのものです。小学生を対象とすることの大変さを肌で感じ取ってくれたと思います。

「ダンス・つながり・創造」からのお知らせ（活動報告 No.15）（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

ダンス・つながり・創造－身体で考える共生社会－＜今出川校地開講科目＞

科目担当：原田 純子 先生

科目代表：阪田 真己子 先生（文化情報学部）

「ダンス・つながり・創造」の原田先生から活動報告第2弾を頂戴しました。学外活動で大阪府吹田市にある国立民族学博物館に行かれた時のものです。当日は、NHK教育テレビの番組「福祉ネットワーク」が片岡亮太さんの取材中でしたので、今回のワークショップにも取材が入りました。放送日時は7月10日午後8時からです。みなさん、是非見てください！以下、原田先生からのメッセージです。



6月8日 国立民族学博物館

先週の日曜日（6月8日）、国立民族学博物館（みんぱく）での授業を終えました。

視覚障害を持つ和太鼓奏者の片岡亮太さんが参加してくださり、その他外部からの参加者も加えての賑やかなワークショップでした。非常に楽しく有意義な時間を過ごしました。

今回のワークショップで、学生諸君は自分たちが秋に実行するワークショップのイメージが掴めたことと思います。

是非、実のあるワークショップを計画して欲しいと願っています。

「新しい学びの場としてのこども向けワークショップ」からのお知らせ（活動報告No.20）（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

新しい学びの場としてのこども向けワークショップのデザインと実践 ＜京田辺校地開講科目＞

科目担当：松本 亮子 先生（株式会社 CSK ホールディングス）

科目代表：芳賀 博英 先生 (理工学部)

サブリーダー N 君からの報告です。

おかげさまで、6月29日(日)大川センターにて「音ワークショップ」の開催を無事行うことができました。昨日取材をしていただいた報道関係者様のご報告です。

読売新聞社 読売新聞 6月30日朝刊京都欄にて掲載

同志社大学が実践型授業として行う「プロジェクト科目」の一環として、今回のワークショップを「表現の楽しさ 同大生”伝授”」との見出しで紹介。「水が流れる音や風の音などをコンピューターから流し、児童たちに、そこから想像されるデザインや紙や布、綿などを張り合わせて表現してもらった。」との記事とともに、当日の写真も掲載されました。

KCN 京都 HP『番組制作裏の裏!』にて掲載 (7月7日から掲載予定)

URL : <http://www.kcn-kyoto.jp/main/tv/2008uraura/0805/index.html>

「玩具産業を通じて学ぶ」からのお知らせ (活動報告 No.23) (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」

< 京田辺校地開講科目 >

科目担当：渡辺 公貴 先生 (株式会社 タカラトミー)

科目代表：片山 傅生 先生 (生命医科学部)

活動報告第三弾は会計担当者の Y さんからです。貼付写真は東京トイショーにて i-SOBOT の前での記念写真です。

受講生・商学部2回・Y さんからのメッセージ



東京トイショーにて

私たちが取り組む、『玩具を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」』では、身近な玩具というツールを通して、企画、開発、マーケティングにいたるまでの様々な過程を実践で学びます。自分たちが企画開発をした商品が商品化される可能性もあり、楽しさの中に大きな遣り甲斐があります。

現在、私は太陽光で回転し続ける地球儀企画に、チームで取り組んでいます。この地球儀を環境問題対策のシンボル、また、数十年後の社会を担うことになる子供たちの環境教育を促進させる玩具にすることが私たちの目標です。そのためには、プロモーションなどで様々な活躍されている方とのコラボレーションが効果的だと考え、外部の方とも積極的に交流しています。

今後、個人の商品企画をする上で、自分のアイデアを社会が必要としているものに変換するというのは、まだまだ難しいですが、最終的には何か商品化できるような玩具を考えたいと意気込んでいます。

「クラシック・コンサート文化を創る」からのお知らせ (活動報告 No.24) (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト < 今出川校地開講科目 >

科目担当：植村 照 先生

科目代表：長谷川 一年 先生 (法学部)

科目担当の植村先生から活動報告を頂きました。夏らしいムシムシした陽気になって来ましたが、7月12日はゼスト御池にちょっと途中下車してみても？地下街に響きわたる口笛の爽やかな音色と古楽の懐かしいメロディーでひと時の涼を感じてください。

【事業名】ゼスト御池・同志社大学プロジェクト科目共同企画第一弾「口笛と古楽のコンサート」

【日 時】2008年7月12日 (土)13:00~



コンサートのチラシ

- 【場 所】ゼスト御池 河原町広場 地下鉄東西線「京都市役所前」駅下車すぐ
 【対 象】一般
 【主 催】同志社大学プロジェクト科目「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト
 【後 援】京都御池地下街株式会社

「クラシック・コンサート文化を創る」からのお知らせ(活動報告No25)(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト <今出川校地開講科目>

科目担当：植村 照 先生

科目代表：長谷川 一年 先生（法学部）

活動報告第二弾はSA（スチューデント・アシスタント）経済学部4回生・谷 尚樹さんからのメッセージと受講生荒上拓人君からのコメントです。

SA の谷 尚樹さんからのメッセージ



ゼスト御池にて

こんにちは、私たちは「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト、略してクラブロです。クラブロは伝統を守りつつ絶えず変化を続ける京都という街で新しいクラシック・コンサートの在り方を考えることを目的としています。そのためまずは試験的にコンサートを開こうと考えていたのですが、様々な方のご厚意により第一弾から大々的に行うことになりました!!

クラブロメンバー一同、人とのつながりの温かさを感じています。7月12日（土）ゼスト御池にてクラブロ企画第一弾開催決定!!

当日は世界一の口笛奏者、儀間太久実さんと西洋古楽楽団、ヘアベルコンサートさんをお迎えします。有名な曲ばかりなのでクラシックに詳しくない方でもお楽しみいただけます。興味を持たれた方はぜひ足を運んでみてください。開演時刻は13時から14時までを予定しています。入場無料です。このコンサートを成功させるため、先日ゼスト御池さんとお話してきました。話し合いの感想をメンバーの荒上拓人くんに聞きました。

メンバー荒上拓人君からのコメント

この日は植村先生とSAの谷さんを含む、7人でゼスト御池に挨拶と簡単な打合せにお伺いしました。こちらの予想に反して、先方は代表取締役の方をはじめ重役の方がいらっしゃり、思わず緊張してしまいました。しかし、代表取締役の方が大変気さくな方で、その緊張もすぐに吹き飛ばされました。さらにコンサートを非常に楽しみにしているという事で、コンサート成功へ向けて一丸となって頑張っていこうと、メンバーの士気が高まりました

ゼスト御池「クラシック・コンサート」開催(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

2008年7月12日（土）、「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト（科目担当：植村照先生、科目代表：長谷川一年先生）のメンバーによる、クラシック・コンサート第一弾、「口笛と古楽のコンサート」がゼスト御池の河原町広場で行われました。

「情熱大陸」のテーマや「トルコ行進曲」、「ハンガリーの踊り」や「グリーンズリーヴス」といった馴染みのあるメロディーに、思わず足をとめて聞き入る人もいて、なかなかの盛況でした。第二弾は一体どこで?! 次のコンサートを楽しみにしているファンも出来たのではないのでしょうか。



7月12日 ゼスト御池広場

「けいはんな知的特区」からのお知らせ(活動報告 No.28)(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「けいはんな知的特区」におけるまちづくりデザイン提案 <京田辺校地開講科目>

科目担当：齋藤 篤史 先生（株式会社 東洋設計事務所）

科目代表：千田 二郎 先生（理工学部）

リーダーの工学部4年A君から活動報告です。



現在私たちは、景観について考えるチームと街区について考えるチームの2チームに分かれて活動を行なっています。景観チームでは、まちの景観を形成する人の目に映る部分のデザインについて考えています。同志社キャンパス内で私たちが惹かれる要素を同志社山手で採用することで、同志社山手に住む人々や立ち寄った人々に快適な感覚を与える「同志社らしい」街を作りたいと考えています。

また、街区チームでは鳥瞰的な視点に立ち、大きなスケールで街区全体について考えています。このチームでは歩行者と車両の分離を考え、歩行者専用のグリーンロードや住居者以外の自動車が街区内を通行することを抑制することで街区内の住民の安心安全を実現できるのではと考えています。

今後は二つのチームで話し合ったことをひとつにまとめ、私たちの街を提案していきます。

「水環境政策」雨水タンクを新町キャンパスに設置

水環境政策～「雨水局」から総合的に考える～<今出川校地開講科目>

科目担当：上田正幸先生

科目代表：新川達郎先生（総合政策科学研究科）

メンバーの提案により、本学新町キャンパス尋真館入り口横に雨水タンクが設置されました。環境・防災・教育など、設置をきっかけに「雨水局」から総合的に考える活動が広がりそうです。写真は雨水タンクに接続するため、雨どいを切断しているところです。最初にのこぎりの歯をいれたのはリーダーのT君でした。



7月18日設置中の雨水タンク

「ブログ・ポッドキャスト」各科目の活動を取材

「京都紹介ブログ・ポッドキャスト<今出川校地開講科目>

科目担当：中伏木寛先生

科目代表：鋤柄俊夫先生（文化情報学部）

この日は「水環境政策」のメンバーによる「雨水タンク」設置を、新町キャンパスに取材されました。インタビュアーとカメラマンの息のあったメンバーが、各科目を取材される予定です。「京都裏路地」の新企画です。



「水環境政策」の活動を取材

2008年度春学期成果報告会を開催

1) 京田辺校地開講科目 日時：2008年7月23日（水）13:00～15:55

場所：夢告館102番教室（京田辺校地）

2) 今出川校地開講科目 日時：2008年7月24日（木）13:00～15:50

場所：明德館21番教室（今出川校地）

受講生による工夫を凝らしたプレゼンテーションに、会場からもたくさんの質問が寄せられました。映像や演劇による演出など、パフォーマンスの工夫もありました。

とりわけ、京田辺校地の報告会は、学生からの質問が活発に出て、質疑応答で大いに盛り上がりました。

受講生からは「発表時間が短すぎて言いたいことがうまく伝えられなかった」「他のプロジェクトの発表がとても参考になった」「秋学期にはもっとうまくプ



今出川校地の発表風景



会場からの質問

レゼンテーションをしたい」「秋学期に向けて活動を充実させたい」などの声が聞かれました

2009年度プロジェクト科目公募説明会が開催



2009年度公募説明会（今出川）

2008年9月13日（土）、京田辺・今出川両校地において2009年度プロジェクト科目公募説明会を開催した。参加者からは熱心な質問が続き、本学プロジェクト科目に対する関心の高さと、企業・NPO・個人を問わず応募をお考えの方々の熱意を感じた。公募締切は2008年10月10日（金）20:30まで。郵送もしくは教務開時間内に窓口で受付を行った。



「きもの」の成果報告の様子

「F1をつくろう！」からのお知らせ（活動報告 No.32）（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

F1をつくろう！（2008学生フォーミュラーカー大会出場を目指して）

科目担当者：中村 成男 先生（株式会社 堀場製作所）

科目代表者：藤井 透 先生（理工学部）

9月10日～13日の4日間、静岡県袋井市のエコパ（小笠山総合運動公園）において、社団法人自動車技術会主催「2008全日本学生フォーミュラーカー大会」が開催されました。おめでとうございます！



9月13日「学生フォーミュラーカー大会」表彰式

第6回学生フォーミュラー大会が終了しました。わが同志社チームは、全科目に出場できて耐久レースも走りきりました。総合成績は、出場77校中 13位、それに省エネ賞 3位、自動車工業会賞 6位を頂戴して、みんな大喜びです。

ぜひ、自技会のホームページ、DUFPPのホームページを参照いただきたいと思います。

<http://www1.doshisha.ac.jp/%7Eprj-0620/>

<http://www.jsae.or.jp/>

今日までの支援をありがとうございました。これからも、よろしくお願いします。

（株）堀場製作所 中村 成男

プロジェクト科目秋学期講演会を開催

日時：11月6日（木）16時40分～

場所：クラーク館チャペル（2F）【今出川校地】

内容：講演「JTB 西日本の取組み～交流文化産業をめざして～」

渡部 顕 氏（株式会社 JTB 西日本 EC 営業部開発第3課長）

報告「同志社大学の CNS の活用について」

三宅 将史 さん（文学部4年生）

株式会社 JTB 西日本 EC 営業部開発第3課長・渡部顕氏をお招きし、講演を企画した。

渡部氏は交流文化産業を目指す JTB 西日本の取り組みを、地域振興・セールスプロモーション・主催事業の3つのカテゴリごとに具体的な事例を紹介。参加者に活動のヒントをを与えるだけでなく、質疑応答では各プロジェクトを代表して参加したメンバーに個別にアドバイスをされるなど、充実した時間となった。後半は受講生の三宅さんから、CNSの利点をフルに活用したプロジェクト活動の事例報告があり、モチベーションを上げる工夫や「CNSの達人」ならではの使い勝手の要望などが提案された。



「京都の文化的景観」からのお知らせ(活動報告 No.34) (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「京都の文化的景観～その保全活用とまちづくりを結ぶ～」

<今出川校地開講科目>

科目担当：末川 協 先生

科目代表：武藤 直 先生 (文学部)

メンバーから町家べんがら塗り体験イベントのお知らせを頂きました。自然と共にたたずむ町家、人がすれ違い行きかう幅の小路、そして昔ながらのべんがら塗り! 京都しかない、京都でないと出来ない体験です。



この度、標記のプロジェクトにおいて、授業活動の一環として京都市内の町家修繕イベントを企画いたしました。町家が存在する京都の景観に欠くことの出来ない「べんがら」※を、市民と共に塗るという体験を通して、京都文化的景観の保全に貢献出来るイベントとなっています。

【日 時】 2008年11月1日(土)・8日(土)・15日(土)

午前の部10:00～13:00、 午後の部14:00～17:00

【場 所】 11月1日(土) あずきや 京都市東山区三条通東

11月8日(土) でまち家 京都市上京区寺町通今出川下ル

11月15日(土) 未定 ※担当者へお問い合わせ下さい。

【対 象】 学生・一般(小学生以上であればどなたでも)

【内 容】 町家のベンガラ塗り

【費 用】 無料

【申込方法】 問い合わせ先(同志社大学教務課 ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp) まで連絡をお願いします。

【主 催】 同志社大学PJ科目 京都の文化的景観～その保全活用とまちづくりを結ぶ～

【参照 URL】 同志社大学プロジェクト科目 <http://www1.doshisha.ac.jp/%7Eprj-0812/appeal.html>

※「べんがら」とは

古くから用いられた赤色顔料で、紅殻(べんがら)と呼ばれる酸化第二鉄(赤サビ)を主成分とした粉末にエゴマ油などを混ぜて塗られているため、紅殻格子とも呼ばれます。紅殻には防腐、防虫効果があり、また町屋の外観を整えることから、景観に統一性をもたせることも出来ます。

本科目では、文化的景観というものを《その地域に固有のこれまでの人々の生業や文化の歴史を後世に継承し、さらに新たな文化や価値の創造に主体的に寄与するもの》と定義付けました。その上で、京都の文化的景観の要素として欠くことの出来ない町家をこの科目の主要テーマとして設定することにいたしました。

町家の商業的活用は近年ブームの観を呈し、多くの人にその存在が知られるようになってきた反面、町家本来の機能である住空間としての役割は未だ認知されず、今後も見直されることがほとんどないという実感をえました。そこで、住空間の魅力をより多くの人に体験してもらい、住空間としての町家を見直すきっかけづくりを提供したいと考え、比較的簡単に景観に目を向けてもらう点でもインパクトの強いと思われるべんがら塗りの機会を設定して、学生に参加をよびかけ、実際町家に触れてもらうことで伝統や歴史を後世に伝え、新価値・文化の創造のきっかけとします。



メンバーによる「べんがら塗り」の説明

「京都の文化的景観」からのお知らせ(活動報告No.36)(プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「京都の文化的景観～その保全活用とまちづくりを結ぶ～」

<今出川校地開講科目>

科目担当：末川 協 先生

科目代表：武藤 直 先生 (文学部)

11月8日（土）上京区寺町今出川の町家「でまち家」でプロジェクト科目メンバーと一般市民の方による「べんがら塗り」が行われました。同家は大正時代に建てられた商家で、店部分、坪庭、おくどさん、離れ、箱階段など町家のたたずまいを今に残しています。メンバーによる「べんがら」や「町家」の説明の後、早速格子部分のべんがら塗りが始まりました。寺町通りに面している事もあり、通りがかりの方たちが思わず自転車を止めるなど、いつの間にか人だかりが出来、市民の方々の町家への関心の高さが伺われました。



11月15日（土）には同町家で仕上げが行われます。引き続き参加者を募集中です。

「遊空間プロデュース」からのお知らせ（活動報告 No.42）（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

出会いを楽しめる空間づくり～遊空間プロデュース～

< 今出川校地開講科目 >

科目担当者：上野 康治 先生（NPO 遊プロジェクト京都）

科目代表者：金田 重郎 先生（理工学部）

2008年11月9日（日）、本科目におけるメインイベント「和から輪へ～おみやげは心を灯す和のあかり～」が、新風館において開催されました。

この日の記録には、来訪者ならびに、来訪者をおもてなしているメンバー（受講生）のとても多くの笑顔があふれています。来訪者とメンバーが、出会いをともに楽しめていたからでしょう。

これは、春・秋学期の活動をつうじて、メンバーひとりひとりが、「楽しませることを楽しむ」という共有のあり方について考え、動き、コミュニケーションをしてきた結果です。それは、いいかえれば、メンバーが、学外（地域社会）のひとたちとのかかわりによって、自分たちの「プロジェクト」をつくりだせた成果です。

このプロジェクトにかかわったすべてのひとに、心より感謝申し上げます。

科目担当 上野康治



今出川校地 EVE 祭においてプロジェクト科目出展（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

2008年11月25日（火）～28日（金）今出川校地 EVE 祭が開催され、オープニングでは出展各団体のパレードが今出川校地メインストリートで行われた。

京田辺校地開講プロジェクト科目「F1をつくろう!」では、メンバーが2008年度学生フォーミュラー大会13位に輝いたF1車両を今出川校地まで運び込んで、これまでの成果をアピールした。「F1」会場には、メンバーからの呼びかけで、他にも「私たちの着てみたいきものをプロデュースしてみよう」「出会いを楽しめる空間づくり～遊空間プロジェクト」「水環境政策～雨水局から考える」などの各プロジェクト科目の展示も行われた。

また、今出川校地開講科目「私たちの着てみたいきものをプロデュースしてみよう」の科目は今出川校地内別会場でも出展し、きもの着付け体験、きものコーディネート人気投票・アンケートなどの独自のイベントを行った。また、新町キャンパス大学生協食堂では、京田辺校地開講科目「食育と健康（薬膳の食養生を中心として）」のメンバーが薬膳の知識に基づいて提案したメニュー（落花生と栗のコロッケ、さばと鶏のハンバーグ）が販売し、連日売り切れの人気商品となった。さらに大学生協の各テーブルの上には薬膳メニューの各食材について・・・栗には胃を丈夫にする働き、落花生には肌を潤す働きがあります・・・といった薬膳豆知識のポップが置かれていて、薬膳の知識にかなった生協メニューの組み合わせを紹介した。



EVE 祭オープニングパレード



落花生と栗のコロッケ

EVE 祭プロジェクト報告 (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

2008年11月28日、今年も盛況のうちに今出川校地 EVE 祭が終了しました。

今年は「F1を作ろう!」のメンバーの呼びかけで2006年のプロジェクト科目開講以来初の学生企画、「プロジェクト科目展」が実現いたしました。「F1」の皆さんには厚く御礼申し上げます。

会場の至誠館2番教室前には今年度大会13位入賞の「F1」車両と、プレゼン用パネルが展示され、来場者にはメンバーによる丁寧な説明が行われていました。また、寧静館の会場では「きもの」のメンバーによるコーディネート例の人気投票、授業で製作された着物の展示や着付け体験などが行われ、こちらも来場者の反応から、これまでのプロジェクト活動に対する確かな手ごたえを感じていたようです。

写真は「F1」会場での一枚です。まさに今出川校地科目と京田辺校地科目のコラボレーションといったところです。



EVE 祭11月25日～28日
「F1」と「きもの」のコラボ

「新京都みやげ」しょうゆシュークリーム (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

「新京都みやげの創造」<今出川校地開講科目>

科目担当者：酒井 宏彰 先生 (株式会社 おたべ)

科目代表者：石川 健次郎 先生 (商学部)

「新京都みやげの創造」では新しい京都みやげを創造し、市場導入までのビジネスモデルを構築するプロジェクトに取り組みました。4つのグループに分かれて商品開発を行い、春学期成果報告会では、それぞれのユニークなネーミングや商品コンセプトの報告に、会場からも笑いと拍手がわいてきました。授業はすでに春学期で終了しましたが、授業で開発された商品が、実は市場で密かな人気商品になっているとの情報を頂きました。商品名は「しょうゆシュークリーム」!マーケティングから、商品コンセプト、パッケージ、価格まで、受講生が考案し、株式会社おたべのご協力で商品化され、パッケージには「同志社大学×おたべ」の共同開発の文字が……。お味も好評のようです



「同志社×おたべ」共同開発
「しょうゆシュークリーム」

「体感型コンテンツ」からのお知らせ (No.37) (プロジェクト科目ブログ記事より抜粋)

2009年2月6日(土) 本学キャリアセンター主催のシンポジウム

「学生の主体的なキャリア形成を促す 体験型教育の取り組み」が寒梅館203番教室で開催され、本学より「体感型コンテンツ」受講生の皆さんがシンポジストとして参加しました。

田端信廣副学長のあいさつに続き、圓月勝博教務部長の基調講演「知識から知恵へー発見的学習による体験型教育」、専修大学「課題解決型インターンシップ」より2例(「窓ガラスに落書きのできる子供に優しい街づくりの提案」「まちの魅力をUPするためのPR活動の企画・実施」)の報告、立教大学より「第6期キャリア塾ー後輩の就職活動をサポート」、同志社大学プロジェクト科目からは京田辺校地開講科目「体感型コンテンツの企画運営を通じた実践的キャリア形成」よりそれぞれ学生さんによる活動報告が行われました。後半は山田和人プロジェクト科目検討部会長のコーディネートで、各大学教職員に学生発表者を交えたシンポジウムが行われました。



2009年度プロジェクト科目担当者・代表者説明会を開催

2009年度プロジェクト科目テーマ決定に続き、2008年12月17日(水)京田辺・今出川の両校地で、次年度科目担当者・代表者を対象に授業運営に関する説明会が開催された。

「けいはんな知的特区」からのお知らせ（活動報告 No.38）（プロジェクト科目ブログ記事より抜粋）

「けいはんな知的特区」におけるまちづくりデザイン提案＜京田辺校地開講科目＞

科目担当者：齋藤 篤史 先生（株式会社 東洋設計事務所）

科目代表者：千田 二郎 先生（理工学部）

この度、関西テレビ・京都チャンネルの情報番組におきまして、当プロジェクト科目で行っている「同志社山手」地区のまちづくり提案活動が紹介されることになりました。これまでの成果そして現在進行中の構想などについて、先日関西テレビ放送さんの取材を受けましたが、受講生諸君にとっても若干の緊張を伴いながらも和やかな雰囲気での取材となりました。放送日は1月7日12:30～ CS波とスカパーフェクトTVで全国配信されます。皆さん是非チェックして下さい。 株式会社東洋設計事務所 齋藤 篤史



12月4日関西テレビ収録中

副リーダーI君のコメント

本プロジェクトでは同志社山手地区における『まちづくり』に対してデザイン提案を行なっています。今回のテレビ取材ではプロジェクト内で以前から議論を重ねていた提案内容が取り上げられ、広く一般の方にも私たちの活動を知っていただける良い機会となり、非常に嬉しく思っています。これからもプロジェクトのコンセプトを保ちつつ、同志社らしい魅力ある『まちづくり』を提案していきたいと考えています。

2009年度プロジェクト科目の詳細情報をホームページに掲載

2009年度プロジェクト科目に採択された科目の詳細情報（学生へのアピール、受講条件等、先行登録に関する情報）をホームページに掲載した。次年度先行登録説明会は2009年3月28日（土）に開催する。

2008年度学生懇談会を開催

2009年1月17日（土）に学生懇談会が今出川校地弘風館会議室で行われた。

開講期間、開講校地の違う全プロジェクト科目の代表メンバーが、年に一度顔を合せる貴重な機会です。各科目プロジェクト活動の紹介から科目を通じての気付きや苦勞、工夫した点などが、初対面にも関わらず次々とメンバーから語られた。

授業運営費のこと、広報のこと、メンバー間のモチベーション維持の工夫や情報共有の方法など。活動は全く違っていても、共通する話題は尽きず、各チームがこの科目で経験した密度の濃い時間を改めて感じる場となった。最後は次年度へむけて、経験したメンバーならではの意見や要望もたくさん出され、本科目への期待と後輩たちへのメッセージを受け取る事ができた。



2008年度秋学期成果報告会が開催

2009年1月21日（水）京田辺校地開講科目、1月22日（木）今出川校地開講科目、両校地で2008年度プロジェクト科目秋学期成果報告会を開催した。秋学期科目、春・秋連続科目とも12分間の最終成果報告と3分間の質疑応答が行われた。

京田辺校地では教務主任連絡会議委員やプロジェクト科目検討部会委員からの鋭い質問に、的確に答える受講生の姿に一年間の成長が見られる報告会となった。また、今出川校地では映像や演劇による演出など、パフォーマンスの工夫もあった。

授業期間終了後も冊子作成やイベントの開催を企画している科目も多く、本科目を通じて築かれた人と人との繋がりを感じさせられる。「成長できる人はいくらでも成長できるのがこの科目の魅力」と語った受講生の言葉が印象に残る。



京田辺校地成果報告会

現代 GP シンポジウムを開催

現代 GP シンポジウム『第2弾 学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!- 地域・社会が学生を育てる-』を2009年2月21日(土)今出川キャンパス(明德館21番教室)にて開催した。



今出川校地成果報告会

2008年度科目担当者・代表者懇談会を開催

2009年2月28日(土)今出川校地寧静館5階会議室において、2008年度プロジェクト科目担当者・代表者懇談会を開催した。科目代表者(専任教員)の出席も多く本科目が持つ可能性について学部を超えた意見交換ができた。



教務主任連絡会義委員、プロジェクト科目検討部会委員による講評

2009年度

■京田辺校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
「京都企業の優秀なDNAを探る」	春	石田 正勝	生命医科学部 和田 元
からだと心のための演劇+音楽ワークショップ	秋集中	矢中 紫帆	理工学部 長岡 直人
地域(京田辺市、京都市)の中小製造業のものづくり強化支援	秋	NPO ホンモノづくりプロデューサー 開発センター 森 俊洋	理工学部 佐々木 和可緒
プロスポーツにおけるファン獲得と地域密着のためのマーケティングリサーチ	秋	二宮 浩彰	スポーツ健康科学部 二宮 浩彰
「F1をつくろう!(2009 JSAE 学生フォーミュラカー大会出場を目指して)」	春・秋連結	中村 成男	理工学部 藤井 透
「同志社山手」地区におけるまちづくりデザイン提案	春・秋連結	株式会社 東洋設計事務所 齋藤 篤史	理工学部 千田 二郎
エンターテインメント商材を通して学ぶ「実践の企画・開発・マーケティング」	春・秋連結	株式会社 タカラトミー 渡辺 公貴	生命医科学部 田中 和人
夜間中学を社会に向けて発信しよう!夜間中学を知っていますか?	春・秋連結	次田 哲治	社会学部 浅野 健一
15歳の夢をプロデュース!キャリアが見える体感型プロジェクト	春・秋連結	株式会社 グーデックス 島ノ内 英久	心理学部 田中 あゆみ
休耕地活用・自家菜園プロジェクト(食料自給率向上モデル特区)	春・秋連結	NPO法人 けいはんな薬膳研究所 井原 浩二	生命医科学部 渡辺 好章
スポーツイベント開催!学生と地域の連携によるスポーツクラブ	春・秋連結	高橋 仁美	スポーツ健康科学部 竹田 正樹

■今出川校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
新京都みやげの創造/[Creation of new Kyoto souvenir]	春	株式会社 おたべ 酒井 宏彰	商学部 石川 健次郎
観光政策の最前線～みなと神戸訪日外客数アッププロジェクト～	春	伊藤 政美	政策学部 今川 晃
「企業コンサルタント実習～社長!これが御社の課題です～」	春	NPO法人 同志社大学産官学連携 支援ネットワーク 五島 洋	生命医科学部 廣安 知之
国際社会でのキャリア・デザイン支援プログラム	春	榎本 博之	社会学部 藤本 昌代
京都紹介Web2.0プロジェクト	秋	中伏木 寛	文化情報学部 鋤柄 俊夫
出会いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～	春・秋連結	NPO法人 遊プロジェクト京都 上野 康治	理工学部 金田 重郎
「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト	春・秋連結	植村 照	法学部 長谷川 一年
私の「着てみたいきもの」をプロデュースしてみよう	春・秋連結	丸池藤井 株式会社 三甲野 春二	商学部 青木 真美
水環境教育教材を創ろう!	春・秋連結	上田 正幸	総合政策科学研究科 新川 達郎
京都の伝統織物の情報発信プロジェクト	春・秋連結	日本伝統織物保存研究会 龍村 光峯	理工学部 大久保 雅史
演劇で子ども達と学ぶ 企画実践プロジェクト	春・秋連結	NPO法人 フリンジアタープロジェクト 蓮行	文学部 勝山 貴之
映像であなただの京都を語ろう	春・秋連結	NPO 京都の文化を映像で記録する会 家喜 俊彦	理工学部 小泉 孝之
「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで	春・秋連結	田原 敏孝	経済学部 八木 匡
目指せ国民文化祭!誕生させよう京都学生文化コンシェルジュ!	春・秋連結	国民文化祭京都府実行委員会事務局 青柳 良明	文学部 山田 和人
わらべ歌遊びを通して子ども達に京のこころつなげるプロジェクト	春・秋連結	株式会社 空 遠藤 正彦	心理学部 余語 真夫
地域福祉に貢献する施設を作ろう 小規模多機能施設開設に至るまで	春・秋連結	社会福祉法人 京都福祉サービス協会 堀 善昭	社会学部 上野谷 加代子

成果報告会 総評・講評

各学期末に成果報告会では、全学共通教養教育運営委員会（2006年度・2007年度）、教務主任連絡会議委員（2008年度）およびプロジェクト科目検討部会委員によって各プロジェクトの講評が行われ、結果はすべて科目担当者・代表者に開示している。

(1)2006年度プロジェクト科目成果報告会

◇2006年度プロジェクト科目秋学期成果報告会日程

【京田辺校地開講科目】 日時：2007年1月22日（月）午後5時～

場所：恵道館104番教室（京田辺校地）

テーマ	開講期間
サイエンス・メディエーションによる社会貢献	秋学期
地域（京田辺市）の中小製造業のモノづくり強化への支援	秋学期
「食育と健康」（薬膳の食養生を中心として）	春・秋連結
F1を作ろう！（2006 JSAE学生フォーミュラカー大会出場を目指して）	春・秋連結

【今出川校地開講科目】 日時：2007年1月23日（火）午前10時30分～

場所：明德館21番教室（今出川校地）

テーマ	開講期間
隠れた京都を探索する—上京を中心に—	秋学期
生きた「京ことば」映像アーカイブ化プロジェクト	秋学期
感情ロボットを活用した小学生創造力育成講座設計プロジェクト	秋学期
アートに立ち会う—創造の場との共生—	秋学期
映像で描き出す「京町家文化」	春・秋連結
京都暮らしの音と映像	春・秋連結
織りの世界—伝統技術の保存と伝承—	春・秋連結
知的障害のある人達が暮らすグループホームの設立	春・秋連結
私が創る京都—学生による文化イベントの企画・推進	春・秋連結
コミュニティのエンパワーメントとNGOにおけるプログラム開発～滞日外国人支援～	春・秋連結
小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究	春・秋連結

■2006年度秋学期プロジェクト科目成果報告会総評（抜粋）

今年度の最終成果報告会は、プロジェクト科目第1期生による最終成果報告会となった。京田辺で4プロジェクト、今出川で、11プロジェクトが参加した。今出川では、午前と午後にまたがって開催されることになった。報告会は、春学期と同様に授業最終日と補講日に行われた。試験・レポートの時期と重なるタイムテーブルの設定であるにも関わらず、多くの学生の参加があったことは頼もしいことであった。

最終成果報告会に参加して思ったことを記すことで、全体の講評としたい。

最終成果報告会は、プロジェクトの優劣を競うのではなく、プロジェクトの成果が自己満足に終わらないように自己点検・評価するための機会として設定されている。そして、各プロジェクトがそれぞれの報告を聞いて、相互評価しあえるのが、あるべきプロジェクト科目の報告会の姿であると言える。その意味では、各プロジェクトの間で、質疑応答がもっと活発に行われることを期待したい。

春・秋連結のプロジェクトはすでに中間報告を経験しており、今回のプレゼンテーションも一定度の水準に保つことができていた。春・秋を通しての長期目標、各学期ごとの短期目標を明確に設定して取り組んだプロジェクトが大きな成果をあげていたように思う。秋学期科目の場合も同様であり、各月ごとの短期目標を設定したり、個人目標を設定することで、学生のモチベーションを維持していく工夫が見られた点も注目

される。プロジェクトの具体的な目標設定をしっかりと行うようにしたい。

また、プロジェクトのテーマを担当者と学生の間でしっかりと議論できたプロジェクトほど、達成感のある充実した最終成果をあげることができているように思える。スタートの時に、最終ゴールのイメージをしっかりと共有できるように議論していきたいものである。

なお、グループ別のプロジェクト活動になっている場合に、グループ相互の連携がとれずに、ばらばらになってしまう事例もみられた。これは、プロジェクトの人数にも関連しており、学生のプロジェクトとしては、10人前後が適正な人数と言えよう。プロジェクトでは、メンバー間のコミュニケーションが最も重要であり、スケジュール管理や情報共有に留意したプロジェクトは、個人では達成できないチームとして大きな成果をあげることができているようである。

また、学部や学年の枠を越えたプロジェクトの可能性を生かしきることができたプロジェクトと、逆にそれがコミュニケーションを阻むものとしてプロジェクトの活性化に生かせなかったプロジェクトもあった。プロジェクトは、こうしたリスクやトラブルを内在しながら、それを克服していこうとするところから立ち上がっていくものである。そうした困難と正面から向き合いながら、自分たちのプロジェクトをメンバーとともに力を合せて遂行していくところに、プロジェクト科目の醍醐味がある。

プロジェクトに参加した学生に共通しているのは、自分たちが前向きに取り組めば目標は必ず達成できるという自信ではないかと思う。プロジェクトを通して、各自が自分の居場所を見つけて、そこで一人ひとりが自分に応じた能力を身につけたであろうことを確信した報告会であった。次年度の活動にも大いに期待したい。

(2)2007年度プロジェクト科目成果報告会

◇2007年度プロジェクト科目春学期成果報告会日程

【京田辺校地開講科目】 日時：2007年7月17日（火）午後1時～午後4時

場所：恵道館201番教室（京田辺校地）

テーマ	開講期間
玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」	春学期
「けいはんな知的特区」におけるまちづくりデザイン提案	春学期
”知的財産”の最前線から学ぶ-社会で役立つ知財を身につける-	春学期
新しい学びの場としてのこども向けワークショップのデザインと実践	春学期
けいはんな観光素材発掘プロジェクト	春学期
「けいはんな子どもサマーキャンプ」企画運営プロジェクト	春学期
京都企業に共通する優秀なDNAを探る	春学期
「食育と健康」（薬膳の食養生を中心として）	春・秋連結
F1を作ろう！（2007 JSAE 学生フォーミュラーカー大会出場を目指して）	春・秋連結
3D コンテンツ制作プロジェクト～企画から制作まで～	春・秋連結
クロスカルチュラル・プレゼンテーション	春・秋連結

【今出川校地開講科目】 日時：2007年7月18日（水）午後1時～午後4時

場所：明德館21番教室（今出川校地）

テーマ	開講期間
次世代モバイルプレーヤーの商品企画及び商品具現化	春学期
新京都ブランドの創造	春学期
改革！京都観光～京都観光の課題リサーチと改善策プロポーザル～	春学期
「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト	春学期
new 文化創生 町家の伝統的な行事を知り日本人の心を取りもどす（先人の知恵）	春学期
京都暮らしの音と映像	春・秋連結

テーマ	開講期間
京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ	春・秋連結
「京町家文化」再考—再生利用と伝統の継承	春・秋連結
京都紹介ブログ・ポッドキャスト制作・配信	春・秋連結
量から質への「京都型ニュー・ツーリズム」の開発と流通	春・秋連結
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト	春・秋連結
新しい京都の逍遥ガイドンスを作ろう!	春・秋連結

■2007年度プロジェクト科目春学期成果報告会の総評（抜粋）

プロジェクト科目は、提案されたテーマに学生が主体的に取り組んで、調査や取材・制作活動を通して、自分たちで現代社会の問題点を発見し、その解決策を模索することによって、学生自身の自己発見へとつなげていく教養教育科目として設置されています。

【インプットとアウトプットのバランス】

しかしながら、学生はテーマについてはスタート時点では、それほどの知識も経験も持っていないので、調査や取材・制作などの現場を体験しながら、行動的に学習していくインプット期間が必要になります。

そこで、学んだことを生かして、与えられたテーマを自分たちのテーマとして再定義して、基本コンセプトの決定から企画書作成、行動計画の設定から、実施内容の遂行へと進んでいきます。ここからが、プロジェクト科目の醍醐味であり、アウトプット期間になります。人間は、学んだことを、自ら伝えたいとする知的な行動力を備えた存在です。与えられたものを、自分なりにお返しするというのも自然な行動です。プロジェクト科目は、そうした実践的な学びの場といえます。

このインプットとアウトプットのバランスが、いわば、科目運営の腕の見せ所であり、学生の立場から言えば、インプットした知識や智恵を生かして、自分たちの納得した成果をめざしてチームとして力を合わせてがんばっていくということになります。

【アクティブな座学ではなく】

今回の成果報告会では、インプット段階にとどまっているプロジェクトが散見されました。いわば現地説明会としての講義や、現場での演習・実習となっており、プロジェクト遂行型のようですが、実際にはアクティブな座学という授業にとどまっていたのは残念なことでした。せっかく、学んだことを生かすことなく終わってしまうのは、いかにも惜しいと思います。

【プロジェクト期間は適正か】

春学期という短期間のプロジェクトの場合には、実際の活動期間は、3ヶ月であり、その間にインプットとアウトプットを行うのはかなりむずかしいことだと思います。提案されたテーマが、春・秋連結科目として実施すべきであるのか、半期科目として実施すべきかは、すでに応募の段階で決定されています。応募の段階でしっかりと見極めていただく必要があります。ただ、学生の学びの深まりを促すためには、それなりの時間を要するものであり、半期という時間はいささか窮屈と言えます。そのために、アウトプットを急ぐと、プロジェクトが、成果主義の落とし穴に陥ってしまうこともあります。

【プロジェクトの自己検証力】

プロジェクトの社会的な評価とは、必ずしもテレビや新聞、情報誌に取り上げられることとは限りません。それよりも大切なのは、そのテーマに取り組んだ活動がはたしてどのように評価できるのかを、チームのメンバーとともに徹底的に相互批判しあうことであり、そこから見えてくる自分自身の活動についての自己検証、プロジェクトそのものの自己検証だと思います。

プロジェクトは検証可能なものであってほしいと考えています。そのためには、学生の個人の成長の記録と、活動のふり返りが不可欠です。それをふだんの活動の中で実践していくことで、自分の成長のステップが見えてきます。

【プロジェクト科目に期待すること】

プロジェクト科目は、本来、社会連携をひとつの目的としており、プロジェクトのプロセスにおいて、学生自身が多くの困難に遭遇して、それを克服したり、積極的に回避したりすることで、自分自身の生き方を見つめ直していくきっかけをつかんでほしいと期待しています。いわゆる課外のサークル活動とは、その点で大きく異なっています。プロジェクト科目にとって、自己満足にとどまること、やりっぱなしになることがもっともまずいことです。自由な活動の喜びと社会的な責任の重みをとら感じ取ってもらいたいと思います。

◇2007年度プロジェクト科目秋学期成果報告会日程

【京田辺校地開講科目】 日時：2008年1月21日（月）15:30～17:45

場所：恵道館201番教室（京田辺校地）

テーマ	開講期間
からだと心のための演劇+音楽ワークショップ	秋学期
「科学者のたまごと学ぼう!!N けいはんな」企画運営プロジェクト	秋学期
日本のモノづくりを支え元気な地域（京田辺市）中小製造業の発掘	秋学期
F1を作ろう！（2007 JSAE 学生フォーミュラーカー大会出場を目指して）	春・秋連結
3D コンテンツ制作プロジェクト～企画から制作まで～	春・秋連結
クロスカルチュラル・プレゼンテーション	春・秋連結
「食育と健康」（薬膳の食養生を中心として）	春・秋連結

【今出川校地開講科目】 日時：2008年1月22日（火）13:00～15:45

場所：明德館21番教室（今出川校地）

テーマ	開講期間
誰にもやさしい喫茶店をいっしょに作ろう！ ～地域の中の居場所作りを目指して～	秋学期
新しいワークスタイルとオフィス環境の関係性を考える	秋学期
京都暮らしの音と映像	春・秋連結
京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ	春・秋連結
「京町家文化」再考—再生利用と伝統の継承	春・秋連結
京都紹介ブログ・ポッドキャスト制作・配信	春・秋連結
量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通	春・秋連結
子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト	春・秋連結
新しい京都の逍遥ガイドンスを作ろう！	春・秋連結

■2007年度プロジェクト科目秋学期成果報告会の総評（抜粋）

今年度もプロジェクト科目最終成果報告会を開催することができました。

成果報告会の当日は、お忙しいなか、科目担当者、科目代表者の先生方に多数御参加いただき、また、試験・レポート期間のなかであるにもかかわらず、多くの学生が参加してくれました。いかに、この科目の受講生が楽しく、充実したプロジェクト期間を過ごすことができたのかがよくわかります。発表にも創意工夫がなされており、それぞれの個性が発揮されていたと思います。あらためて先生方の御指導、御支援に深謝申し上げます。

【プロジェクトの個性】

さて、プロジェクト科目部会長という立場上、京田辺と今出川両校地の成果報告会に立ちあうこととなりますが、両校地で雰囲気まったく違うことが実感できます。昨年も同様のことを感じたのですが、今年もその感を強くすることになりました。ここにも、それぞれの個性が現われていたといえます。おもしろいことに、京田辺キャンパスのプロジェクトはクールな授業で、今出川キャンパスのプロジェクトはホットな祭

典です。両校地のプロジェクトをご覧いただくと、極端な言い方かもしれませんが、別の大学のプロジェクトのようにさえ見えます。できれば、両校地間の雰囲気の違いを、担当者・代表者・学生さんに見ていただくと、それだけでも刺激になるのではないかと思います。

プロジェクトは、それぐらいに個性的なものであり、それぞれにふさわしいかたちと方法があるということであらためて実感させられました。

【コミュニティー・チーム・プロジェクト】

最終成果報告会に参加していて、ひとつのキーワードをくみ取ることができました。それは、「チーム」ということばです。この科目の特徴ですが、ほとんどの学生が初対面であるということです。そこからチームを作っていかなければなりません。そのために、学生はまずひとつの科目メンバーのコミュニティーを形成することからはじめなければなりません。いろいろなやりかたで、「仲間」をまずは作っていきます。そこから、しだいに学びのグループを作り始めます。そして、目的意識を共有した「チーム」を作っていくこととなります。こうしてできあがった、コミュニティーとチームがプロジェクトを推進していくうえで極めて大きな役割を果たしていくことがわかってきました。こうした構造を作り上げたチームがプロジェクトを成功させていきます。残念ながら、チーム形成まで至らずに終わってしまう場合もあります。できるだけ、そうした方向にプロジェクトを導くのが、プロジェクトの担当者・代表者の役割なのでしょう。

学生さんの活動を見ていて、そうしたプロジェクトの形成過程について学ぶことができるのも、この科目に関わっている喜びです。おそらく、皆さまも同様の感想をお持ちなのではないかと思います。3月1日の担当者懇談会でいろいろな発見について意見交換させてください。

【担当者連絡会議】

次年度からは、担当者の連絡会議を組織したいと思っています。担当者の先生方からの強い要望を受けて開催しようと計画しています。たとえば、こんな情報交換もできるのではないのでしょうか。実例をひとつ掲げてみたいと思います。

今年度は、わたくしも科目代表という立場で授業運営に関わりました。そのプロジェクト科目において、先日13日に振り返り会が開催されました。少し、その様子を御報告させていただきます。当日は、以下の質問項目に答えるかたちで学生さん自身が自己評価、相互評価をしました。

参考までに、質問項目を掲げます。

《氏名・学部・回生・学籍番号《評価シート》》

- 1) あなたは、このプロジェクトを遂行するために、何時間の時間を要しましたか (200字)。
- 2) あなたは、プロジェクトのなかでどのような役割をはたすことができましたか (400字)。
- 3) あなたは、もう一度最初から、このプロジェクトを始めるとすれば、どのような点に留意しますか (400字)。
- 4) あなたは、このプロジェクトを通して、何を学ぶことができましたか (400字)。
- 5) あなたにとって、このプロジェクトは、今後の人生にどのような影響をあたえると考えますか (400字)。
- 6) あなたは、このプロジェクト科目の目的と趣旨を当初からしっかり把握していましたか (200字)。
- 7) あなたは、本プロジェクトの成果を何点と評価しますか (100点満点)。
評価のポイントもあわせて記入してください (200字)。
- 8) あなたは、自分自身のプロジェクト活動を何点と評価しますか (100点満点)。
評価のポイントもあわせて記入してください (200字)。
- 9) あなたは、他のプロジェクトメンバーをそれぞれ何点と評価しますか (100点満点)。
評価のポイントもあわせて記入してください (400字程度)。

結果を申し上げますと、学生自身の自己評価も、メンバーに対する相互評価も適正であり、春・秋学期を通じての個々の活動を通しての成長のプロセスとプロジェクトのチーム作りの問題点がみごとに抽出されていました。プロジェクトならではの評価指標を学生さんたちに教えてもらっているとも言えます。学生に評

価ができるのかと疑問を持たれる方もおられるようですが、それはまったくのまちがいです。取り組みの度合いによって、それぞれの指標には差異が生じますが、過不足ない評価が出てきます。それは、けっして褒めあったり、もたれ合ったり、懐かしんだりするような緩い評価ではありません。実に的確です。ほぼ、わたくしの評価と一致しています。もちろん、個々の評価については、全体を見通して総合的に評価しますが、学生自身の評価をもっとも信頼すべきであると思います。この評価方法は、昨年度も実施したのですが、ほぼ同じ結果を得ることができました。

プロジェクト科目という新しい教育スタイルの指導マニュアルを作るつもりで、かつ、それぞれのプロジェクト科目の問題点、授業運営に関する悩みやしんどさを出し合って、いっしょに問題解決のために自由参加で気楽に話しあってみてはどうでしょうか。それぞれのユニークな進めかたを学びあうことが目的です。

【シンポジウムの学生事例報告】

最後になりますが、御報告を申し上げます。

2月23日に現代GPシンポジウム「学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦!!－地域・社会が学生を育てる－」が開催されます。成果報告会の当日にも申し上げておりましたが、以下のプロジェクト科目の学生さんに協力をお願いしました。

今回は「地域・社会が学生を育てる」というサブタイトルを付けておりますので、地域連携色の強いものを事例報告として選定させていただきました。

●量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通

●子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト

これらは、15分事例報告、15分質疑応答、その後30分間の座談会を行います。

上記以外に、以下のプロジェクトに展示発表をお願いしています。

●「食育と健康」（薬膳の食養生を中心として）

●京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ

●新しい京都の逍遥ガイドスを作ろう！

成果物の展示発表は、開会の前の時間（30分）と第1部と第2部の間の休憩時間（10分程度）を設定しています。

同志社大学プロジェクト科目の成果を世に問うシンポジウムです。お声かけさせていただいたプロジェクトのみなさんにはすべて御快諾いただきました。協力を申し出てくださったことに深謝申し上げます。この科目は実践的な教育であり、学生自らの成長を謳っている限り、その成果は受講生の姿にしかありません。プロジェクト科目の主人公はあくまで学生であるという原則から、学生の事例報告をシンポジウムに組み込むことにしました。

みなさまの御指導いただいた学生の成長した姿を見ていただきたいと思います。プロジェクト科目がどのような学生を育てることができたのか、是非とも見届けていただきたいと思います。

常にプロジェクトは、成長していきます。我々のサポートも毎年度改善を加えて参ります。今後とも御協力の程、よろしくお願い申し上げます。

(3)2008年度プロジェクト科目成果報告会

◇2008年度プロジェクト科目春学期成果報告会日程

【京田辺校地開講科目】 日時：2008年7月23日（水）午後1時～午後4時

場所：夢告館102番教室（京田辺校地）

テーマ	開講期間
新しい学びの場としてのこども向けワークショップのデザインと実践	春学期
けいはんな観光素材発掘プロジェクト	春学期
「けいはんな子どもサマーキャンプ」企画運営プロジェクト	春学期

テーマ	開講期間
けいはんなから世界へ真の環境対策を・・・	春学期
地域団体商標から見た「京都ブランド商標」の育成提案	春学期
学生とともにつくる京たなべ・同志社総合型地域スポーツクラブ	春学期
「F1をつくろう!(2008 JSAE 学生フォーミュラーカー大会出場を目指して)」	春・秋連結
玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」	春・秋連結
「けいはんな知的特区」におけるまちづくりデザイン提案	春・秋連結
体感型コンテンツの企画・運営を通じた実践的キャリア形成教育	春・秋連結
「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)	春・秋連結

【今出川校地開講科目】 日時：2008年7月24日(木)午後1時～午後4時
場所：明德館21番教室(今出川校地)

テーマ	開講期間
水環境政策～「雨水局」から総合的に考える～	春学期
新京都みやげの創造	春学期
商店街を核にした産・官・学・民協働のコミュニティ創成研究	春学期
京都暮らしの音と映像	春・秋連結
京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ	春・秋連結
京都紹介ブログ・ポッドキャスト制作・配信	春・秋連結
学生が拓く観光の未来「京都型ニューツーリズム」の開発と実現	春・秋連結
「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト	春・秋連結
出会いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～	春・秋連結
「演劇で地域子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト	春・秋連結
私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう	春・秋連結
3D ウェブ空間事始：京都学生ミュージアム創製プロジェクト	春・秋連結
ダンス・つながり・創造・身体で考える共生社会一	春・秋連結

■2008年度プロジェクト科目春学期成果報告会総評(抜粋)

プロジェクト科目も今年度で3年目を迎えることになりました。プロジェクト科目の原点は、プロジェクト活動を通して学生が現代社会の抱えている問題について徹底的に考えることにあります。そこで自ら課題を発見し、その解決のために努力する過程で、全人的な人材育成の基礎となる教養を培うことにあります。それがプロジェクト科目としての社会的な役割でもあり、そのために自己満足に終わることなく、常に自己検証を重ねていくことを求めています。成果報告会を開催する意図もそこにあります。こうした趣旨は年を重ねるなかで、学生の間にも定着してきているように見受けられます。

ただ、次のような傾向もほかに明らかになってきました。

第1点は、プロジェクト科目の担当者と学生との間でのテーマについてのすり合わせの議論をじゅうぶんに行うことができているプロジェクトは、学生の自律的な活動に弾みをつけているということです。つまり、学生が個別の科目を選択する時点では、まだ、その選択は主体的、意識的なものではなく、直観的であり、科目の概要から漠然としたイメージでとらえている段階です。そこで、科目のテーマを自分たちの課題として設定し直すステップが必要になります。このステップをじゅうぶんに踏まえないと、プロジェクトが学生主体のものにならず、自律的なプロジェクト運営にならなくなってしまいます。担当者からの発信が弱い場合には、学生は目標を見失い、せつかくの科目のテーマを活かすことができず、堂々めぐりの議論に陥ります。

第2点は、プロジェクトには波があるので、それをどれだけ適切にプロジェクトの設計に組み込んでいくことができるかです。たとえば、連結科目の場合、春学期を知識やスキルの習得のために使うという段取りにしてしまいますと、学生はどうしても受け身の姿勢になります。学生はプロジェクトの対象について、ほ

とんど知識や技術を持っていないので、当然のことといえるでしょう。スタートの段階では、担当講師の個人の技能やセンスが学生指導に大きな役割を果たすこととなりますが、この段階で、ゲストスピーカーや現地見学・説明に集中すると、自律的主体的な学生の意志や判断が入り込む余地がなくなり、通常の座学の授業と同じことになってしまいます。それを避けるためには、興味付けから意識付けへというステップをプロジェクトの設計のなかに組み込むことが大切になります。プロジェクトの全体の流れから、春学期にプレ体験の機会（ワークショップや説明会等）を組み込んでおくと、習得した知識やスキルを活かすことができるようになり、小さな成功体験が学生の自信につながります。

第3点は、学生が自主的に会議を開くように促していくことが大切です。できるだけ集まって会議を開き、決定事項を議事録などで共有していくシステムを作ること、そして、受講学生同士ができるだけ頻繁に情報交換できる局面を作ることも必要です。

CNSはそのために設置されたプロジェクト科目支援ツールです。春学期を終えて、このシステムを導入しているプロジェクトと、していないプロジェクトでは、明らかにプロジェクトの推進力に差が出てきていることが確認されました。自分たちなりに個性的な使い方をしていることも注目されますが、プロジェクトを推進していく上で、情報の伝達・共有や意見交換の必要性に対する自覚がCNSを使うなかで醸成されつつあることがわかります。

学生は、社会で通常行われている企画会議等の経験はほとんどありません。最初は、顔を合わせて話しをすればいいという程度でスタートしますが、やがて、それではプロジェクトを推進していくことができないことに気づき始めます。そこで、会議の進め方の技術について適宜指導することも必要になります。学生をもっとも成長させるのは、ふだんの会議の場であるのかもしれませんが、オフィシャルな場面で発言するという緊張感と集中力が学生の思考を鍛えているように思います。その意味で会議は学生プロジェクトの最前線と言えます。そのための環境と条件の整備はやりすぎということはありません。

今回の成果報告会に立ちあって、こうした傾向に見られる問題点に正面から取り組んだプロジェクトが一定度の成果をあげることができていたように思います。

学生が行動することでぶつかった課題から出発して、それを解決するために調査や研究を進めることによって、チームで主体的に行動していくきっかけをつかむことが大きな目標です。自律的・主体的に学ぶ生きた思考と体験が学生を大きく成長させるものと実感しています。アクティブな教養教育として、プロジェクト科目が位置づけられているのはそうした観点からでしょう。

最後にプロジェクトの遂行過程に現われてくる学生の行動パターンを図式化してみると次のような傾向を見出すことができます。学生プロジェクトを推進していくためにとりわけ必要になるのが、プロジェクトを実行し、支え合っている科目コミュニティーの形成です。気楽に話ができるおしゃべりコミュニティーから、読んだ本の情報交換等ができる学びのコミュニティー、そしてプロジェクトの目的を実現するためのプロジェクトのコミュニティーへと学生自らがコミュニティーを育てていくことで、コミュニケーションの力、互いに協力しあうコラボレーションの力をひきだし、プロジェクト科目の学生は大きく成長していきます。学生の学びもこのプロセスで個人からチームへと進化していきます。こうしたコミュニティー形成を支援するという意味でも、CNS等が効果を発揮することになります。

冒頭に掲げたプロジェクト科目の目的も、こうしたコミュニティーを形成していくプロセスで実行されていくこととなります。指摘させていただいた傾向も、コミュニティーを学生自ら作り、育て上げることができたチームが、一定度の成果とメンバーの成長を実感させてくれていたのだと思います。

担当者の皆さまには、多くの知的な刺激を与えていただき、感謝申し上げます。春学期で終了されたプロジェクト科目の皆さまに謝意を表するとともに、連結科目を御担当の皆さまには、さらに学生の自主的な学びを誘発していくための工夫とアドバイスをよろしく申し上げます。なお、事務局にも気軽に相談なさって下さい。

◇2008年度プロジェクト科目秋学期成果報告会日程

【京田辺校地開講科目】 日時：2009年1月21日(水)午後1時～午後3時30分

場所：夢告館102番教室(京田辺校地)

テーマ	開講期間
からだと心のための演劇+音楽ワークショップ	秋学期集中
現場のプロに活かしたノウハウを学ぶ!～情報誌企画制作を体験～	秋学期
「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)	春・秋連結
「F1をつくろう!(2008 JSAE 学生フォーミュラーカー大会出場を目指して)」	春・秋連結
玩具産業を通じて学ぶ学生のための「実践と自立のための玩具企画開発」	春・秋連結
「けいはんな知的特区」におけるまちづくりデザイン提案	春・秋連結
体感型コンテンツの企画・運営を通じた実践的キャリア形成教育	春・秋連結

【今出川校地開講科目】 日時：2009年1月22日(木)午後1時～午後4時20分

場所：明德館21番教室(今出川校地)

テーマ	開講期間
京都暮らしの音と映像	春・秋連結
京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ	春・秋連結
京都紹介ブログ・ポッドキャスト制作・配信	春・秋連結
学生が拓く観光の未来「京都型ニューツーリズム」の開発と実現	春・秋連結
「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト	春・秋連結
出会いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～	春・秋連結
「演劇で地域子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト	春・秋連結
私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう	春・秋連結
3D ウェブ空間事始：京都学生ミュージアム創製プロジェクト	春・秋連結
ダンス・つながり・創造-身体で考える共生社会-	春・秋連結

■2008年度プロジェクト科目秋学期成果報告会総評(抜粋)

2008年度秋学期成果報告会において18(特別参加の春学期科目1科目を含む)プロジェクトの成果報告が、1月21日(水)午後1時から京田辺校地夢告館102番教室、22日(木)午後1時から今出川校地明德館21番教室にて行われました。学生が自らの取り組みについて報告する成果報告会はプロジェクト活動の締めくくりとしてひとつの大きな柱となっています。

成果報告会の場が、自分たちの活動の成果に対する第三者的な評価の場であるとともに、他のプロジェクトの活動成果を知ることによって、相対的に自分たちのプロジェクトを自己評価できる学びの場としても機能していることを期待しています。

両校地とも、補講期間という学生にとっては試験・レポート期間であるにも関わらず、多くの学生が集まっていることにも、彼らのモチベーションを伺い知ることができます。毎年、参加者数も増加してきているように思います。今後も、成果報告の場が年間のプロジェクトのひとつの大きな学びのゴールとなるようにプロデュースしていきたいと思えます。

さて、今回の成果報告会では、プロジェクトにおける問題点もほかに明らかになってきていることを実感できました。

いくつかの点を紹介したいと思います。

第1点は、学生の自律的、自発的なプロジェクトになっているかどうかという授業運営に関わる問題です。プロジェクトのスタート時点では、ほとんど知識のない状態ですから、そうした知識や技術を修得する期間が必要です。ただし、その修得のしかたが一方通行的なレクチャーになってしまいがちな点は注意していく必要があります。現地や現場で解説をしても、それが一方的なレクチャーになると、現場教育ではあるものの座学に等しくなってしまう。

そこには、ふたつの問題点が指摘できます。ひとつは、学生がどれだけ目的意識を明確に持って、現地に

出かけていくかです。自ら意思決定した目標・目的に向って知識や技術を修得していくことを自覚することができれば、学生は自律的、自発的に学び始めます。もうひとつは、現地での学習を能動的なものにしていくための工夫の必要性です。一方的な講義にならないようにするためには、やはりワークショップ的な要素を付加していくことで、自らの手で知識や技術を確かめながら身につけていくことができるような配慮が一番大切ではないかと思います。ゲストスピーカーを依頼する場合には、そうしたねらいをしっかりと打合せをした上で、講義を実施していただく必要があります。著名な講師を招く場合、有意義な話を聞くことができることは、学生にとって自己啓発の学びの場になるという意味では大きな教育効果が期待できるのですが、それだけではプロジェクトの学びにはならないということです。自らの気づきを生かした体験的な学習になるようにインプットにも工夫をしてもらえると、学生の学びはますます深化していくものと確信します。

第2点は、プロジェクトの設計計画が甘い科目が見られました。学生が主体的に活動することが、プロジェクト学習では何より重要なことといえるでしょう。しかしながら、それが学生の判断にすべて委ねてしまうということになってしまうと、プロジェクトは迷走してしまいます。ここにもいくつかの問題が潜んでいます。

ひとつは、スタート時点におけるプロジェクトのテーマ・目的設定のあいまいさです。担当者と学生の間で、テーマを共有できなければ、プロジェクトはスタートできません。ここでは、担当者がもっと学生と徹底的に話しあってもらう必要があります。1 Semester（半期）のプロジェクトの場合は、時間が短いのでむずかしいかもしれませんが、ここをあいまいにするといつも振り出しにもどらなければならなくなります。もうひとつは、学生に対するフィードバックが少ない場合に、学生側から見れば信頼されている実感がないために、自律的に活動するというよりも自分たちでやるしかないと思って、担当者の思いとは離れた活動になってしまうことが多いです。これについては、担当者が学生の活動に対して、できるだけフィードバックコメントを出していくことが大切です。これは、社会の現場と同じかと思います。信頼と期待が学生を育てていくという原点にもどる必要があるのだと思います。

その結果、プロジェクトの内容が、おもしろ半分の企画や自己満足的な展開になってしまう場合もあります。プロジェクトの特性として、いったん動き始めると途中で止めることはできなくなります。その前に、しっかりと意志疎通を図っておく必要があるでしょう。

最後に、少し気になったことを記しておきたいと思います。

成果報告会の時に、作品が仕上がらず、経過報告や中間報告になっているプロジェクトが見られました。

プロジェクト学習は一定の期間内に、一定の目標を達成すべく、チームで自律的、自発的に活動していく創造的な学びです。その意味では、期間内に仕上がらなければ、延期してどれほどクオリティーをあげられたとしても、それはプロジェクト科目としては失敗となってしまいます。これは実社会でも同様かと思います。成果報告会で、他のプロジェクトと一っしょに発表して学ぶという絶好の機会を失うことになりま。締め切りを守るといふ規範意識を醸成していくということも大切な教育と考えています。

文章を閉じるにあたり、担当者の皆さまにお願いがあります。

皆さまには、本学の専任教員とはちがう期待を学生は持っています。実社会で活動しているプロフェッショナルからアドバイスをもらえることに尊敬と信頼を抱いています。いわば、自ら憧れるメンターとして、学生は担当者の皆さまをじっと見ているということです。それだけ影響力も大きく、皆さまがどのようにプロジェクトに対する意識を持っておられるかが、そのままプロジェクト活動に反映します。

他のプロジェクトに対する関心や興味、プロジェクト科目の行事に対する積極的な参加等を実践していただくことを通して、社会とのつながりを持つことの大切さを教えていただけると、学生の中に眠っている社会力を目覚めさせることができるのではないかと思います。参加しているプロジェクトを仕上げることに集中させることは必要なのですが、同時に視野を拡げて自分のプロジェクトで学んだことを他者との触れ合いを通して深めていく姿勢を持つことができれば、それが結果としてプロジェクトのクオリティーを向上させることにつながります。皆さまからの積極的な情報発信をお願いしたいと思います。

あこがれの担当者から、そうしたアドバイスをもらうことができたなら、学生はさらに大きく成長していくことができると思います。

末筆になりますが、皆さまのふだんの教育活動に深甚の謝意を表すとともに、今後ともプロジェクト科目に対する御支援、御協力をよろしくお願い申し上げます。

※成果報告会各科目別講評(参考資料)

2008年9月1日

さとう 裕(佐藤 隆利) 様

プロジェクト科目検討部会
部会長 山田 和人

2008年度春学期 プロジェクト科目成果報告会の講評について(報告)

先日、開催されたプロジェクト科目の成果報告会の発表につきまして、参加した教務主任連絡会議委員およびプロジェクト科目検討部会委員より提出された講評を、下記の通り、取り纏めましたので、ご参考までに報告いたします。なお、この講評は科目担当者・科目代表者に同時に送付しております。

記

プロジェクト名 : 京都暮らしの音と映像

「京都暮らしの音と映像」の大きなテーマから、自分達のテーマを絞り込み、取材をもとにシナリオ、台本、映像、ナレーション、テロップ、音入れなどを行ってドキュメンタリー作品に仕上げることが目的としています。

音と映像を手がかりにしながら、京都の抱えている問題をドキュメンタリーとして発信していくことなのか、それも含めて目標を再定義しようとしているのか、前提部分の説明がほしかった。なぜ、長田塾とホームレスなのか、それが何を明らかにすることになるのか、その問題意識がプレゼンテーションでは伝わってこなかったということです。

また、春学期の授業がコンセプトについての議論に終始しており、具体的な成果が撮影に関するスキルの習得ということになっているのではないのでしょうか。秋学期に撮影をするための学習の期間として春学期をとらえるのではなく、むしろ、春学期のなかでなんらかの社会的な体験を通して問題意識を実践的に育てていくような展開をはかることができれば、次のステップも見えやすくなるのではないのでしょうか。最初から対象を絞り込むことも大切ですが、無駄足を覚悟してでも繰り返し失敗と成功の体験を積み重ねることで、自分たちのテーマを実践的につかみ、その限りの成果を発表してもいいのではないのでしょうか。

ただし、発表自体は二つの班の活動を映像を交えてわかりやすく紹介しており、それぞれのターゲットによる視点の違いも表現できていました。その点では、早くから撮影や編集に取り組んだ成果が現れているといえます。春学期期間の目的と、いつまでに何をするか、また、どこまでできたら達成したといえるかの会場からの質問にも、質問の趣旨を真摯に受け止めた回答になっていたことは活動を行ううえで身についた客観性といえます。作品の仕上がりが期待できます。

以上

シンポジウム（2007年度）

2006年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラムに、「公募制のプロジェクト科目による地域活性化」のテーマで「プロジェクト科目」の取組みが採択されたことをうけて、2007年度、2008年度に同支社大学今出川キャンパスにおいてシンポジウムを開催した。

2008年2月21日（土）に開催された「学びの原点－プロジェクト型教育の挑戦!!－地域・社会が学生を育てる」では地域・社会が学生を育てるという視点から、プロジェクト型教育の持つ教育力や可能性を、小学校・大学の教育機関の壁を越えて議論を深めた。2009年2月23日（土）には「第2弾 学びの原点－プロジェクト型教育の挑戦!!－地域・社会が学生を育てる」のテーマで、プロジェクト型教育における学生の教育と地域貢献とのバランス、活動の持続性、教職員の役割、評価などについて、各大学の取組みを紹介しながら討論した。両シンポジウムとも、学生事例報告に対する質疑応答も会場から多く寄せられとともに、年度を追って参加者も増加するなどPBL型教育に対する関心の高さが伺われた。

文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム

「学びの原点－プロジェクト型教育の挑戦!!－地域・社会が学生を育てる－」

2008年2月23日（土） 13:00～17:30
同志社大学 今出川キャンパス【明德館1番教室】

次 第

- | | |
|-------------|---|
| 13:00 | <p>■あいさつ
同志社大学 副学長 文学部教授 田端 信廣</p> |
| 13:10 | <p>■第1部
同志社大学プロジェクト科目の試み
プロジェクト科目の目指すもの
同志社大学 プロジェクト科目部会長 文学部教授 山田 和人</p> |
| 13:30 | <p>事例報告
同志社大学 プロジェクト科目 学生による事例報告1
同志社大学 プロジェクト科目 学生による事例報告2</p> |
| ----- | |
| 15:10 | <p>休憩（10分）</p> |
| ----- | |
| 15:20 | <p>■第2部
シンポジウム「PBL型教育の可能性について」
東京電機大学 情報環境学部准教授 土肥 紳一
専修大学 ネットワーク情報学部助教授 飯田 周作
同志社小学校 教諭 石川 博三
埼玉県狭山市立堀兼小学校 教諭 岩瀬 直樹
同志社大学 文学部教授・プロジェクト科目部会長 山田 和人
同志社大学 全学共通教養教育センター所長 圓月 勝博(司会)</p> |
| 17:30 | <p>終了</p> |
| ----- | |
| 18:00～19:30 | <p>■レセプション
会場：同志社大学寒梅館1階 Hamac de Paradis ※事前申込</p> |

【シンポジウム議事録 抜粋】

学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!・地域・社会が学生を育てる—

2008年2月23日(土) 同志社大学明德館1番教室

あ い さ つ

同志社大学 副学長 文学部教授 田 端 信 廣

本日は学期末で何かとご多用の中、たくさんの皆様にご参集賜りまして誠にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。開会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日のシンポジウムは「学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!」と銘打っておりますが、PBL、特に同志社大学が数年前から導入していますプロジェクト科目の背景、その狙い等々について、個人的にはたくさん語ることがあってとても5分や10分の挨拶では済まないのですが。と申しますのは当時、私は教務部長をしておりまして学内のややこしい議論の中からプロジェクト科目を正課の科目に導入することについて学内でいろんな苦勞をしてきた思いがあります。そのへんの事情をよく知っております、そして今日、司会を務めます現教務部長の圓月先生から「挨拶は挨拶にとめてくださいよ。中身に踏み込まないように」と言われておりまして司会からブレーキがかかっておりますので、中身には踏み込みませんが。

同志社大学のプロジェクト科目は特色がありまして、そのうち2点だけ申し上げますと、一つは全学共通教養科目として導入していることであります。プロジェクト型の教育は多くは理系、情報系の教育科目を実現するために導入されていることが多いのですが、我々の場合は教養教育の一環としてそれを位置づけている。では教養とは何かということ数年前、これがなぜ教養教育になるのだということについて学内で大きい議論をしたことがあります。

もう1点は講師を公募によって学外から選んでいることであります。公募型のプロジェクト科目である。科目担当者として学内の先生がついて入るんですが、すべては学外のNPO、民間の会社、地方自治体等々の団体、個人がこの科目に自ら手を挙げて審査を経て引き受けていただいている。この点についても狙いがありました。それについて非常にリスクではないかという学内議論がありました。そういう議論を経て同志社大学のプロジェクト科目が成立して3年目を迎えようとしています。その内容に関してはシンポジウムの中で明らかになり、問題点も解明されるのではないかと期待しております。今日はこの2点だけに止めさせていただきますが、その思いで導入してきた科目も現代GPに採択されるということもありまして少し軌道に乗り始めているのかなという感慨深いものもございます。

本日のシンポジウムが現代の新しい教育、原点に返って学生を鍛えるということはどういうことを軸にPBLについて、多くの実りある成果が得られる議論となりますこと期待しまして開会のご挨拶に代えさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

【シンポジウム議事録 抜粋】

第一部：同志社大学プロジェクト科目の試み

「プロジェクト科目の目指すもの」 同志社大学 プロジェクト科目部会長 文学部教授 山田 和 人

ただいまご紹介に預かりました山田と申します。このプロジェクト科目に関しましては同志社大学が導入するにあたって、ただいま副学長の方からお話がありましたように全学的な議論を経て教養教育科目という形で設置されることになりました。今日はこの後、学生の事例報告がございまして、その後、座談会を予定しておりますので、私は立場上、前座を務めよ、ということですので、どういうふうなことをプロジェクト科目が行い、また目指してきたのかということをご紹介をさせていただきたいと思います。具体的な事例は学生からの報告の中で、こういうふうに学生たちが成長し、そして皆様方にその成果を報告することができているのだということをご報告をさせていただきたいと思っております。具体的な事例は学生からの報告の中で、こういうふうに学生たちが成長し、そして皆様方にその成果を報告することができているのだということをご報告をさせていただきたいと思っております。

それでは話に入らせていただきたいと思います。その前に考えてみますと私どもが小学校の頃を思い出してみますと、すべてのものが未知でワクワクするような学びの意欲を、かつて持っていたような気がするのですが、それが徐々に徐々に少なくなってきました、年齢が上がるにつれて少なくなってきました、大学に来ますとかなり下がってくるということがあるのではなかろうかと思っております。その頃には思いますには、やはり多分、知りたい、未知のものを知りたい、また同時にこのことを私が申し上げるのは、先頃、同志社小学校の方に授業参観に行かせてもらいました。その時に思いましたのは本当に純粋に知りたい、それから質問を受けて困っている子がいると助けたいと思う。そしてまた皆でそのことについて考えたい、一緒にやりたいという、こういう3つの要素を抽出することができます。そのことに関しては学びを考えていく上で一つのファクターになっているように思います。私たちは多分、そういうふうな原点にもう一度返ってみよう。同志社大学のプロジェクト科目はそんな変わったことをやっているわけではありません。むしろそういう学びの意欲をかき立てるようなプロジェクトを、できるだけ提供していきたいと考えております。

さてそこで大前提からお話をさせていただきたいと思います。先程説明がありましたようにプロジェクト科目は教養教育という位置づけをとっておりますので、その意味で言いますと、私たちが目指しているものを考えてみますと、自分たちが将来においても何らかの問題に出会い、それを解決していく時に、一体、どういう問題がどこにあって、その問題をどういうふうに解決していけば自分たちがたどるべき道筋が見えてくるのだろうかということを考えていく力を学生時代に養っていくことは大変重要なことではないかと思っております。これは一般的にも指摘されている通りですが、問題発見能力や解決能力養成、そしてまた実際の社会の中で、同志社には新島襄以来の伝統がありますが、良心を有しながらさまざまな課題に取り組んでいき、自分たちで解決していくことができるようなさまざまな多様な人間力を養成していく必要があるだろう、それを一応「教養」と考えようじゃないか。じゃ、それを身につけるためにはどうすればいいんだろうか。本を読んで学べばいいのかということも必ずしもそれだけではない。むしろ実際に自分たちが試みて失敗してそれを繰り返していく中で学んでいくものではないだろうか。共同的、集団的なチームとしてのプロジェクトの活動を行うことによって、そこで得ることができるものはずいぶんたくさんあるに違いないというふうに考えています。

こういった能力を持って、たとえば10年後に、その学生が何らかの困難な状況に差しかかった時に「ああ、あの時、こういうことがあったんだな、じゃ、そういうふうに乗って乗り越えていこうじゃないか」ということができるような、そういうありようが実は本当の意味での教養ではないかと考えます。今、いろいろな検定がブームです。京都検定とか、漢字検定とかございすけれど、検定というものも、一つの教養の知識を自分自身のものにする喜びというのは、それも教養と言えるでしょう。しかしながらそれよりもむしろ、そ

ういうものを蓄積しながら自分自身の生きざまにかかわってくるような問題を考えていくことができる力、そういうものを教養というふうに考えていきたいと思えます。

その意味で言いますと今、よく経済産業省などが「社会人基礎力」ということを申しておりますが、そこには3つの要素、「アクション」「シンキング」「チームワーク」という3つの要素が言われていますけれども、まさにこの3つの要素は予め最初からプロジェクト科目の中に備わっている、私たちの考え方の前提になっている事柄と言えようかと思えます。

そこでまず、プロジェクト科目とは一体どのようなものなのか。プロジェクトというものがどういう特性を持っているかは後に触れることにしたいと思えますが、先程PBLという言葉が出ました。Project-Based Learning、時にはProblem-Based Learningとも言われますが、プロジェクトを遂行していく過程でさまざまなことについて学びを深めていくというパターンだとご理解いただき、ただしその学んでいく主体は学生であって、そして同時に、これが重要なポイントですけれども、その結果、それを重視していくという成果主義という形ではなく、その成果に至るまでのプロセスを大事にしましょうということがプロジェクトを遂行する過程で重要になってきます。それから普通の授業ですと、いろんな知識を注入していくことに力点が置かれますが、むしろ注入したものをどう活かしていくかというアウトプットを重視していく考え方、したがってそこにいる教師の立ち位置も当然のことながら変わってくることになります。このあたりは後のシンポジウムでも話題になってくることかと思えます。

その意味で言いますと従来の科目と、こういうふうな差が当然のことながら出てまいります。従来の科目ですと主役は先生が主導権を握る、それに対してプロジェクトの活動は学生自身がプロジェクトに参画していくわけですから、当然のことながら学生主導であって、いわば聞いて受け入れるというより、むしろ自分たちが能動的に動いていって調査活動などを繰り返していくことによって企画・提案、そして自分たちが実践し、体験して学んでいくという経験。また従来の大学の知の蓄積という立場から言いますと知識や技術の習得・体系化という方向に向くものに対して、いわば知識の統合化・総合化、いろいろな能力をどういうふうに総合化していくことができるのか、その援用能力が非常に重要になってくる。活動の単位も私たちはチーム・グループで対応していくことを求めています。ですから個人が習得していくことと異なってくる。それから当然のことながら地域社会とのつながりというのは極めて緊密なものになってまいります。

一般的にプロジェクトの流れというのは、このような形をとることが多いわけです。ただこれは一般の企業の中で展開されていることと、そんな大きな差はございません。ごく普通のプロジェクトの遂行過程と言えるでしょう。最初に我々の場合ですと公募制ですから、あるテーマが提案されて、そのテーマについて実際に学生たちが議論を始めます。そして自分たちの方向性を決めて自分たちが一体何をやりたいのかということで企画書を作成し、その企画書をもって行動計画をきちっと立てていき、そして仕事を実践していくという、こういうふうなあり方を示すことになります。そして最終成果の報告会を開いて、最後に振り返りをやる。これが遂行過程になってきます。

では一体、プロジェクトはどのような特性を持つのだろうかと考えてみますと、まず期間が決まっている。次にチームでやりますから目的が明確でなければならない。3番目に自分たちでスケジュールを決めないと次の事業計画が立たない。自分たちのやっているテーマに合うようなマニュアルがそのへんにあるのかという、どうもそういうマニュアルはない。それからチームでやりますから人間関係がいろいろあります。そこから発生する場合もあれば、地域社会に出掛けていきますね、そうするとそこでいろいろなトラブル、リスクがその中に内包されています。それはあることが前提。そして大小さまざまな問題点をピックアップして見つけていって、それを改善する努力をしなければ所期の目的は達成することができない。これも条件です。チームでやりますから情報共有と時間管理がきちっとできなければチーム同士で動けません。そしてもともとどこに向かって発信するか。社会に発信することが大前提になっています。

これらのものは、ある意味では極めて不確実です。これをやったら間違いなくこの結果が得られますよというふうにはならないわけですね。しかしながらこれがプロジェクトの中にある不安定、不確実な要素とい

うものが、実は学生を鍛えていく重要ファクターになってくるのだと思います。その中で一般的に身につけられる能力はどんなものなのだろうかと考えてみますと、チームで活動していきますので常に求められるのがコミュニケーション能力と問題発見・解決能力、これは常に問われています。そしてたとえばそれについての議論をしなければならないという場合にも、こういう基本的な能力をさまざまつけていかないと議論の場に立ち会うことができない。そして自分自身の活動を振り返っていくという意味で言いますと、こういうような自己表現力や自己認識力、自己管理能力のようなものを身につけるために、こういう活動報告を作成し、提出することによって、それを振り返ることができる。そしてまた自分自身の仕事は一体何だろうか、どういう役割なのかということをきちっと把握していく力、そしてまた蓄積された調査データ、こういうものをしっかりと管理していく能力など、実にさまざまな能力を無意識のうちに彼らは身につけていくこととなります。意図的に学ぶという部分と無意識のうちの吸収していく部分がそこにはあるかと思えます。

そこでこのプロジェクト科目が実際にやっていることは何か。整理しますと、まず公募制をとっています。テーマを一般の方々に公募いたしましてエントリーしていただく形になります。次年度に関しては80数件エントリーしていただいて、その中から30件程度のもを採択させていただきました。それを提示していく形になります。その公募した担当者の先生には採択されたテーマの提案者を本学の嘱託講師として学生の教育のためにご尽力いただくということになります。

後は受講生側からいたしますと、この科目は教養教育科目ですので、1年次秋から4年次に至るまで全員が受けることができます。学部もさまざまです。この科目を履修するために私たちは説明会を催し、その時に学生が登録志願票を提出する。1プロジェクトは5～19名の少人数です。それを超えた場合には志願票や面接などによって選考がなされることとなります。それから科目運営に関しましては1セメスター30万円の授業経費を出しています。開講期間はこの4つの中からチョイスできます。春学期、秋学期、春秋連結、集中という形でいずれかを選択することかできます。1講義の時間は90分、これは一般の授業と同じです。1セメスター14コマです。2008年度から。単位数は1セメスター2単位となります。ただし学生は講義時間以外の時間帯にもミーティングや調査活動などをやります。そのために昼休み、授業の空き時間を活用してミーティングを重ねてプロジェクトの方向性を決めていくようになります。このように教養教育の中に位置づけられたプロジェクト科目は運営組織もこういう形にしっかりしたものをつくっております。また全学共通教養教育運営委員会の中に部会が設けられていて公募していただいたものに関してもここでしっかりと行っていくということになるわけです。

それを簡単にまとめますと、一つは教養教育科目としてのPBLとしてはおそらく全国で初めてだろう。それから先程、副学長からお話がありましたが、理工系、情報系、医療系、社会学系でプロジェクトは大体、専門の科目の中で実施されています。それに対して文系のPBLは極めて少ないということで珍しい例かと思えます。公募制のテーマ募集、教員の嘱託講師採用も珍しいだろうと。この科目の最大の特徴は常にいろいろな事象について現代的課題に取り組んでいくということです。伝統的なものであっても、それを現代のものにして受け止めていく。それから最後に挙げますが、現場の本物志向、つまり学びを誘発する仕掛けとして現場に行く、現場でものを感じる、全方位型で自分自身の感覚と認識力を駆使し、その中で学ぶ。本物に触れるということは極めて重要なことだと考えています。前から見るだけでなく、いろいろな角度からそれを見ることかできる、その意味で学びの進化というものがあるのではないかと考えています。

そういう形で公募し、説明会をし、選考を経て、選考いたしましたらその後、学外の先生方に対する説明会も行います。学生についても説明会をやり、登録という形になっていきます。そして春学期から授業が展開していきますが、基本的にはここで春学期の登録を済ませて履修中止等々なども中に含みこんでおります。これは後程触れます。それから学生さんたちにリーダー講習会や会計の説明会のようなものを行うことによってサポートをしていこうということです。必ず成果報告会を行っております。その後、成績評価になってきます。秋学期も同様の展開をしますが、春秋と連結の場合には春学期が中間報告、秋学期が最終成果報告という位置づけになってきます。そして1年間終わりますと学生懇談会、これはついこの間やったところ

です。来週には次の担当者、代表者の懇談会をして振り返って問題点をとらえ直し、次年度に活かしていく活動しております。

少しデータを紹介いたしますと、これは2006年度の履修状況であります。2006、2007年、そう大きな変動はないことにお気づきだと思います。そして受講生の学年がバラバラということです。いろんな学部です。円グラフの通りです。さまざまな学部の学生が履修しています。どんなことが起こるかと言いますと、ほとんどの科目がそうですが、第一回目の授業に行きますと、ほとんどが知らないんですね。初対面。初対面の人間が今からチームをつくっていかなければならないことになりますので、これは学生さん、四苦八苦ですね。そのところが一つの仕掛けにもなり得ているかなと思います。履修中止率を挙げていますが、最初、授業を受けて履修中止をその後申し出ることができるわけです。たとえば春学期の時もそうだし、秋学期に入る前についていけないという場合には中止することができるわけです。中止率が2006年度、8.66%、2007年度、5.86%、おお、すばらしいじゃないかと思っていただく必要はございません。私どもは履修が中止できることも重要なファクターだと考えています。チームで行動していくことになりますので、それがなかなかできないという傾向が出てくるわけです。そういう対応もとっておかなければならないだろうと。それでは同志社の基本的なプロジェクト科目の一定度の方向についてお話を申し上げたいと思います。

まず私どもはこの1科目、1科目を一つのコミュニティと考えております。いわば社会の縮図としてのコミュニティを、1科目、1科目の状況をとらえております。公募制で選ばれた科目担当者と科目代表者、科目協力者たちがいて、それが学生のコミュニティやチームを育てあげていく。そのチームがプロジェクト活動を通して地域社会のコミュニティと連携していく。学生たちはどんどん積極的になっていきますので、連携の域を超えて連帯のところまで進んでいきます。地域社会からの信頼と期待が責任と自信を生み出していくバネになっていくということです。この考え方を進めてまいりますと、究極はこういう形になってきます。今、私たちはこういう方向へ促進できるような仕組みを今検討中です。つまりプロジェクト科目同士の連携というものを強化させていこうと。そのことによってさまざまな部署との連携、連帯を始める。PBL科目が学校と企業の間をつないでいく場合も考えられます。また企業と役所の関係を学生が動くことによってつないでいく場合もあります。それがNPOとの連携をさらにつないでいく場合もあるでしょう。このようにしてプロジェクトの特性としては流動と増殖という要素があります。これは大学のカリキュラムの固定的なものとは比べますと極めて異質なものだと言えるかもしれません。こういうフレキシビリティというものを大学のカリキュラムの中に持ち込んでこなければならぬというのがプロジェクト科目の一つの魅力でもあります。

それでは学生の実際の活動が、どのようなものであるかを簡単に見ておきたいと思います。コミュニティという考え方をとっていきますと、学生コミュニティは一体どのようになされているか。現実にはこんな動きをしています。中心になっているメンバー、コアメンバーが2~3人くらい。それを守っている積極的なアクティブメンバー。その周りに実際に見ながら何かあればお手伝いをしているインサイダー。コア・アクティブ・インサイダーという層が現れてまいります。この形成プロセスを考えてみますと、まず「仲間のコミュニティ」を学生たちはまずつくります。これはおしゃべり集団といってもいいでしょう。それから次に「学びのコミュニティ」をつくっています。勉強会レベルのもの。それがフラットな中にコアなメンバーが集まったり、フラットな中にちょっと勉強したいとアクティブなメンバーが集まってきたりします。そしてそれが一つになってコアメンバー、アクティブメンバー、それからインサイダーのメンバーが一つになった時に「チーム」を形成することができます。このチームがプロジェクトを動かしていった時に最大の効果が得られる。いわば最初の段階では「何したらええの、僕ら」というふうに悩むんです。悩みの共感、それによって自己啓発への道が開かれます。そしてまたいかにこの問題について考えればいいのかということによって自己発見への扉を叩くことになります。そしてチームになって「じゃ、自分たちがやりたいことは？」と自己実現の世界へと進んでいくことになります。

ただよく言われることなんです、こういうことも考えられます。これについてはまた後程のシンポジウ

ムにお話をしたいと思いますが、常に学生がアクティブであるためには、それについてセーフティネットも張らなければならない。それは対外的な活動をする以上、当然そうなんですけど、それを学生自らが張っていく能力を持つということです。

プロジェクト科目の学習曲線についても触れておきましょう。これを簡単に見ますと、ワッと先駆けて、中だるみしまして、最後にギョッと上がってきます。これが理想の学習曲線です。ただ大切なのは踊り場のところを大事にするということです。踊り場が一月かかる場合もあります、二月かかる場合もあります。その中で彼らは葛藤して悩みます。どうしていいか苦しみます。その結果、上昇カーブが引き上げられていきます。これがプロジェクト型の学習の一つの魅力だろうと思います。

選ぶから、決めるへ。こういう仕掛けをいろいろな形で私たちは持っていくことになります。最初は0ベースのコミュニケーションかもしれません。全く初対面のところからコミュニケーション能力を鍛え上げていくことになります。PBLの持っている学びあう喜び、それをいかに引き出していくことができるかということが私たちの一つの重要な課題ということになります。これについてもまた後程、詳しくお話したいと思います。

常に絶えざるフィードバックの中に学生は置かれることによって学ぶ意欲を高揚させていきます。常にプロジェクトは現在進行形で動いていきますから現在進行形のサポート心掛けなければなりません。そして自分自身の気づきや振り返りを重視しますから、ポートフォリオ処理の評価をしっかりと入れていく必要があります。学生が個々に自分の能力を高めていくという活動を支援する。

プロジェクト科目の評価の問題についても簡単に触れておきたいと思います。自己評価・相互評価・第三者評価・総合評価。こういうものを試みていきます。これについても後に評価の問題が話題になってこようかと思いますが、その時に詳しく触れたいと思いますが、最後のところがなかなかきついですね。科目担当者が成果報告書を出さなければならないとなっております。私たちも授業をやりながら授業を終わったら成果報告書を出すのは大変だと思いつつやっていますが、先生方にはご協力をいただいているということでございます。

ただ先程申し上げたようにプロジェクト間の交流を重視するという意味では、私たちは次年度からそれをサイバー空間においてもサポートするためにSNSの開発に着手しております。おそらく春からそれが実用化されていくことになるだろうと思います。これもやはりプロジェクトがプロジェクトと連携を深めていくことによって、そのチームとしての成熟がプロジェクトの成功如何に深くかかわってくるということから、そういう努力を私たちは怠ることができないでいるということです。

それでは今から学生の事例報告に入っていきたいと思います。私がこういうふうに申し上げたのですが、さて、それがどのように学生の成果として発揮されるかを次の事例報告をお楽しみいただきたいと思います。それでは終わらせていただきます。ありがとうございました。

【シンポジウム議事録 抜粋】

事例報告：2007年度プロジェクト科目履修生による学生事例報告 1

■今出川校地開講科目「量から質への京都型ニューツーリズムの開発と流通」<春・秋連結科目>

司会 それでは引き続きまして2007年度プロジェクト科目から活動報告をさせていただきます。2007年度プロジェクト科目は京田辺校地、今出川校地、28科目が半期、通年にわたり活動を行ってまいりました。その中から本日のシンポジウムの演題にあわせまして地域の方々と深くかかわりながらプロジェクトを推進してきました二つのテーマについてご報告をさせていただきます。科目のシラバスをごらんください。



最初のテーマは今出川校地開講科目「量から質への京都型ニューツーリズムの開発と流通」。科目担当者は京都参画地域経営研究会・青柳良明氏、科目代表は文学部伊達立晶教授です。発表者は法学部・中村信博さん、経済学部・上田悠未さん、経済学部・三宅鮎美さんです。

三宅 ではこれから私たちのプロジェクト科目「量から質への京都型ニューツーリズムの開発と流通」の発表を始めさせていただきますと思います。私はこの科目のチームリーダーを務めました三宅です。

中村 サブリーダーを務めました中村です。

上田 上田です。

三宅 この科目のクラス構成からお話したいと思います。私たちのクラスは男性5名、女性7名の系12名で活動しています。受講生の学部は経済学部や商学部で学年は2回生から4回生と本当にバラバラなメンバーで構成されています。授業は土曜日1限に行われていました。この科目の担当者は京都府観光コンベンション室長の青柳先生、科目代表者は同志社大学文学部の伊達先生です。このお二人の指導のもと、私たちはこの科目を1年間進めてきました。次にこのプロジェクトの目的をお話したいと思います。

プロジェクトの目的は寺社仏閣を中心とする京都観光資源とは一味違う京都市周辺地域の観光資源に着目し、京都の新しい観光モデル、つまり京都型ニューツーリズムの創造、市場に流通させるまでのプロセスを形成することです。

中村 私たちは亀岡と井手という二つのフィールドに着目して活動しました。亀岡は京都市の西隣に位置しています。井手町は京都府の南に位置しています。1年間の授業の流れについて簡単に説明します。

三宅 その前に活動頻度についてお話したいと思います。週1回授業が行われました。内容としては大学でミーティングを行うか亀岡や井手町という地域でフィールドワークを行っていました。授業以外の時間でもメンバーはそれぞれ課題に応じたフィールドワークや会議を行っていました。普通の科目とは違うこのプロジェクトの特徴としては教室で授業を受ける時間よりも現地でフィールドワークを行って地域のことを知る時間の方が長かったことです。外部との連携や活動が多かったと思います。

中村 1年間間の流れについて簡単に説明します。4月、授業を開始しまして高台寺でフィールドワークを行いました。5月、亀岡と井手でフィールドワーク、図上演習、6月、井手で図上演習を行いました。7月は両地域でプレゼン、経過報告会を行いました。9月は国土交通省「ニューツーリズム創出・流通促進事業」に採択されました。秋学期は10月、亀岡祭に参加。11月、プレモニターツアー。1月にモニターツアー。成果報告会、2月、国土交通省に資料提出しました。3月には関係者の飲み会を行う予定です。

亀岡市での活動を紹介します。亀岡市は京都嵯峨からのトロッコ列車の終着駅で嵐山へ一気に下り、保津川下りの出発点にあります。また明智光秀が築いた亀岡城跡や城下町でもあり歴史を感じる街でもあります。観光の課題として嵐山が隣接していること、また亀岡の魅力が十分に発信できていないため、京都市内から観光客があまり流れないことでした。そこで私たちは亀岡の魅力発信して多くの人に知ってもらうことで市内から亀岡へ一足伸ばす流れをつくれなかと試みました。

春学期、現場を知るためにフィールドワークを行い、観光資源の発掘を行いました。そこで得た情報を図上演習で整理し、観光資源を結ぶことに力を入れてみました。フィールドワークは週1回の授業以外にも空き時間を見つけて、多い週では週3回行いました。その後、魅力的な観光資源を多くの人に伝えるために京都タウン雑誌 Leaf と連携し、亀岡の街を特集した記事を作成して Leaf 8月号に記事を記載しました。また観光資源が点在していたため、それを結ぶ観光モデルを亀岡市役所にて提案を行いました。提案内容として幸の畦道、城下町ウォーキングというプランを提案しました。

秋学期の活動について紹介します。亀岡以外から観光客を呼び込むために10月23、24日に開催されます亀岡祭で祭を盛り上げるイベントを企画しました。活動としては9月25日発売号の Leaf にて亀岡祭の特集の記事を作成、紙面に記載しました。またライトアップの演出を手掛けます CMA さんのもと3つのライトアップを演出しました。一つ目は JR 亀岡駅の恒常シートを一部利用し、デジタルカメラで撮った亀岡市民の笑顔を書し出す演出を行いました。実際に動画をごらんください。これは亀岡市民の笑顔で元気で明るいというイメージを祭に訪れる方に持ってもらうことをコンセプトに映像を作成しました。しかしこれには肖像権の問題等もあり、一回、一回撮影のために承諾を得ることが大変でした。計60枚近くの写真を撮りました。

二つ目は公園でのライトアップです。ペットボトルの中に青色のインク水を入れてその水の中にローソクを浮かべ、保津川をイメージさせる演出を行いました。やはり亀岡ということで亀岡をイメージさせる保津川を演出させることを心掛けました。

3つ目は地元小学生の協力のもと、影灯籠を実施しました。地元の小学生に、耐火性のある和紙に自由や願いごとを書いてもらいました。その紙を、側面をくり抜いた竹の中に入れてローソクで中から光を灯し、幻想的な演出を心掛けました。以上が亀岡での活動です。

上田 次に井手町での活動についてお話ししたいと思います。京都駅から JR で30分で行くことができます。この地域の特徴としては自然がたくさん残っていて春は桜、夏は源氏ホテルなど季節を楽しむことができます。またカマド炊きや草鞋づくりなど昔ながらの暮らしを体験することもできます。しかし、ここでいいものはたくさんありますが、ツアーに使えるような突出したものがないことが問題でした。取り組みとして春学期はフィールドワークや図上演習を重ねることで井手町の特徴を学習しました。そして自分たちの観光アイデアを現地の住民の方にプレゼンし、さらなる観光資源を発掘しようとして何度も井手町に足を運びました。この時アイデアとして出したのが、井手町にテレビで有名なダッシュ村をつくらうというプランや修学旅行プランが提案されました。そして私たちが考えた観光プランが国土交通省「ニューツーリズム創出・流通促進事業」に採択されました。ここからプラン実現に向けての活動が開始されました。

活動としてはプランとして使えるさらなる観光資源の発掘のためのフィールドワーク、地元の方との協議が中心でした。そして井手町近くにある和東町というお茶が有名な地域があるんですが、そこを井手町をつなげるプランを考えました。でき上がったプランはお手元にあるパンフレットの中に掲載されています。因みにこのパンフレットも私たち学生と LINK さんという会社を中心になって一緒につくりました。本番のモニターツアーの前に Leaf さんの全面協力のもと、Leaf プレモニターツアーを行いました。目的としては本番のモニターツアーの予行演習的な位置づけです。このツアーは昨年12月15、16日一泊二日の日程で行われました。参加者は Leaf 読者モデル4名の方です。ツアーの様子は今月2月25日発売 Leaf に掲載予定になっています。

パンフレットの中に Leaf に掲載したページにもあるのですが、その中の薬膳癒しプランというのが私たちが実際にやったプランです。このプレモニターツアーで出てきた反省を踏まえて本番のモニターツアーに挑みました。本番のモニターツアーは今年1月11～14日の3泊4日の日程で行われました。協力者は京都府、ツアーランド、京阪奈の薬膳研究所などさまざまな多くの協力を得てツアーが実施されました。参加者は16名で子どもから大人まで幅広い年代の方が参加されました。主に自宅が近畿圏の方が参加でしたが、東京から来られた方もいらっしゃいました。これがツアーの写真。1日目、ソバ打ちしているところ。これは2日目、和東町の正法寺で座禅している風景です。1日目、井手町の方が参加者を迎える「おいでやすパーティ」という歓迎会を開いている場面です。以上がモニターツアーの報告です。

このツアーを通して得られた対外的な変化として2点あります。一つ目は井手町にある JR 奈良線玉水駅に井手町の観光案内所を建設しようかという動きが今、起こっています。もう一点は井手町と和東町は今まで隣同士でしたが、全く交流がありませんでした。しかしこのツアーを通してこの二つの地域をつなぐことができたということが私たちが行ったプロジェクトの成果です。エンディングを見て終わりたいと思います。

三宅 これで私たちの発表を終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

<会場との質疑応答>

司会 続きまして質疑応答に移らせていただきたいと思います。会場からご意見、ご質問がある方は挙手をお願いします。

会場 大変面白いし、アクティブで、いろんなことが伝わってきますが、これまで和東町と井手町が関係がなかったのが、なぜうまくつながったのかという分析。そういうところは先生とかコーディネーターの方がお膳立てをしてくれるのか、あなたたちがどこをやったのか、大人から見ても多分、難しいところをサラッと「これまで関係があつたのが、できるようになりました」とおっしゃっていますが、どういうところが難しかったのでしょうか。ご存じの範囲内で。指導と自分たちがやってところを。

三宅 井手町や和東町に関しては「先生からこういう地域があるよ」と紹介を受けました。実際、そこを使うかどうかは学生が判断してプランに採り入れたという感じです。

上田 和東町と井手町は1本の道路でつながっている隣接した地域で、和東町はお茶の特産物があり、井手町はカマド炊き体験とか餅つきとか、その地域ならではの行事があって、その二つをつなぐ、点を線につなぐようなプランを考えました。

三宅 井手町も和東町も隣にある地域なのに、つなぐという発想自体、これまで全くなかったんです。私たちがつなぐことで「そういう考え方もあるんだね」ということをおっしゃっていました。

会場 中小企業機構アドバイザーで今、亀岡市の商店街の活性化、旧城下町を築城400年に向けてどうするかということで観光協会にもアドバイスしている立場で地元の大学でも講師をしております。亀岡の観光協会のもとに学生企画委員会をつくりたいという話をしています。皆さん方が亀岡で活躍されたことを受けて「このプロジェクトは終わらない」と結んでありましたが、亀岡にかかわったことを皆さんが中心になって改めて観光の現場に活かしていくという、持続可能をまちづくりへの参画ということプロジェクトで学び、皆さん方にそういう気持ちを生むことかできたのかどうか、もしそういう呼びかけがあれば、この企画に参加していただけるかどうか、そのへんのところを。

中村 授業は1年間で終わってしまいますので、その後の活動については未定ですので、何ともお答えがしがたいということですが。

司会 それでは「量から質へのニューツーリズム開発と流通」の皆さんありがとうございました。

事例報告：2007年度プロジェクト科目履修生による学生事例報告 2

■今出川校地開講科目「子どものための京都職場図鑑作成プロジェクト」<春・秋連結科目>

司会 次のテーマの報告です。今出川校地開講科目「子どものための京都職場図鑑作成プロジェクト」。科目担当者は株式会社「空」取締役遠藤正彦。科目代表は文学部橋本和佳教授です。発表者は商学部・木村真規子さん、文学部・大野景子さん、文学部・安本梓さんです。



大野 私たちは同志社大学プロジェクト科目「子どものための京都職場図鑑作成プロジェクト」の受講生です。本日はこのプロジェクトの事例報告をしたいと思います。私たちの活動内容の映像をごらんください。

このプロジェクトをこのように進めてきたメンバーの紹介をしたいと思います。リーダー木村真規子、サブリーダー谷優香、片浦弘貴、中井美里、角井真朋、安本梓。大野景子。以上のように様々な学部から様々な学年からこのテーマに惹かれて、一人ひとり違う個性を持った学生が集まってきました。ここからプロジェクトの活動内容に入ります。

木村 このプロジェクトを紹介させていただきます。私たちは目的を個々の成長に。目標を子どものための京都職場図鑑の作成と掲げ、1年をかけてプロジェクトを進めてまいりました。これは図鑑完成までの達成度のグラフです。詳しく書いたものをレジユメに載せております。このようにコンセプト、下調べ、取材、編集の過程を経て約10カ月かけてプロジェクトを進めてまいりました。時を追って図鑑完成までを説明させていただきます。

4月、5月頃、「子どものための京都職場図鑑」というテーマに惹かれて集まった私たちは初めて顔を合わせました。そしてこの図鑑のコンセプトを考えていきます。プロジェクトを最後までブレないように進めていくために「何のために、どんなものをつくるのか」ということを全員で一つの気持ちにまとめあげていきました。そして冊子にするのか、Web上にするのか、また伝統的な職場にするか、現代的なものを探り上げるかなどを決めながら、私たちは子どもたちにとって意味のある図鑑にしたい、そういう思いをもってコンセプトを考えていきました。これが授業の風景です。はじめは全員で話し合っていたんですが、7人くらいいるメンバーで、なかなかうまく話がまとまらなかったということもあり、2チームに分かれて話し合い、週1回の授業で双方がコンペ形式で話し合っていました。そうして意見を深めていきました。この時に私たちが大切にしていたことは「全会一致で全員が納得するまで話し合う」こと、そして「他にはない私たちだけのオリジナルのものをつくらう」ということでした。

そこで出てきたものがこちらです。京都の伝統産業を探り上げる、そして中でも多くのものが関わっている茶道文化を扱いたい。京都の伝統産業などに見られるモノを大切にするという気持ちを子どもたちに伝えていきたい。そういう思いが出てきたので、このようなコンセプトが完成しました。しかし6、7月頃、このコンセプトをもう一度考え直しました。というのは伝統産業というのはモノを大切にというだけではないはず。私たちは携わる人たちの思いや誇りを伝えていきたい。子どもたちにそのまま教えていきたいと思っていたけれども、「モノ大切に」というコンセプトにした時、職人さんたちの言葉を自分たちの都合のいいように解釈してしまう危険性があるのではないかと。そういうところに疑問を感じ、もう一度「誇りとは何だろう、伝統とは何だろう」ということを考え直していきました。そういう流れでできたコンセプトがこちらです。

「京都文化に触れる図鑑—伝統産業に携わる人の誇りを通じて」。対象として目指したのが小学4年生

の社会科、地域学習で活動でき、さらに調べ学習に対応した補助教材というところ。形式はペラペラとめくって気軽に見られる紙媒体の図鑑。そしてDVDを考えています。こうしてコンセプトが決定したところで8、9月の夏休みに入ります。この頃は個々にメンバーは留学やインターンシップなどさまざまに忙しく、チームとして揃って活動するのが困難な時期になりました。そんな中でも動けるものが動いて、茶道の先生や職人さんにお会いすることができました。そこで出てきた課題を受け、私たちが何をつくり、どんなものをつくりたいかを具体化して、それを職人さんに伝えるため、絵コンテをつくりました。そしてさらに職人さんのお話を、より子どもたちにわかりやすい文章をつくるべきだということからライターさんへ文章の作成を依頼することに決定しました。このような流れで8月につくった手書きの絵コンテです。こういうものを持って行って職人さんたちに「私たちはこういうものをつくりたいんです」ということを紙面と内容のイメージを絵コンテで伝えていきました。

こちらがその時に考えていた実際の図鑑ページの構成です。はじめに図鑑は茶道を採り上げるということで茶道文化についての紹介を見開きで1ページ。その後、職人さんのページを見開き2ページ。前半がモノについて、後半が私たちが伝えたいその人たちの思いについて考えていきました。その他に京都文化のイメージ図、京都の伝統産業の職場地図などを考えていきます。職人さん、ご協力をいただきライターさんに取材前に渡す資料です。図鑑の詳しい内容、質問事項を考え、準備していきました。例えばモノについてだったら「釜をつくる際にはどんな工程がありますか?」とか、思いとしては「つくり手としてうれしい時はどんな時ですか?」。こういうことを事前に考えてインタビューの内容を漏れなく聞いていけるように考えていきました。それが終わり、10月頃、秋学期の授業が始まり、全員で再度、チームとして活動していきます。ここでやっと職人さん方に実際に取材を行いました。取材させていただいた方々は5人の職人の方たちです。裏千家の金沢宗維先生に4人の職人さんたちをご紹介いただきました。そして取材を行っていきました。取材は3、4人くらいで行かせていただき、内容はインタビューと作業風景の撮影です。その後、インタビューは私たちが行い、同行していただいたライターさんにその話を文章に起こすお手伝いをさせていただきました。秋学期はこのように取材、この後、続く編集作業、その他にもさまざまなページがあって、それらをつくるために各チームメンバーは一人平均2~3個の仕事を受け持つ。週に大体2、3個くらいの締め切りがある忙しい日々が続いていました。

皆が目目の前の仕事で手一杯になってプロジェクト全体の動きが見えてこないという問題が起きた時期も、この10月頃です。これらを受けてつくったのが全体スケジュールです。こうしていつまでに、誰と誰が、どのような仕事をして、どこまで完成させるかということメンバーの一人ひとりが確認できるように工夫していきました。こうしてプロジェクトを秋学期進めてまいりました。10月、11月頃、編集作業が始まります。取材で得た写真や文章をどのように反映するか、レイアウトを考えていきます。

実際に考えていたはじめのデザインです。最初どういうふうにつくったらいいのかわからなくて手書きだったり、ワードで仮のレイアウトを作成していきました。しかしこのままでは十分なデザイン性を発揮できないということがあってデザイナーさんにご協力いただき、描画ソフトのイラストレーターでの作成に挑戦していきます。こちらが実際に使ったイラストレーターでつくったものです。イラストレーターという機能はワードと違ってさまざまな難しい問題がありました。たとえば自分でページの枠を決める必要があるとか、ふりがなの機能がないので一つひとつ文字を打って貼りつけていかなければいけない。また画像を貼るにも配置という特殊な方法をしなければいけないとか、データが重くてソールでは送受信もできず、しょっちゅう壊れてしまって、すべて台無しになってしまうなど、様々な問題があって初心者の私たちにはとても難しいものでした。それでも何とか手さぐりでギリギリ習得していくことができました。

そして、それらを得て編集の作業が始まります。最初にありましたムービーでご紹介していましたが、このままではとても印刷に間に合わないということで編集のために徹夜で泊まり込みの合宿を行いました。さらに素人で行っていたので、ごちゃごちゃになってしまっていたデータを、デザイナーさんに依頼して紙面を軽く整えていただくなど、いろいろな方法で何とか編集を完成させようとしてきました。こちらがデザイナーさんに手を加えていただいたものになります。先程のものとは違って本としてもとても美しいでき上がりになっています。しかしこのままでは肝心の子どもたちに対して、これが一番興味を持ちやすくわかりやすいものになっているのかということで、私たちはちょっと疑問を感じてしまい、さらに自分たちで修正を加えました。それがこちらです。子どもたちにとって親しみのあるもの、わかりやすいものと考え、可愛らしいイラストやカラフルなイラストで子どもたちにとっても親しみやすい紙面に完成いたしました。こうして図鑑は1月完成いたしました。

さらに1月はプロジェクト科目として成果報告会、同志社小学校のご協力を得て発表授業をすることもあり、プロジェクトはこれで一つの区切りを迎えることができました。

安本 それではこれからできた図鑑について簡単にご紹介していきたいと思えます。私たちはこの図鑑をつくる際に実際に現場で使われている教科書、資料集、学習指導要領や図鑑などを調べまして、現存しないもの、子どもたちが実際に使えるもの、幅広い学びのきっかけになるものを目指し、このような4点をセールスポイントとして作成していききました。

まず人の思いや心に重きを置くものであること。そしてありのままの京都の伝統産業や職人さん方に触れられるもの。それから調べ学習に導けるものであること。さらに教科教育の補助教材としてだけでなく、一冊の読み物として成立するものという4点です。これらの思いを込めまして、私たちは「もっと京都発見図鑑 職人さんの心を感じて」という題名にして図鑑の作成に取り組んできました。それぞれの紙面、1ページ、1ページに作成した理由と思いがあありますが、その中から今回は特に調べ学習に対応した部分について簡単にご紹介させていただこうと思えます。

私たちはこのプロジェクトを行うにあたり、メンバー一人ひとりの興味や好奇心を活動の原動力にしまして図鑑の作成を進めてきたのですが、子どもたちにも私たちがこの図鑑作成をたどってきたのと同じように、個々の「知りたい」とか「何で、だろう」という気持ちを持って自分たちの興味を深める自主的な学びを行ってほしいと、それこそが知識を詰め込む形ではなく、本来の学びの姿なのではないかと思っており、このような調べ学習のページを作成しました。

私たちは伝統産業の中で特に茶道文化に焦点を絞って、そこから派生する伝統産業の道具を扱っていただける職人さん方に取材させていただいたんですが、他にも京都では今、72の工芸品が伝統産業として指定されています。それをまず写真で視覚的に提示しました。それから職場の位置づけを地図で形成しました。そうすることで自分たちの周りや近くに、こんなにもたくさん職人さんがおられて、その技が何百年もの間、受け継がれてきたんだということを子どもたちに知ってほしいと考えました。そしてそれぞれの伝統産業の中から一人ずつ連絡先、住所と電話番号を掲載することで、子どもたちに実際に行動して職人さんに直接触れてほしいという、きっかけづくりを行いました。その時に体験ができる場、資料館を設けておられる方などを、なるべく子どもたちにとっても学びを深めやすい場所を探して、それぞれマーク別に分けて表示することでスムーズに学習が行えるように工夫しました。また授業だけでなく家庭や夏休みの自由研究などで子どもたちが個々に学べるように取材の流れを簡単に紹介した「調べ学習」のページと知識を深めるための資料、書籍、インターネットのホームページを紹介する「情報集め」のページをつくりました。そして私たちの思いを込めた「編集後記」と「あとがき」を書いて図鑑完成ですが、図鑑は全40ページのフルカラー、全部で80部印刷しました。本当はもっと沢山つくって少しでも多くの方に見ていただきたいと思ったんですが、予算の関係上、これ以上つくることができなかつたので、でも大切なのはつくることではなく、つくってこれをいかに多くの人の学びのきっかけにするかということだと思ったために、この紙面を全く同じものをPDF化

しましてネット上にホームページにして載せました。個々の友だちや身近なところから少しずつ多くの人に広めていけたらというのが私たちの夢であり、目標であります。

因みにこれが72の職人さんの地図、住所の形成をお願いする際に使用したリストです。実際にお電話をさせてもらったり、伺ったりして掲載の許可とかご協力を得てきました。多くの職人さんが「たくさん子どもたちに、私たちのこの熱い思いを伝えたいので、ぜひ頑張ってください」とおっしゃってくださったんですが、このような方々との出会いなどが私たちの力になりました。

完成したDVDについて。これは職人さんの本物の姿、作業とかお話を、子どもたちに伝えてリアリティを見せるために作成しました。各職人さんのそれぞれの作業風景、インタビュー、制止画像を取り組みまして授業で使いやすいようにすべてにチャプター付けをしました、合計で約60分くらいのボリュームになっています。

大野 以上のように図鑑とDVDを作成したわけですが、作成しただけで終わったわけではありませんでした。作成する5、6月の段階からずっと同志社小学校の先生方にアドバイスをたくさんいただきました。先日、2月に入ってから同志社小学校4年生を対象に社会科の単元「京都市の伝統産業」の導入となる第1時間目の授業を私たちに行わせていただきました。その映像がごございますのでごらんください。この授業で子どもたちに職人さんの思いを伝える授業をしました。図鑑を実際に読んでもらって印象に残った言葉をワークシートに書くという作業の学習をしました。

安本 職人さんの思いを子どもたちに伝えて、そこで個々の子どもたちの思いを発表してもらうことで子どもたちと職人さんの心をつなげるという授業を目指しました。

大野 授業後に先生方に反省点や改善点のアドバイスをいただきました。以上のような図鑑の作成、そして小学校での授業で得た私たちの成果は以下のようなものです。

まず私たちが最初から自分で考えだしたコンセプトを図鑑という形に具体化、完成させることができます。それを持って実際に子どもたちが図鑑を読み、職人さんの思いに触れ、さまざまなことを感じ取ってくれました。たとえば職人さんの言葉の中に「初心を忘れない」という言葉があったんですが、初心を忘れないという言葉が子ども自身の体験に重ね合わせて「初心を忘れないという事は難しいな、でも大切なな」ということを子どもなりに考えてくれたことがありました。

木村 こうして完成させた図鑑、この冊子とは別にPDFの形でWeb上で公開しています。株式会社「空」で検索してみてください。この図鑑は日本の中心でもある京都の美しい魅力、また伝統の魅力が、かいま見える内容の濃いものになっています。子どもだけでなく大人の方、京都以外の方に教育の場所でも、ご家庭でもさまざまな場所で、一人でも多くの方々にこの図鑑を見ていただきたいと思い、こうしてWebで世界中に発信しております。ぜひとも一度ごらんになってみてください。また完成した図鑑を後ろに置かせていただいています。皆様が知らない京都の一面もあるかもしれません。ぜひ一度、覗いてみてください。一人でも多くの方にこの図鑑を通して京都のこと、伝統のこと、誇りのこと、いろんなことに思いを馳せていただいたら私たちにとってこんなにうれしいことはありません。それでは最後になりましたが、このプロジェクトを通して、こんなにたくさんの方々にご協力いただきました。この場にいらっしゃる皆様にも心から御礼申し上げます。ご静聴ありがとうございました。

< 会場との質疑応答 >

司会 それでは会場の皆様よりご意見、ご質問を承りたいと思います。

会場 私も大学でPBLの授業をやっていますが、非常にすばらしい発表で、ぜひこれからも参考にさせていただきたいと思っています。お礼を言わせてください。実際にPBLをやる立場の人間として3つ質問をさせていただきたいと思っています。1つ目。PBLという活動されて何がよかったか。2つ目。逆に悪かった点。PBLのここはちょっと悪いんじゃないかという点。3点目。ファシリテーターとして教員が入りますが、先生にPBLでもうちょっとここをこうしてほしかったという点を。できれ

ばホンネで聞かせていただければと思います。

木村 この授業で何がよかったか。私の感想ですが、一番よかったのはいろんな人に出会えたことかなと思います。このプロジェクトを通してここでは紹介しきれなかったような紆余曲折があり、いろんな悩みがありました。こうやって一緒に最後までやっていける仲間たちがいて、思いを伝えてご協力してくださる職人さんたちに出会えて、さらに職人さんたちのすばらしいものに出会えて本当にさまざまなものを学べたかなと思います。学べた理由はすべてが出会いなんだかなと思います。個人的に思うのは自分がやらなければいけないという状況に追い込まれるのが、このプロジェクト科目だと思いますけど。次に自分が何をしなければいけないのかという考える力がついて、さらにそれを実行に移さなければ何も動かないので、自分がしなければいけない当事者意識が、すごく身につけさせていただいたのではないかなと思います。

大野 PBLで、よくなかった点ですが、ほとんど思い浮かびませんでした。進めていく中で辛かったことは仕事の量が膨大で、どこまでやっても終わりが見えない。本当にできるのかなという不安が、いつも全員の中にもありました。なるべくスケジュール表で、何を、誰が、いつまでにすべきかということ全員で把握していくように気をつけていました。

木村 追加して。時間に追われる日々でした。メンバーも学生だから時間があるというわけではなく、一人ひとり他の団体の活動とか就職活動、院試、卒論とかに追われていて、いくつか何かを犠牲にしてきたような気がします。そのへんは逆に得られたものが多かったのもので、今となっては笑って話せるんですが。その点くらいかなと思います。

安本 ファシリテーターとしてクラスの先生のかかわりについて。このプロジェクトで私たちはほぼ自分たちで話しあって考えるという形をとらせていただきました。先生にやっていただいたのはプロジェクトのあり方を教えていただくとか、一人ひとりのリーダーシップが大切なこと、スケジュールリングの大切さ、運営していく上でのスムーズな形式を教えてくださいました。毎回の授業の最初に1週間あった事実とそれに対する気づきを全員が発表してからプロジェクトに入るとか、チームワークを高める工夫を提案していただいたり、形式的な部分についての支えをたくさんしていただきました。

会場 素敵なプレゼンテーションをありがとうございました。3つご質問です。一つ、リーダー木村さん、サブリーダー谷さん、以下、ペーパーに役割がありますが、それがどういうタイミング、というプロセスで決まっていたのか。2点目。このようなプロセスをなし遂げられて皆さんの将来の職業選択、キャリア形成に何らかの形で影響を及ぼすのではないかと予測するわけですね。その点についてのコメントがあれば。予算の都合で80部しか印刷できなかったということですが、いかにも勿体ない。出版契約、私の方でよろしければ仲立ちをしたいと思います。

学生 お願いします。

学生 すごくうれしいです。

会場 予算が足りないとおっしゃいましたが、一体、予算はどのように皆さんは執行されたのかということ、立ち上がったことですが、お聞かせください。

木村 まず役割の決定、プロセス、タイミングについて。はじめの授業で先生に役割を決めようと、やり方を提示していただきました。「リーダーとはこういうものだよ」と先生の口から教えていただき、自分たちでかみ砕いて考え、誰がいいか考えて、誰一人知り合いがいない状態だったので、まず立候補。その後、なぜか立候補する人もおらず、次は他薦の形で何となくならせていただきました。副リーダー最初の授業の時に決めさせていただきました。副リーダーは変更もあったりしたんですが。

安本 その時、その時で必要になってきた仕事を得意な分野とか、これがやりたい。プレゼンは誰がやるんだろうと。プレゼン能力を高めたいという個々の思いをメンバーで尊重しながらプロジェクトを行ってきました。

2点目の職業観について。このメンバーは個々の夢などがありまして、プレゼン能力を高めたい、人

の役に立ちたい。将来、マスコミ系に入って思いを人に伝える仕事につきたいという人もいまして、職人さんにインタビューをする人が担当したり、受け答えをしました。私たち二人は将来、実際に先生になりたいと考えていまして、実際に子どもたちのことを考えながら、このプロジェクト自体、これからの教育に必要な形ではないかと、やっけていて感じました。メンバー個々それぞれ、この経験を職業選択などに活かしていけたらと思っています。

大野 3点目の予算の話ですが、最初、プロジェクト科目に予算がついていまして、1年間の科目なので60万円の予算がありました。その中からライターさん、デザイナーさん、図鑑の印刷の予算を考えまして、あとは各職人さんへの手土産とか必要な資料を買うことに使っていました。

会場 年間60万円というのは当初予算で示されていて、その範囲内で活動していくスタイルですね。それは1年間で執行してしまうと。皆さんの授業料から出ているんでしょうけど。わかりました。ありがとうございました。

会場 私の大学でもプロジェクトベースのことを学生にやってもらっていますが、ネガティブっぽい質問ですが、こういうプロジェクトをやりますと、わりとチームが仲良しになりまして、それによって皆さんの世代はそうだと思いますが、中に入っていけないで議論していると、面白いアイデアとかだんだん潰れていきまして、だんだんつまらなくなっていくんですね。話し合えば話し合うほど、あるスタンダードのところにと束縛していった既存のものとは変わらない、個性的でない、ある意味でソフィスティケートされて洗練はされていくんですが、どこかで見たことがあるような形になっていく。最初に全員一致で決めようというコンセプトだということですが、本校の場合はとりあえず「群れるな」ということを言っています。あまり仲良しになって、全体のコンセプトを決める時はそうだけど、個々の責任分担を厳しくして個人の頑張り力を入れる。個人がここで踏ん張らないとそのプロジェクト全体が進まないということがあるんですね。そういう中で一つは途中で険悪な空気になったことはないのか。とてもうちはよくあるんです。そこでコーディネーターの教員は難しい選択をしながらコントロールしていかないといけない。学生の立場でそうなったとしたら、どう打開されたか。

木村 基本的には仲良しチームという感じですけど、その中でも問題は多々ありました。しかし険悪っぽい感じになったことが一つあったんですが、もともとチームメンバーにいた人が脱退することがありまして、その理想が自分の思い描いていたコンセプトと少しずれが生じてきて「自分がやりたいと心から思えなくなった」ということが大きな理由でした。その時にリーダーをしていたのに私が留学していてなくて、夏休み帰ってきたら、彼が一人いなくなっている状態でびっくりしたんですが。

安本 もともとこのプロジェクトは10名いたんです。個々の理由で抜けてしまったこともあるんですが、授業のない夏休みの段階がプロジェクト継続とか連絡をとることが難しく。授業があると週1回必ず会う機会があるし、期限が1週間しかないのだから次の週までにしないといけないことが明確にあったので、基本的に一つのものをつくりあげることがあったので、いろんな意見で対立することはありましたが、最終的に互いが納得できるまで話し合う形でクリアしてきました。時には納得がいかないまま、多数決で進めるために妥協したこともあります。最終的に後で「あれでよかったんや」という気づきを持つことができたんです。リーダーが皆のことを気づかってくれて連絡もまとめてくれていたのが、2カ月間、リーダーがいない時に今度はそれを誰がとりまとめていくか、結構、皆、多忙な毎日だったので、バラバラになりかけたんです。その時に助けてくださったのが科目担当されている遠藤先生と小寺さんで、メンバー全員と科目の先生で集まる機会を持って皆で思っていることを腹を割って話そうと。そうすることでもう一度「やっぱりやりたい。しんどいけど皆でやっけていこう」と団結したことで再びプロジェクトが動くことができました。その時にやめてしまった一人は「自分の思っている方向と違うので脱退する」という形になりましたが、その後も彼とは連絡をとっていらして、何かあるたびに「頑張ってください」と声をかけてくれたり、図鑑も見せて喜んでくれたんですが、その彼が後で言うには、リーダーが、親身にやってくれたんですが、「脱退することも経験になっ

たのでよかった」と彼は言っていました。なんでも思い続けることですかね。

大野 夏休みが一番の危機というか、険悪になりかけた時ですが、その時に全員で集まって腹を割って話す機会の時、「それでもやろう」と言ったメンバーがいて、その人たちの空気に全員がグッと引っ張られていった感じがしました。それでもついていけなかった人もいましたけど。

安本 私たち全員一致して、一つ持っている最後の成果ですが、それは「人と人とのつながり」と考えています。メンバーとの関係も担当の先生、立ち上げてくださった山田先生、その他、かかわってくれた職人さん、先生方の熱い思い、応援を感じる機会がたくさんありまして、それに応えないわけにはいかないというのも、諦めない力になったと全員が感じております。

会場 どうもありがとうございます。大変すばらしい成果で収束することができてよかったなと思います。ご苦労様でした。

司会 「京都職場図鑑」の皆さん、ありがとうございました。

<プロジェクト科目検討部会長と学生報告者全員（11名）との座談会> 壇上に集合

司会 それではこれより山田部会長を交えまして座談会に移りたいと思います。

山田 実はこの座談会でホンネを一杯聞こうと思っていたんですが、鋭い質問が浴びせかけられまして、どうも座談会の先取りをされてしまったなという感じがあるんですが。プロジェクトを実際に推進していく上ではいろんな問題点があります。常にそういう意味ではきれいごとにならないと。このプロジェクトという活動は社会の縮図ですから、常に不安定、不確実、さまざまな要因が絡んできます。そこでいろんな困難に遭遇してきますから、それをどういう形で彼らが克服していったかという、そのところが一番のポイントになるかなと思っています。今日は展示発表の形で参加してくれた方たちも含めて、その3つのプロジェクトが、一体どんなことに取り組んできたのかをお話をいただき、それから皆さんにご期待の向きが多々あると思いますが、本音トークに入りますので、しばし、お時間を頂戴したいと思います。



中村 「新しい京都逍遙ガイドンスをつくろう」というプロジェクトを行いました。僕らが制作したガイドンスブックを入れております。淡い色の「歩想」です。僕らのプロジェクトについて説明させていただきます。京都は年間4700万人以上の入浴観光客が来る場所です。観光誌、情報誌があると思います。そういうものの多くは短い文章でコースも決まっています。決まりきった、きれいなものだけを見ているのではないかと。つながりの薄い情報を載せているものが多いように思います。僕らはそういう情報誌や観光誌とは異なる冊子をつくろうというプロジェクトで進めていきました。自分たちの思うように歩くことで自分たちの愛したくなる場所、大切にしたい場所を思うままに歩いてみよう、「逍遙」というテーマで取り組んだんです。ぶらぶら歩きという意味です。「逍遙して大切な場所を見つけてもらおう」というコンセプトでこの冊子をつくりました。この冊子を読んだ人が自分も京都の大切な場所を見つけてみようかなと思ってもらうつもりでつくりました。今月、2月発行の京都CFという情報誌、公称7万部の京都の月刊誌の中に綴じ込んで本屋さんで発売されています。

この冊子自体、取材、調査、記事、写真、作成すべて学生の手で取り組み、記事を書いて制作してきました。物語を読んだ後の読後感があるような記事になっていますので、京都を知っている人だったら入り込めるのではないかと考えています。このプロジェクトを終えて井上君から感想をお願いします。

井上 メンバーは10人いましたが、それぞれが「歩想」の中で一人ずつ一つの記事を担当しています。その

他にも皆でチームに分かれて5つの特集も組みました。最初は一人ひとりが自分の記事を書いて掲載していくことに注力していたんですが、だんだん授業を重ねるごとに自分たちの記事に足りない部分があったり、視点が明らかになってきました。そうして自分たちで授業外に昼休みや放課後集まって、自分の記事以外の記事を読んで「こういう視点が足りない」とか「思いがまだ伝わらないんじゃないか」と自分のことのようにだんだんチームとしてまとまっていくのが印象に残りました。何かやろうとする時にチームとして意識を持っていく大切が一番の勉強になりました。

福田 私は「京都の文化的景観 その保全・活用とまちづくりを結ぶ」というテーマのプロジェクト科目を受講しました。私たちの科目では京都の文化的な景観とは何かということを受講生各自で考え、その意味をとらえていくことを目標として活動していきました。通年の1年間の科目でしたが、前期は同志社大学周辺の地域、上七軒や寺町通りにフィールドワークを行ったり、景観法や文化財保護法など景観に関する法や制度を学んで文化的景観について知識を深めていきました。

そこで調べた成果を発表して、また多くの人が景観について考えるきっかけになる場をつくりたいということを考えてシンポジウムを企画しました。シンポジウムを11月10日に「共有・継承すべき京都の文化的景観とはなにか」というテーマで行いました。フィールドワークを通じた学習成果の発表や学識経験者、行政の方を招いてパネルディスカッションを行い、来場して下さった方々が「景観のことをよく考えるきっかけになった」と評価していただきました。その成果を報告書としてまとめ、展示コーナーの方で配付しておりますのでご希望の方は手にとってみてください。

山田 ありがとうございます。座談会が終わりましたら学生さんも後ろに並んでいただけますので個別にいろいろと聞いてあげてください。

辻 私たちのプロジェクトは「食育と健康」をテーマに薬膳の食養生を中心として学んできました。リーダーの辻です。サブリーダーは渡辺さんです。私たちのプロジェクトはその名の通り健康というものを食養生である薬膳の知識を通して学び、自分たちで学んだものをたくさんの人々に知ってもらって社会全体の健康増進を目指すというプロジェクトです。その目標を「My 前薬膳から Our 薬膳へ」という一つの言葉にして活動を進めてきました。前期の授業では専門の方を呼んで薬膳の基礎概念である東洋医学などを中心に学んできました。そして薬膳メニューを自分たちで作り、そして専門の方々に認定を受けることで My 薬膳を完成させました。そして今度は My 薬膳を Our 薬膳にするために今度は自分たちでどうしたら皆に知ってもらえるかを考えて、薬膳ジュースをつくらうということで学生に向けてつくることを企画しました。まず今回は学生をターゲットに、ということだったので、今回は同志社大学にご協力をいただき、同志社大学の生協や今出川と京田辺の両校地で販売することを、交渉で後期の授業で販売にこぎ着けることができました。

今回、薬膳ジュースは3種類つくりました。1カ月の期間限定販売で行うことができ、316杯売ることができました。しかし当初予定していた目標には届いておらず、そこで何が問題だったのかということを知り、皆で話し合い、今回、その問題点を解決し、次に販売したのが薬膳粕汁で、こちらの方はネーミングなどを改善したところ1店舗のみの販売でしたが、薬膳ジュースよりはるかに売上を上回るということができ、生協さんの方でも学生が企画したものを生協でも受け入れられるというメリットができたということで、喜んでいただきました。今回は私たちの利益ではなく、生協さんの方でも利益を生むことができ、交渉していく上で両者のメリットが生まれることができたことを学べたかと思いました。プロジェクト科目を通してリーダーをさせていただきましたが、私は今までの人生の中でリーダーをやったことがなくて、ほんとに最初はどうかということでしたが、私たちのメンバーは5人で私の足りないところは皆にカバーしていただきました。私はリーダーとして絶対これだけはやろうとしたことは「各自の長所を絶対に見る」ということでした。私はすごくいっぱい足りない点が多いのですが、その分、皆が、いい点を持っていることを気づけることだけは自信があったので、誰がどんな長所を持っていて、それをどういう場で活かせるかということリーダーとして絶対これだけは忘

れないことは1年間頑張ってきました。その結果、交渉などいろいろ社会性が足りないところや、アイデア力が足りないところ、料理のできないところとか、全部皆が補ってくれましたけど、皆のいい点を見つけることができた自分がいたことが、この1年で学べてうれしかったことです。私を一番支えてくれたサブリーダーの渡辺さんに、この1年を振り返って一言お願いします。

渡辺 このようなとても楽しいリーダーのもとでプロジェクト活動「食育と薬膳」の活動をさせていただきました。

山田 ありがとうございます。座談会と言いながら場所の関係で立談会になっていますが、皆さん方、いかがですか。ずっと聞いていただいて、多分、何か共通しているところを感じられた部分があるのではないかと思います。進めていく中で、どこかに何かターニングポイントがあって、その時に「テーマを再構築しないといけないよね」というところに、どうも皆がそれぞれに遭遇しているような感じがするんですね。そういう意味では報告の中でも含まれていましたが、いろいろなところでそれがあると思いますが、それについて少し触れていただこうと思います。本音でいきます。どつきあいの喧嘩をしたとか、いろいろありうる話だと思います。「うち、こうなりました」というのがあったら手を挙げてください。どつきあいまでなくて結構です。ちょっといろいろと意見の違いがあったり、さまざまあったかなと思いますが、「私のところはこういうのがありました」というのがありますか。「一定程度、こういう方向で進めていっていたんだけど、うまくいかなくなって、それをこういうふう乗り越えた、この時にうまくいくようになったな」とか思うことはありませんか。あるやろ？ さっきは控え目やったから。そういうポイントはなかったですか？

三宅 うまくいかなかったのが、うまくいくようになったポイントですか。それはクラス内のことですか。リーダーが二転三転して、なぜか秋学期の途中から私がリーダーになったことですかね。最初、リーダーを決めたんですが、それがうまく機能しなくて、また亀岡と井手町のチームに分かれた時に、それぞれのチームリーダーを決めて、それには別にクラスリーダーをつくったんですが、そのクラスリーダーもうまく機能せず、亀岡チームが私たちのチームに加わって一つのチームになったんですが、いつのまにか私がクラスのリーダーになったという、何回もリーダーが変わって話し合いをして、その結果、うまくいきましたけど、何度も話し合って皆が納得いく結果を出したので、そこはうまくいった点かなと思います。

会場 埼玉から来ました。リーダーがうまく機能しなかったことについて具体的に聞きたいんですが。

三宅 人によってプロジェクト科目の位置づけが変わると思うんです。ゼミの方が大事だからプロジェクト科目の話し合いは行けないとか。最初のリーダーたちは順位づけが多分、プロジェクト科目の方が、下だったんですよ。それは私たち最初の頃、プロジェクトのゴール地点が全くない状態だったというモチベーションの理由もあると思いますが、秋学期からモニターツアーをやるという明確な理由が見えてリーダーも決まって、そこからうまくいくようになりました。

会場 辞めたリーダーの方はプロジェクトに引き続き活動していたんですか？

三宅 はい、残って、ちゃんと活動しております。

山田 今のようなところが皆さん、関心があるところですよ。一定程度、成果を出してきて次のステップへいこうという時、学生たちがどういうふう次ステップに行ったのだろうかというところが、こういう活動をしていると一番大きなポイントなので。補足があれば。

木村 夏の間に図鑑とDVDの両方をつくると決めていたんですが、コンセプトも決定し、夏休みに取材に踏み入れようかという段階で仲間が集まらず、なかなかプロジェクトが進まずという状況になりました。「残りの5カ月で図鑑とDVDの両方を納得いく形で完成することかできるのか？」と言われ、確かにちょっと難しいかなとなって、DVDを諦めようかという話になって、ほぼ決まりかけた瞬間があったんですが。

安本 紙面は大変やぞ、という、イラストレーターに入る道のが大変で、イラストレーターに入ってから

も、ほぼ紙面は文字だけになって、諦めて映像だけにした方がスムーズにいくよという意見も出てきたんですが、それは熱い思いでクリアしました。

木村 子どもたちがペラペラと図鑑を見ているんなページを見てもらいたいという思いがはじめからあったので「つくろう」ということになりました。そこは根気で。

安本 うちのプロジェクトはどちらかというと、多分、メンバーの気質だと思いますが、特に殴り合いということではなく、皆が悩んでしまって沈んでいく方で、自分の担当の仕事をなし遂げられず、「どうしよう、他のこともやらないとあかん」と凹んでいくタイプのプロジェクトでして「大丈夫、そんなことない」と持ち上げていく方に皆の力を注いでいったという感じです。

大野 それに加えて夏休みの時期ですが、取材した職人さんたちにお会いした時、職人さん方に私たちのコンセプトを説明しますと「それは素晴らしいね、是非やってください、私たちも子ども達に伝えたいことがありますので、ぜひやってください」と言われまして「これはもう、絶対やらないといけない。やめるわけにいかない」と追い込まれた気持ちもありました。

山田 そういう形で追い込まれながら期待に応えようと。

安本 半分くらい「抜けられないな」というプレッシャーもありました。

山田 いやあ、いいプロジェクトですよ。抜けられませんね。

中村 僕らは冊子の制作をしてきたんですけど、これをつくるにあたって、ものすごくコンセプトを話し合いました。はじめからストイックにやっていきました。週3回くらい、1回のミーティングで5時間くらい話し合っ。「もっと愛したくなる京都、京都ってなに?」とか「もっと愛したくなるって、どういうこと?」みたいに、すごく全員で話し合っイメージを共有できるころまでコンセプトを固めることができたんです。

実際に夏以降、取材を2週間に5記事アップにして5カ所、取材に回って記事を上げて、写真もやっていきました。いまいち、コンセプトに合った記事が書けない、自分たち自身も京都についてよく知らない部分がありまして、そこでどうやって記事を決めていこうか、自分たちで回っていくうちに愛すべき場所を発見して記事に起こしていく段階になるのですが、そこでの構成でうまく伝えることができない。自分たちの感じたことをそのまま記事に起こせない。講師の先生にすごく添削をされまして。2カ月くらい校正していたんですが、メンバー間で「はじめの方の記事がよかったのではないか」とか頭の中でループしちゃう感じとか。何度も校正しているうちに、わけがわからなくなってくるということで、メンバーの一人が怖い形相で「自分は何を伝えたいのか、わかんない」と夜中に延々と話されたりとかということがありました。

山田 でも、そういう意味では、皆のプロジェクトが「元来、持っていたものは一体何だったの?」というところにもう一回返るわけですね。そういうところが大事なポイントだったのかもしれない。

福田 私たちの科目では一番大変だったのはプロジェクト自体、この科目でプロジェクトが何を行うかということが具体的に、そもそも決まっているものではなくて、何を行うかということを決めることに時間がかかって、目標をどうしようかということで、皆で何回も授業で何度も同じことを話すことが続いて、前期では景観はどういうものなのかということ各自勉強することからスタートして、そこから具体的なプロジェクトに落としこむことを前期では漠然としたものしか決まらずに。夏休みに週1、2回集まっていく中で明確な形ができて、その中から協力関係ができてきて、そこからどんどん早くプロジェクトを形づくることができたなと思います。

山田 自分たちで、何をやるのかなということが明確に見えてくるのが大切ですね。

谷 私たちのプロジェクトだけに通じるのではなく、全般的に言えることだと思いますが、先程三宅さんが言われた「その人にとってプロジェクト科目の位置づけがある」と。その通りで「私は授業の方



が大事だし」みたいな、プロジェクト科目を登録する時点では皆さんあるんです。最初、皆さん、集まりが悪くて。山田先生が最初の授業とかでコアメンバー、アクティブメンバー、インサイダーメンバーがあるとおっしゃいましたが、意欲のあるコアメンバーがいたんですよ。私とか、リーダーの辻とかは、やりたい、やりたいという感じで、二人でしゃべっている間は「あ、もう何かやりたい、これをやろう」と話が弾んで何でもやれる気がするんですが、さて集まろうとなると、人が来ない。二人では何もできないし、プロジェクトは動かないので、周りの人たちの意識をどうやって変えてプロジェクトに巻き込んでいき、プロジェクトを動かしていくかということが大事なことになっていくんだなと思いました。

山田 最後にまとめに入ってくれました。皆が「そうですね」と言っていますので、多分、そうなんだと、私も思います。こういう受け答えの中で、プロジェクトの真っ只中にいて、自分たちがいろんなことに直面して、直面していることを真正面から受け止めて「どういうふうに乗りを越えたいのかな、考えたいのか」ということを一生懸命思いめぐらせたんだと思います。その中で「自分たちの次のステップは何か」を考える。ただ素敵だなと私が思うのは「全員一致でともかく行けるところまで議論してみようよ」という、この姿勢ですね。チームの持っている学習の効果は間違いなくあって、それが個々の力を引き出して行って伸ばしていく、だから私たちはそれを強制してもだめ。彼ら自身が伸びる、彼ら自身が伸びる力、それを信じるべきだと思うんですね。プロジェクト型の学習が大前提として絶対必要なことは「学生の意欲と向上心を信じること」だと思います。そこからすべてはスタートしていくと私は信じています。というような熱いトークをするんですね。それはそれとして。先程締めもしてくれましたので、これで座談会としては一旦終了いたしまして、このメンバーが後ろの展示コーナーのところにまいますので休憩時間に皆さん方から個別に、どうだったのかということをお聞きになりたいようなポイントについて、どうぞ、ご質問等々、ございましたらよろしくお願ひしたいと思います。それでは皆さん、所定の位置へ。ありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。それではこれで第一部を終了させていただきます。

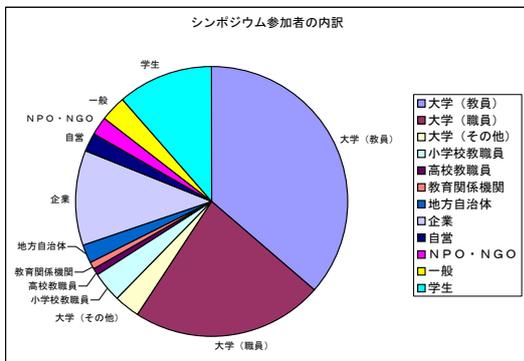
「学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!—地域・社会が学生を育てる」アンケート

文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム
「学びの原点-プロジェクト型教育の挑戦!!-地域・社会が学生を育てる」

— アンケート結果について —

●シンポジウム参加者の内訳

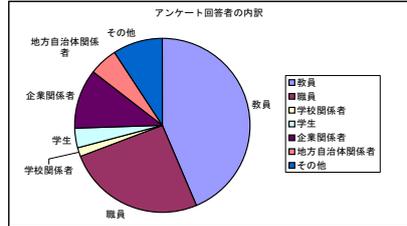
所属	人数
大学(教員)	48
大学(職員)	30
大学(その他)	4
小学校教職員	5
高校教職員	1
教育関係機関	1
地方自治体	3
企業	15
自営	3
NPO・NGO	3
一般	4
学生	15
合計	132



■アンケート結果について

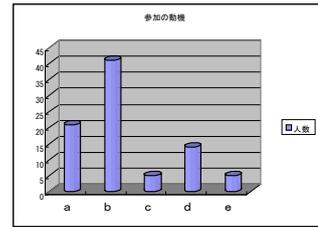
●アンケート回答者の内訳 ※参加者中、アンケートにご回答頂いたのは、約41.6%でした。

所属	人数
教員	24
職員	14
学校関係者	1
学生	2
企業関係者	6
地方自治体関係者	3
その他	5
合計	55



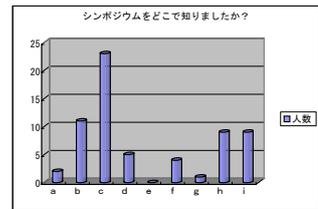
●参加の動機(複数回答可)

参加の動機	人数
a) 地域の連携に興味があった	21
b) PBLに興味があった	41
c) 関係者から勧められた	5
d) 学生の自主活動に興味があった	14
e) その他	5



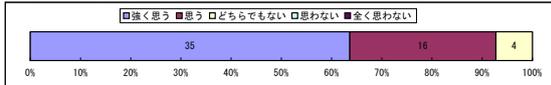
●シンポジウムをどこで知りましたか?(複数回答可)

シンポジウムをどこで知りましたか?	人数
a) 新聞広告	2
b) 同志社大学のホームページ	11
c) 案内パンフレット	23
d) 学内のポスター	5
e) 学外のポスター	0
f) メーリングリスト	4
g) 文部科学省ホームページ	1
h) 関係者に勧められて	9
i) その他	9

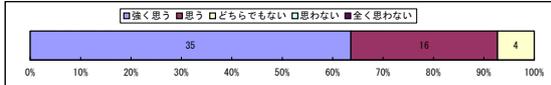


アンケート項目	強く思う	思う	どちらでもない	思わない	全く思わない
(1) PBLを大学でもっと普及させるべきである	35	16	4	0	0
(2) PBLは、大学においても有効な教育手段となる	35	20	2	0	0
(3) 大学と小学校～高校はもっと連携するべきである	35	15	5	0	0
(4) 大学は地域・社会ともしっかり連携すべきである	42	14	1	0	0
(5) 学生にはもっと社会人基礎力を身に付けさせるべきである	37	16	3	1	0

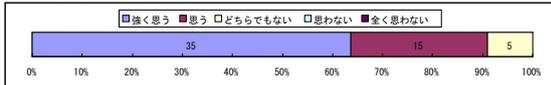
(1) PBLを大学でもっと普及させるべきである



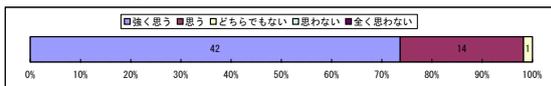
(2) PBLは、大学においても有効な教育手段となる



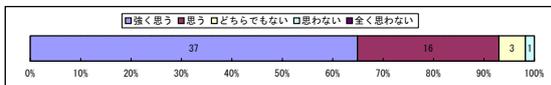
(3) 大学と小学校～高校はもっと連携するべきである



(4) 大学は地域・社会ともしっかり連携すべきである

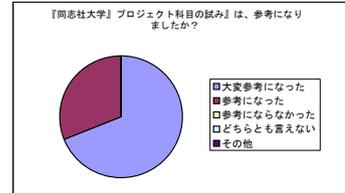


(5) 学生にはもっと社会人基礎力を身に付けさせるべきである



●『同志社大学』プロジェクト科目の試みは、参考になりましたか?

『同志社大学』プロジェクト科目の試みは、参考になりましたか?	人数
a) 大変参考になった	33
b) 参考になった	15
c) 参考にならなかった	0
d) どちらとも言えない	0
e) その他	0



【教員】

- ・現代的教育ニーズ取組支援プログラムになぜ選定されたかが良く分かったからです。
- ・科目運営のポイントを教えられた。
- ・学生、関わった方たち、地域社会への影響が妙突に感じられ、素晴らしい試みだと思いました。本学参考にさせて頂きたい存じます。
- ・理念に裏付けられた具体的な話は、いつの場合も参考に存じます。
- ・プロジェクト科目の可能性は無限大だと認識させられた。学生にヒットする科目が公募の中でセレクトされ、ちゃんとそれぞれのテーマを選んだ学生の心にヒットしているのは素晴らしいと思った。
- ・現在勤務大学において、こうした学生の自主的活動をカリキュラム化していくことを検討しています。学内で推進していくには、壁が大きいですが、学生さんの元気な報告を聞いてこちらにも元気になりました。
- ・学生らのモチベーションをどのように生み出すのか、教授はどのレベルでそれを援助するのかがみえてきました。
- ・公募型によって、内容が時代と地域との結び付きを保障することになっている。

【職員】

- ・個性的、フレキシビリティ、異質なものの・・・について、どう取り進んでいったかがよくわかりましたし、背景にある考え方が強みがあった。
- ・公募制プロジェクト科目による地域活性化の実施の素晴らしさ、ユニークなアイデアの創造と実現
- ・概要やならなど詳細がよくわかりました。
- ・学生の活動について知る機会を得た。
- ・文系科目のプロジェクトに対して、イメージができました。
- ・学生の声も聞け、プロジェクトがどのように活動しているのかわかった。

【企業関係者】

- ・学生の発表がよかったと思います。素晴らしい日でした。

【地方自治体関係者】

- ・過程が大事というのは、学生にとっては重要である。ビジネスとの一番大きな差異点といえる。プロジェクトを進めていく上で学生たちが望みにあたり、悩んだりしながら成長していく様子が垣間見えて感動しました。

【その他】

- ・学生さん達の生き生きとした姿が印象的でした。どの大学にも負けない科目であると信じます。がんばって下さい。
- ・積極的な人の発表、良かったという人の発表と反対に今何が大切なのかインサイダー的な人々の思いをこの人たちはどうとらえたかが興味がありました。

●『同志社大学プロジェクト科目の試み』の内容等についての意見・感想（自由記述）

【教員】

- ・熱い思いを持った企業、団体、個人がそれぞれのファシリテーターとして学生に出会うことが成功の鍵なのだろうか？第2希望のチームに回った学生のやる気はどうなっているのだろうか？グループダイナミクスでフューチャーは出ないのか？最終中心のアクションがPBLし教育を続けていくのに重要なのだろうか？
- ・トラブルや失敗の体験を重視しているところが優れている。
- ・持続させない意味がないまちづくりプロジェクトにおいては、科目代表者ゼミ生の役割を考へるべき。ゼミの成果を地域づくりに反映し続けるシステム作りが課題。
- ・工学部の4年生の参加具合を知りたかった。卒業研究に着手すると参加はできないと思われる。
- ・社会の縮図というお言葉がありました。いろいろありながらも、明るく、前向きに、良心の力でプロジェクトを成し遂げてゆかれたところに、OGとして心から感動いたしました。これからもこの試みが一層ご発展を遂げることと心より祈念申し上げます。ありがとうございました。
- ・コメンター/アクティヴメンバー/イシューゲーマーの位置付けも良く分かりました。普通は、パンフレットにもあったように、社会とプロジェクトが一方通行になりがちであるが、今回のプロジェクト科目に関しては最も重要なこととして、ここで得た「教育力」が大学内で生かされ、双方向型のInteractionが取られていることが大変良かったです。学生さんの発表が本日に素晴らしいし、科目の専門もそうであるが、とにかく「人と人の触れ合い」をとても感じました。ありがとうございました。
- ・学生の本音が聞けて大変参考になりました。
- ・サークル活動、クラブ活動とは違うということを確認し、学問、学教科目として、運営してゆくにはどうするか問題。レベルの低い大学では、「まちづくり」「社会体験」でよいが、同志社レベルでは学問に結び付けるべきではないかと思う。「教壇につきたい」→「教材を作る」は大変良い流れ。
- ・PBLの重要な要素は「失敗体験」にあります。失敗事例を聞いてみたいですね。（広島での事例紹介ではそれが少し入っていてより有用性があつたように感じます。）立命館大からの質問が出て、その辺りが少し出ましたね。上のコメントはそれ以前に記したものです。さらに立命館大でそういうあたりを中心に考え、意見を引き出すとした山田先生はさすがです。
- ・既存の科目と相互に関連をどうつけるのか。さらに、正課外プログラムともその教育効果をどう関連付けるか。この二者が相乗的に効果を生み出すことが必要だと思う。そのために、地域力を最大限に活用することだと確信しました。
- ・残念なのは、「上手くいった所」ばかりだったのと、もっと「上手くいかなかった点」や「その理由」に対する分析など、もっと聞きたかったです。そう言った点を踏まえて、自大学で進捗していく上での対策を練らなければならぬからです。当方、国立大の教員なのですが、私学では予算の使い方が比較的柔軟でないなと思うとともに、そのマネジメントや教員のコミットメント、また、教員に求められる資質についても、もっと聞いたかったです。

【職員】

- ・学生の実践報告は素晴らしいものでした。ただ「座談会」の折に、あらかじめ「光と影」の項目をある程度整理した「座談会」になればよい良かったと思います。関心点としては、どうしてこれだけのレベルのPBLが可能となるのかであるが、その点は情報として今後の課題です。⇒シンポジウムで少し納得できました。
- ・素晴らしい発表ありがとうございました。
- ・学生コミュニティの動的な形成について、コメンター等の階層とアクションの内容をもとに分析された視点は、大学生のチーム学習に参考になったのではないのでしょうか。

【学生】

- ・楽しかったです。こんな場を頂けて、本当に感謝しています。ありがとうございました。

【地方自治体関係者】

- ・実践テーマが非常に多岐に渡っているのは、いい悪いは別として、どんなものかという感はある。学生個々の成長は勿論大切だが、テーマの完成度も当然問われるべきで、科目担当者の成果報告書も緊張を強いられる筈だと思います。

【その他】

- ・事例2の子供園庭の発表で専門のイラストレーターを依頼した件で、それもやむをえなかったと思いますが、子供園庭に学生さんの目標が伝われば、拙い手書きでも新しい感覚で良かったかなと少し思いました。又、間接的に小の子供さんに思いが伝わったかという評価と又、後継者不足など今の問題の提起もあつたらと思えました。何が得られたか、はっきり見えてこない（目的達成の過程において）

●シンポジウム『PBL型教育の可能性について』の内容等についての意見・感想（自由記述）

【教員】

- ・学生の言葉で終わったのは良かったですね。
- ・PBL型教育の成否の鍵は「評価」と「アドバイザー」だと確信しました。
- ・大学・学生の町、京都ならではの教育であり、東京の大学では真似できないレベルを作れる。学生の文化力を高めるPBLに期待。
- ・授業科目の中にあるPBLと、東京電大、専修大のPBLは異なるように思います。又、同大のように学生の興味に合わせて、専門の講師を呼ぶ予算がある大学といふ大学にも差があります。予算がない場合で、教員の教員がPBLを担当する場合、ゼミとの違いを明確にしつつ、教員の負担にならない進め方を進まなければならないので、PBLは少々難しいと思いました。
- ・各発表を聞いて、最も感じたことは、各学部での特性を生かした科目はたくさんあるが、学部横断的になることによって、さらに様々なつながりが持てることがとてもよく分かりました。つまり社会との連携によって、より就職活動につながってからの部分の形成はもとより、それ以上に「人と人のつながり」が分かったことがとても良かったです。本当に参考になりました。ありがとうございました。

【職員】

- ・「めあて、めやす、ふりかえり」という言葉（小学校以来）久々に耳にしましたが、とても重要で普遍的な考え方、手法だと実感しました。
- ・PBL研究会があればと思いました。
- ・必修でないとしたら、プロジェクトは全体でどのくらいの学生が参加しているのか気になった。またモチベーションを維持させるきっかけづくりを教員・事務局はそれぞれどんな役割をもつて関わればいいのか考えさせられた。ありがとうございました。
- ・大学教育の現場で、学生が苦勞している状況、それを乗り越え成功していく事例、また先生方が工夫している点など多くの経験やノウハウが、共有できるような取組みを全国的に進めてもらいたい。
- ・小学校の先生の視点、全員参加PBLの視点について聞けました。

【学生】

- ・一人ひとりの目標を常にみずえ、更進しながら進んでいく努力、すごい大切なことだと感じます。これについては講師の先生に助けていただいたと思います。ポイントをつかんで「聞いて引き出してもらう」「アドバイスをもらう」これがあってこそPBLなんだと強く感じました。

【地方自治体関係者】

- ・小学校での実践と大学の実践とは自ら大きな差があると思います。1つのフォーラムでの議論、討論では、ちょっと幅が広すぎるかなとも思います。岩瀬先生と石川先生にはもっと時間を割いて話を聞きたかった部分もあります。
- ・職場では「PBL」というスタイルに転化していくのではと思いました。評価についても、今では自己評価、所属長評価が試みられる状況です。その前提をPBL⇒PBWと意味づけられるよう関係機関の連携に期待します。

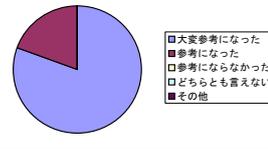
【その他】

- ・教授が困った時に助言やコメントで助かったとありました。（発表で）でも聞くだけで返事しないケースを作ってしまうでしょうか。今の子供さんは大学生にしても小～中学生にでも期待しているから（だからあえて一切学生に近づいて考えることが学習です）。

●シンポジウム『PBL型教育の可能性について』は、参考になりましたか？

シンポジウム『PBL型教育の可能性について』は、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	33
b) 参考になった	8
c) 参考にならなかった	0
d) どちらとも言えない	0
e) その他	0

シンポジウム『PBL型教育の可能性について』は、参考になりましたか？



【教員】

- ・学生の発表には驚きました。後生畏るべし！
- ・チーム学習を通じて他者を評価できるという山田教授のコメントは的を得ている。
- ・PBLの具体的な姿を知り、自分の授業の中を生かせる部分があると思った。
- ・いろいろな学校の「PBL型教育の可能性」について良く分かったからです。
- ・中学（or高校）の実践報告があれば、AAです。
- ・評価の問題についての様々な意見が聞けたので。
- ・自分自身に誇りと自身を持つ学生を育成するとして、成功していると思われる。
- ・地域からのパナリストがいなかった。

【職員】

- ・学生の自己評価を基準にして、～という視点（自己評価できる人材になってもらいたい）が新たな発見でした。
- ・評価の部分について、様々なご意見が寄せられた点が大変参考になりました。
- ・とてもレベルの高い質疑応答だったと思います。
- ・正誤として取り組めることがわかりました。
- ・発表の先生方の内容はどれも充実していた。

【学生】

- ・PBLし仕組み、そしてその成果を実感することができた。また、他学校などの試みで、他にも多くの可能性が秘められていると感じました。そして、その熱意に影響を受けました。

【企業関係者】

- ・小学校の取組みの発表は、大変参考になりました。

【地方自治体関係者】

- ・産学協同や産学連携という言葉は表面的な事象感覚としては理解していたつもりだが、予想外のスピードで実践が進行していることを感じました。

【その他】

- ・他校の先生方がこれらで、同志社大学がどんなふうに関与しているのかが見えました。たくさん難しい点もあるかと思いますが、大学生がたくさん取得できるPBLを同志社カラーをたくさん出して進めてほしい。楽しみにしています。
- ・色々な意見があることが分かった。
- ・2番手の山田先生で人と人のつながり合いを通じた成長と、辛いことに合わせて成長するというのが心に響いた。強いかどうかコミュニケーション能力を持ったものだから…成績の平等さが心配？ 三番手の石川先生一学生さんコメント（小学生の1行については）後の子供の自信に必ず繋がると確信しました。先生が普段にできない事が小4の心に残り自信になる。

シンポジウム (2008年度)

文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム

第2弾 「学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!—地域・社会が学生を育てる—」

2009年2月21日(土) 13:00～17:15
同志社大学 今出川キャンパス【明德館21番教室】

次 第

- 13:00 ■ あいさつ
同志社大学 副学長 文学部教授 田端 信廣
- 13:10 ■ 報告
同志社大学 プロジェクト科目検討部会長 文学部教授 山田 和人
- 13:30 ■ 第1部
講演
『小学校からのプロジェクト学習とポर्टフォリオ「意志ある学び」
の実現のために!』
千葉大学 教育学部 特命教授、中部学院大学 客員教授 鈴木 敏恵
- 14:00 対談 鈴木 敏恵 ・ 山田 和人
- 14:20 ■ 第2部
<事例報告>
- 同志社大学 2008年度 プロジェクト科目 学生による事例報告1
◆「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)
【プロジェクト概要】薬膳の知識と効用を広めるために大学生協での薬膳弁当販売の企画提案と、季節の薬膳メニューの開発とそのレシピの提供、および薬膳に対する意識調査を行った。また、出前授業などで薬膳知識の啓蒙活動を実践した。
白井 宏忠 (商学部2年次生)・太田黒 敦子 (商学部2年次生)
馬 寧 (文学部2年次生)
- 同志社大学 2008年度 プロジェクト科目 学生による事例報告2
◆私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう
【プロジェクト概要】同年代へのきもの文化浸透を目指して、同志社大学生300人への意識調査、きもの市場のマーケティングをもとに、「私の着てみたいきもの」を制作し、商品化への提案を行った。
福井 景子 (文学部3年次生)・川又 夕 (文学部3年次生)
田中佑実英 (法学部3年次生)
- 同志社大学 2008年度 プロジェクト科目 学生による事例報告3
◆「演劇で地域子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト
【プロジェクト概要】「演劇を教育現場に取り入れる」をテーマに小学校における演劇ワークショップを重ねるなかで、小学生とともに創る演劇ワークショップの新しいかたちを実践した。
梅本 修人 (経済学部4年次生)・長澤 美博 (文学部3年次生)
三宅 鮎美 (経済学部4年次生)
- <展示発表>
- 同志社大学 2008年度 プロジェクト科目 学生による展示発表1
◆出会いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～
【プロジェクト概要】ラジオ放送による遊空間の提案、小規模会場におけるミニイベント、300人規模のイベントのそれぞれの企画・演出・運営を通して京都の地域性を活かした遊空間のプロデュースを提案、実践した。
川口 幸映 (文学部3年次生)・中田 理英子 (文学部3年次生)
- 同志社大学 2008年度 プロジェクト科目 学生による展示発表2
◆「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト
【プロジェクト概要】200人の中規模コンサート、50人規模のミニコンサートのプロデュースを通して、クラシックの新たな楽しみ方を提案し、京都ならではの独創的なクラシックコンサート文化を創る取り組みを行った。
吉村 碧子 (文学部3年次生)・菅原 千愛 (文学部4年次生)

14：50 質疑応答

15：05 休憩（20分）

15：25 ■第3部

シンポジウム「プロジェクト型教育の可能性と課題」

同志社大学 全学共通教養教育センター所長 文学部 教授 圓月 勝博（司会）

プロフィール：同志社大学文学部英文学科教授、2007年より教務部長、全学共通教養教育センター所長。専門はイギリス文学。共著に『学生と変える大学教育 FDを楽しむという発想』（ナカニシ出版）など。

千葉大学 教育学部 特命教授、中部学院大学 客員教授 鈴木 敏恵

プロフィール：一級建築士、未来派シンクタンク。指導者養成、大学FD等支援。公職歴：次世代IT活用未来型教育研究会議委員（文科省・総務省連携）、中央防災会議専門委員（内閣府）、宇宙利用推進特別委員（文部科学省）等。著書に『ポートフォリオ評価とコーチング手法』『ポートフォリオでプロジェクト学習』など多数。

法政大学 地域研究センター 特任准教授 宮木いっぺい

プロフィール：法政大学 地域研究センターが主催する、産学連携 PBL 授業（「社会貢献・課題解決教育」）、および地域づくりを担う人材育成プログラム（「地域づくり塾」）、のチーフコーディネーター。国際協力 NGO、GNC（Global Network for Coexistence）代表としてモンゴルでの植林活動を行う。

広島大学 キャリアセンター 教授 森 玲子

プロフィール：「フロントランナープログラム」を中心的取組とする「学生提案型キャリア形成システム基盤構築（Student Initiative Platform）－挑戦し、行動する人材育成の実現を目指して－」が、平成18年度文部科学省現代GPに採択。2年間で28プロジェクトを実施した。次年度、教養教育科目「実践フロントランナープログラム」として開講する。

京都文教大学 人間学部 准教授 森 正美

プロフィール：京都文教大学人間学部文化人類学科准教授、特色GP「現場主義教育充実のための教育実践－地域と結ぶフィールドワーク教育－」事業推進責任者。宇治市都市計画審議会職務代理、京都市青少年活動推進協議会委員などを兼任する。

同志社大学 プロジェクト科目検討部会長 文学部教授 山田 和人

プロフィール：文学部国文学科教授。専門は日本近世文学。江戸時代前後の文学や芸能、国内外の人形芝居の調査・研究。日本近世文学会事務局代表、芸能史研究会評議員、日本文学協会委員、近松研究所評議委員、長浜市文化財保護審議委員、コンソーシアム京都高等教育研究センター高等教育実態研究プロジェクトリーダー、PBL研究会会長。

17：15 終了

17：45～
19：30 ■レセプション

会場：同志社大学寒梅館1階 Hamac de Paradis ※事前申込

【シンポジウム議事録 抜粋】

第二弾 学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!・地域・社会が学生を育てる—

2009年2月21日(土) 同志社大学明德館21番教室

あ い さ つ

同志社大学 副学長 文学部教授 田 端 信 廣

ご紹介いただきました田端と申します。本日は寒い中、かくもたくさんの皆様が会場に足を運んでいただきましたことを厚く御礼を申し上げます。また講演者の鈴木先生をはじめ各パネリストの先生方におかれましては、ご多忙の中、このシンポジウムにご協力をいただきましたことを改めて厚く御礼を申し上げたいと思います。

同志社大学が「現代GP」に採択されました「プロジェクト型科目」の導入は2006年度から始まり、この2008年度で3年を経過したわけですが、同志社型プロジェクト科目には大きな二つの特徴がございます。一つは他の多くの大学の場合と異なり、この科目が全学共通教養科目に設定されているということでもあります。プロジェクト型の教育はそれぞれの学部の専門科目とリンクして、こういう方法が導入されているのは、かなりポピュラーになっていますが、全学共通教養科目という幅の広い教育領域の中で、これを設定するということが一つであり、そのためにさまざまな苦労もあったわけですが、もう1点目は、授業担当者を公募するという方式であります。大学の先生が直接担当するわけではなく、公募方式によって我々が有効なプログラムだと認定したプログラムを提案された個人・組織等々の提案を受け付けて同志社大学の学生を鍛えていただくには、このプログラムがいいということをプログラム選定委員会で選定し、授業を委託しているということでもあります。この2点がおそらく他の大学のさまざまなプロジェクト型の教育と異なった同志社大学の特色だろうと思います。

後者に関して言いますと、当時、現代ニーズに応募する時、「地域往還型の地域活性化プログラム」と名付けました。キャッチコピーを職員たちとも当時考えた時に「社会の教育力を大学へ」と名付けました。大学の地域連携と申しますと大抵の場合、大学の先生が地域の各所に出掛けて講演したり、大学の持っているさまざまなリソースを一方的に地域社会に出していくことが一つのモデルと考えられていたんですが、それは一方的だろうと。双方向で行こうと。地域の持っている教育する力を大学に持ち込む、これが「往還型」ということですが、当時、私は大分響感を買いましたが、「学生を教育できるのは大学の先生だけではない」と主張しました。確かに大学教育の中身の変容ということがあるのですが、知識や理論を伝授していくことについて大学の先生方は第一級の腕前を持っていると確信しています。ただ知識や理論を伝授するだけでは学生は育たないという状況があるわけです。実は問題解決型の能力、ソリューション・オリエンテッドな学力を今、最も必要とされている能力を学生に身につけさせるノウハウは、大学の先生よりも地域社会のさまざまな領域で経験を積んでこられた方々、あるいはNPO、NGOの方々、企業社会の方々が、実はそういうノウハウを蓄積している。そういう方々に一部、教育をお願いした方が学生は育つということでありまして、大学の先生は自分たちしか学生を教育できないと思い込んでいる方がございましたから、当時、議論を呼びましたが、そういう議論を経てこの科目は導入されてきました。

その後、3年たっておそらくかなり本学の中で、この教育方法は定着してきているのではないかと。それが証拠に2008年度大学の教育の質的向上のための競争的資金を配分するプログラムの中で同志社大学は3つのプログラムに採択されていますが、各学部が独自に自分たちの教育を向上させるために、どういう教育改革



をするかということで、社会学部、政策学部、文化情報学部の3つの学部が出したプログラムが採択されました。全国的にもトップレベルの数だと思います。そのプログラムの中身を、つぶさに見ますと、一言でいうと、程度の差が少しあれ、我々が言ってきた問題解決型、プロジェクト型、PBLと書いてあるプログラムもあります。3つがPBL方式に基づく教育であると。この3年を経て議論を経ながら同志社の中でPBL方式が少なくとも、一部、これは全部でやることは大変なことです。財政も破産します。一部、従来の伝統的な知識と理論の伝授型教育とそれを補完するものとして学部教育の一部にこういうものを入れていかないと学生が伸びないということを、それぞれの学部の先生方もはっきり認識されたプログラムになっていると私は思っております。少なくとも本学ではPBL方式の授業は3年を経て半ば定着してきたのではないかと学内的に定着しているのではないかと。しかしPBL方式が何であるか。その方法が確固としたものとして確立されているわけではありません。担当者の方々は手さぐり状態で学生の教育にあたっていたいただいていると思います。

その意味で我々、これから第2段階を歩んでいくにあたって、全国の大学が共通して抱えている、学生を育てる、どういう形で育てるかということについて、新しい前進の手掛かりとなるような成果が本日のシンポジウムを通して得られることを願っております。

最後に本日のシンポジウムのあり方についてお願いをしたいと思います。我々がテーマとしているPBL、問題解決型、ソリューション・オリエンテッドな能力をどう育てるかということを中心とする以上、シンポジウム自身が、そういう精神に貫かれて、ソリューション・オリエンテッドな議論を展開していただきたいと思います。大抵大学の主催するシンポジウムや講演会は啓蒙的、知識、理論伝授型のものであり、聴衆はありがたいお話を聴きましたというのが多いのですが、この寒い時期にたくさんの方がお集まりいただいたことは、ある共通の目的を持って、どうすればいいかという問題を抱えてお集まりいただいていると思うので、そういう問題意識に応えられるように、たくさんの方の失敗談や、うまくいかなかった事例も含めて問題を解決できることを共通の精神として、本日のシンポジウムを展開していただければと願っています。どうもありがとうございます。

報告「本学の取組について」

同志社大学 プロジェクト科目検討部会長 文学部教授 山田 和 人

ご紹介いただきました山田でございます。えらい雰囲気の話になりまして「課題解決型で頑張れ」と言われまして、私、きれいにまとめようと思ってきたんですけど、どうもまずいなと思って、ちょっと課題を煽るような形にアレンジしようかなと思いましたが、どうもできそうにないなと。それでは早速に始めさせていたきたいと思います。

2006年度にこの科目、「現代 GP」にも採択されましたが、実際には2005年くらいから準備を始めていっております。「社会の教育力を大学へ」というキャッチフレーズで同志社大学で、社会で活躍している皆様方にご参加をいただくことで学生に対する教育力をあまねく提供して、そこで多くの刺激を受けてもらう。

そんな教育に取り組もうということになりました。

いくつかのポイントがあります。簡単にご紹介しておきますと第1点が、公募制のテーマ募集と教員の嘱託講師採用。教養教育の科目としてPBL方式を採用する。プロジェクトリテラシーとしてのPBL。プロジェクトはどのようなものかということを生徒に学んでもらうこと。現場と本物指向のチームPBL。一人でことをなすのではなくチームで取り組んでその問題解決を図っていく。そのテーマは現代社会の抱える課題と正面から向き合って考え抜いていくような力を磨いてほしいという願いから発しています。知識の習得・体系化が目的ではなく、知識の総合化・統合化を目指していき、そういう知識を、技術を自らのものとして生かしていくことを狙っております。

この科目の最大の特徴がこういうことですので、科目の担当者の公募制に関して、プロジェクトテーマを企業・団体・個人から募集するわけです。これも結構大変です。実際にこういうホームページの上で公募をかけるということになります。公募をかけます時のさまざまな要領を詳細に検討いたしまして、皆様方に呼びかけることをやっています。テーマ募集から成果報告までの流れもご説明申し上げ、そして実際に、どういう段取りで、どのようなフォームで応募していくかについても詳細に決めていまして応募を実施していくこととなります。例えばこういうテーマの応募フォームも作成いたしまして、そしてそこにご記入いただくものを実際につくっていくこととなります。実際にはこのようなフォームで「利用目的」等々についてご記入をいただき、応募のフォームがそれぞれテーマを1000字程度でお書きいただく。「教育目的は一体何ですか。授業計画はどのようなものをお考えですか?」ということをご記入いただく形で実際に進めていきました。詳細についてはこのような形で方向性は、すべて情報公開する形で進めておりますので、WEBをご覧いただきましたら詳細を確認いただくことができるかと思っております。フォームを使って記入いただいて部会運営委員会で審査をいたしまして採択テーマの提案者を本学嘱託講師として採用することとなります。年間25~35科目の科目を採択開講しております。

受講生は1年次(秋学期から)4年次生までの学部生が履修しております。その登録希望者は説明会に参加しまして先行登録に先立ちまして志願票を提出するようになっております。意識づけを行いまして志願票をもとにして選考がなされていく。1プロジェクトについては5~19名程度の少人数制の1クラス運営になっております。1 Semesterにつき30万円の授業運営費の補助を出しております。

実際に3年間の推移を簡単にご紹介したいと思いますが、大体250~300名程度の学生が履修しております。ここで注意していただくのは各学部が満遍なく学生たちが履修している状況があります。これが2007年度、大きな開きはありません。2008年度、全学共通教養科目として設置されていますので、その意味では多くの多様な学生たちが履修してくれていることとなります。本学におきましては授業に関して履修中止の制度がございますので、もしも合わないという場合には履修中止を行うこともできます。履修中止率がこのような形で推移していますが、あわないのに続けるということは地獄のようなものですので、その意味では履修中止も可であるということになります。

そこでここから少し本題に入りたいと思いますが、Project-Based Learning (PBL) というものですが、



基本的にプロジェクトとは何かという話になるわけです。プロジェクトの属性を数えあげてみました。期間が決定されている。目標を明確化しなければならない。自分たちでスケジュールを決めなければ前に行けない。手近なマニュアルがない。リスクとトラブルがつきものである。大小の問題点と発見と解決を図らなければ進まない。情報共有と時間管理が必要である。社会に発信する行為である。どれをとっても学生にとっては難行です。

そこでPBLというものを概念規定をしておきたいと思いますが、基本的にはプロジェクトの特性を活かした教育だと考えればいいのではないかと思います。属性を整理しますと「一定期間内に一定の目標を実現するため、自律的・主体的に、学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決しようと、チームで協働して取り組んでいく創造的・社会的な学び」の形。こういうのを一応PBLと考えておきたいと思います。

ところがこのプロジェクトには本来、次のような属性、特性が備わっております。プロジェクトにはつながろうとする特性がある。一つは流動性、増殖性、越境性という特性を3つ出してみました。プロジェクトメンバー同士のつながり、他のプロジェクトとのつながり、協力者や支援者とのつながり、大学とのつながり、そしてまた社会とつながっていく。一つのプロジェクトを遂行していくことによって流動性・増殖性・越境性というものが自然と発揮されていくようになってくる、これがプロジェクトの特性であろうかと思います。

プロジェクト科目の位置づけに関してお話を申し上げたいと思います。たとえば社会性という社会とのかかわりを縦軸にとり、横軸にコミットメント・参加度をとりました。社会連携PBLと言われているのがプロジェクト科目、コミットメントの率が高く、社会とのつながりも強いということになります。これは異論があたりの方がいらっしゃるかもしれませんが。たとえばボランティアの場合ですと自分自身の力の範囲の中でお手伝いしていくという意味で言いますと社会性は強いですが、コミットメントはやや低くなる。それに対して参加の度合いが高く、社会のつながりも強いものと、チュートリアル型のPBL、個人が実施していく、Problem-Based Learning、そういう系統のものもある。これが専門科目の中などで、よく用いられてくるものだと考えられます。その意味で言いますと学生のコミットメント、社会に発信していくという性格の強さというものが問われるのだらうと思います。

そこで同志社大学で進めている、こういう学生さんになってほしいという夢を描いてみました。「新島の良心教育の現前化」、新島襄が言った言葉です。まさに「一国の良心」に満ちた人材を育成する。でもそれを理屈だけで言うのではなく、それを現代の社会において実践していこうとするならば、こういう科目においてそれが実現するだらうと言っています。

2番目は「自由主義教育」。つまり自主自律の中で自分自身の自己評価を管理し、自己表現ができる人材を育成するとともにコミュニケーション能力やリーダーシップを発揮できるような人材を育てていきたいと考えています。

総合しまして自分自身の人生は自分で決めるという総合的な人間力を身につけさせたいと考えています。

私はこの科目を設計する時のポリシーのようなものを最初に決めました。先生方からこういう科目を入れる時にもかかわる問題だと思いますが、どのようにして運営していくか、その運営のスタイルそのものが問題なのだと思います。プロジェクト方式で教員、職員、学生が一体となって進めていくような運営体制を確立する必要があるのではないかと最初に考えました。つまりすべてをプロジェクトで回していってみようという考え方です。ですから科目を提供するのではなく、科目を皆で「育てる」という視点。科目を履修するのではなく、皆と一緒に「参加」して経験して何かをつかもう。カリキュラムの弾力化と評価方法の確立を目指しましょう。学生たちの潜在能力を引き出しましょう。そして個々の能力を引き出しましょうというようなポリシーのもとに始めました。

では学生の潜在能力は何ですかと問われた時、もう少し細かく見てみるとどうでしょうか。たとえば学生の研究力、そしてまた教育力、社会力と挙げてみましたが、ちょっと見てみますと、学生の研究力、これは一番後ろに柔らかく書いておきました「知りたい」。知識を得て分析して総合して結論を得たいという欲望ですね。学生の教育力。「ともに学びたい」。お互いに相互支援、相互批判を繰り返していこう。学生の社会力、学生には人の役に立ちたい、社会貢献をしたいという気持ちが常にあります。そしてまたそれを実践

する力が備わっています。学生の浸透力。「人とつながりたい」、なにものかとつながりたいという気持ちが強くある。連帯。そして学生の行動力。「壁を越えてみたい」という気持ちを等しく皆持っています。課題を解決して壁を越えたい。そして学生の評価力。「認めたい、認められたい」。信頼・敬愛に基づいたそういう交流を目指す。これが本来の学生の力として備わっているものだろうと思います。

3年間やってきて次のようなことを思いました。プロジェクトというふうにいる時に何となく全体でプロジェクトと考えているんですが、これを少し学生たちの行動を見てみると、二層構造になっているなということがわかってきました。一つは「プロジェクトの遂行プロセス」、その下に実際にチームとして育てていくようなチームへと育てていくような「コミュニティの形成プロセス」が、どうも学生たちの行動の中には見受けられる。プロジェクトの遂行プロセスはいわゆるプロジェクトマネジメントと言われますか、そういう力を身につけさせていく流れです。実際に自分たちで問題を見つけ、それを企画書に仕上げ、計画に落としして遂行していくような能力。最初に振り返りをしてまとめていくわけです。コミュニティの形成プロセスというのは、最初は「仲間のおしゃべりのコミュニティ」からスタートして、やがて「ちょっとこれ、勉強せんといかんよね」というところへ入って行って、勉強会の「まなびのコミュニティ」へ成熟していきます。最後に目的意識が備わってきますと、一つのゴールを目指して全員が力を合わせるようになっていった時に「チームのコミュニティ」が形成されます。このチームのコミュニティでプロジェクトが実践されますと、最も高い、ある種、いい成果を出してくれるように思われます。

それを一つの気づきの流れに合わせて申し上げますと「なかまのコミュニティ」、これも大変です。全学の教養教育科目になっていますので学部もばらばら、学年もばらばらなんです。その人たちと、一からコミュニケーションを図っていかねばならないので、仲間のコミュニティづくりを一生懸命やります。そこで自己啓発を自ら図っていくことになります。そして「まなびのコミュニティ」で「こんな本があったよ、面白いからね」と個人の学習から集団の学びへと変わっていきます。その中で自分自身を発見していきます。そしてそこに一つの一定の目標を目指して活動を始めて「チームのコミュニティ」ということで「自分自身も、こういう面があったんだな」と自己変革を遂げていく。こんな流れがプロジェクトの教育の流れの中にはあるのではないかと。こういうものかなと思いつつながらプロジェクトを受け止めていただくと、その幅のようなものが見えてくるのではないかと思います。

理想の学習曲線というのを挙げてみました。最初ブワッと上がって真ん中に踊り場がありまして、最後にギューンと追い込みをかけるという逆S字カーブなんですけど、やった経験のおありの方はウンウンとおっしゃると思いますが、こういう曲線をつくる時に大切なのは真ん中の踊り場的な部分で、どれだけ一生懸命考え抜くか。つまりこの踊り場が「チームのコミュニティ」を生み出していく原動力になるわけです。ここを指導する側も、学生もじっと見極めながら進めていくことになります。我々はこの一つひとつの科目自体もコミュニティだと考えています。その科目のコミュニティがお互いにつながりあって多くのコミュニティをつくっていく。その中でプロジェクト活動を通して地域や社会と学生たちが自然に関係していくことができるようなシステムになっている。

ここから簡単にプロジェクト運営のポイントをご紹介します。一つ。「ともに学ぶ姿勢の重要性」。テーマ設定が決め手。お仕着せ、お膳立て型、全部用意して「さあ、やりなさい」。第二は自由奔放、丸投げ方式。「さあ君たち、自由にやっごらん」とやりますと、この両方とも失敗します。そして3番目。学生が実現可能なテーマ設定をする。実現可能ですが、ちょっと背伸びします。担当のテーマについて学生で徹底的に話し合います。ここで妥協いたしますと、また振り出しに戻ることになるので、学生の以後のモチベーションかドンと落ちてしまいます。こういうところが担当者、指導者の一つの大切なポイントです。最初のレクチャーは効率的・実践的に行う。座学との違い、テーマの課題発見のためだという意識づけです。

2番目。「社会性の獲得支援」。これは自己満足に終わらせないことが大切です。他者を認識できるようにサジェッションを与えていき「プロジェクトの中だけで完結するのではだめだよ」というサジェッションを与えたり、他プロジェクトの普段の活動へ常に関心を持たせたり、「ワークショップに参加してくださいね」と呼びかけをしていくことによって学生たちは社会に対して開かれた目を持つようになってくる。これは指

導者の促し方にかかわります。

3番目。鈴木先生があとでたっぷりお話を聞かせていただきますが、「ポートフォリオの重要性」。これは個人の学習の歴史の記録、情報共有ということなのですが、キーワードになりますのはリフレクションとフィードバックです。リフレクション、振り返り学習、そしてフィードバック、あるアクションを起こせばすぐリアクションが起こってくる。こういうリフレクションとフィードバックを繰り返すことによって自分自身の歩みを確認していきます。

「CNSの活用促進」。CNSのジャーナルのシステムを使ってリフレクションをしていきます。そしてお互いに公開のポートフォリオ、日誌をつけていきますので、そのジャーナルを読むことでチームへの帰属意識や自分のポジションが認識できるようになる。互いの信頼と期待の協調学習となっていく。振り返ることで次のアクションが見えてきたりしていきます。

学生の意欲と向上を引き出すためにいろんな工夫をしています。たとえば先行登録やシラバス、志願票の作成等々で興味づけ、そして一からのコミュニケーション、他者への視座の確定という意味で言いますと異学部、異学年への選択科目で20科目から30科目のパラエティを備えていることによって、いろいろなものについて他者への視座を獲得するべく学生は動いていきます。それからチーム型PBLの学び、学びあうことの喜びを味わっていきます。

このプロジェクト型学習をしていきますと、こういうことが多分、必要な条件となって浮かんでまいります。これは指導者にもかかわりますし、学生にもかかわるものです。不断のフィードバックの重要性。地域・社会からの信頼と期待が学生に責任と自信を植えつけていく。タイムリーな指導・助言・助力が少人数制によって可能になるような環境の必要性。現在進行形のサポート。常に知りたいと思うことが、すぐに返ってくる。そしてポートフォリオプロセス評価、気づき、振り返り、こういうものを重視する。そして実際に活動報告や議事録や企画書や文書の作成を通して自己表現力を身につけていく。自発的な役割分担を行うことによって個々人の成長を促していくということになってきます。

最後に評価の方法について触れておきたいと思います。自己評価、相互評価、他者評価、第三者評価、総合評価。これらについてはまた後ほど多分、シンポジウムで議論をしていく過程で出てくるかと思っています。こういう指標を持って私たちは取り組んでおります。

CNSというシステムを使ってサポートするようなことを行っています。ご覧いただきますとミーティングボード機能、シークレッドボード機能、ジャーナル機能、スケジュール機能、タスクTO DO機能、メッセージ機能、データバンク機能、インフォメーション機能等々を使っています。これを使うことによって学生のコミュニケーションベースの手助けをしていることになります。それを実際に使ってみますと、こういう教育効果が出てきているということが、2008年度から導入して、これは申請制で行いましたので、その結果がこのように現れてきています。実際にCNSを使ったプロジェクトほど到達度が高くなっている。コミュニケーション能力が実際につく、コラボレーションへの視点が身についてくる。そして個々の教育の向上、自己発見、自己変革、自己実現を図っていくことができる。そして情報リテラシーの向上が見られるようになってくる。

私たちの次の課題は同志社大学の中にいろいろ実践されているPBLを組織化してつなげていくこと。そしてPBLについての研究会を重ねていっていますので、その拡充、そして国内におけるPBL実施校との連携・共同企画。こういうものによって学生にさらなる刺激を喚起していくこと。そしてCNSのシステムを活用して、Project-Basedの学習をさらに充実させていくことです。同志社大学が取り組んできた取り組みは、Project-Basedでの学習によって学生のやる気を、どれだけ引き出していくことができるか。そういうところに重心をおきながら、今後も努力を続けていきたいと思っています。以上で終わらせていただきたいと思っています。

事例報告 2008年度プロジェクト科目履修生による学生事例報告 1

■京田辺校地開講科目「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)〈春・秋連結科目〉

司会 第2部 学生事例報告に入ります。同志社大学ではプロジェクト科目を京田辺校地、今出川校地で26科目のプロジェクトの活動を行いました。第2部ではその中から本日の演題にあわせて3つの事例報告をさせていただきます。科目のシラバスがございますので参照ください。



それでは学生事例報告一つ目のテーマです。京田辺校地開講科目「食育と健康」(薬膳の食養生を中心として)科目担当 NPO 京阪奈薬膳研究所井原浩二、科目代表・生命医科学部教授渡辺好章、学生報告者は商学部・白井宏忠さん、商学部・太田黒敦子さん、文学部・馬寧さんです。

山田 彼らは全員2回生です。とてもフレッシュなメンバーです。聴いていただければと思います。頑張ってください。

白井 発表者の白井宏忠と馬寧と太田黒敦子でお送ります。「食育と健康プロジェクト」は通年のプロジェクトとして座学だけではなく課外活動を幾つか行ってきました。この中で薬膳とは何かを学んできました。薬膳とは何かを寧ちゃんに説明してもらいます。

馬 薬膳とは東洋医学の考えに基づいた食事のことを言うんです。東洋医学では身体の状態を健康と病気、この二つだけではなく、もう一つ未病という概念があるんです。この未病の段階で自然治癒力を高めて健康に戻してあげようというのが東洋医学なんです、それを日常の食事を使って自然治癒力を使って健康に戻してあげようというのが薬膳の考え方なんです。

白井 この薬膳という考え方をもっと世の中に広めたいと思ひましてプロジェクトを発足させました。食と健康の大切さを広めたいと。たとえばスイカというのは食べるだけで体温が2度下がるという結果が出ております。これを夏にクーラーの部屋にこもって外から冷やすのではなく、食で中から冷やしたら、そんなに負担もかからず、いいんじゃないか。こういう考え方をもっと世の中に広めたいということでプロジェクト活動を発足させました。具体的に何をするか。夏に合宿を行いました。夜通しメンバー皆で考え、その結果、二つのプロジェクトを決めました。一つは生協と共同で薬膳弁当を発売しました。もう一つは中学校で薬膳講習、調理実習を行うことにしました。薬膳弁当は？

馬 薬膳弁当のターゲットは大学生です。同志社大学の大学生にどうやったら薬膳を身近に感じてもらえるか。弁当という形で販売したらと弁当の販売を企画しました。弁当販売を生協にお願いしたんですが、しかし人手不足の問題や材料調達が間に合わない、私たちが考えたメニューが複雑すぎるので難しいと言われてしまいました。そこで仕出し屋に頼んだり、自分たちでつくろうとも考えたんですが、それも現状の許可、衛生上の面で困難ということがわかり、挫折してしまいました。

白井 また一方で薬膳の調理実習の方ですが、これはもともと自分たちの次の世代の子どもたちや親に正しい食を伝えたい、薬膳は難しいものではなく身近な食で簡単にできることを伝えたいと、同志社国際高校にお願いをしにいきました。しかし難しい条件がたくさん突きつけられました。まず調理実習が衛生管理面で難しい。大学と高校連携で行うんですが、どちらが責任をとるのか。すでに学校のスケジュールは決まっていて我々のプログラムを入れる日程があわない。家庭科との内容の調整が必要ということで、家庭科は西洋医学に基づいた内容で組まれてるんですが、薬膳というのは東洋医学に基づいているので調整が必要だと。さらに講師として我々が行くわけですからハイレベルなプレゼンが

必要という要求を突きつけられました。こういう中で、これは無理やろと。プロジェクトメンバーからこういう声が漏れてきましたね。「両方断られたし、どうしよう」「違うことをしてもええやん」「何のためにやっているんやろうか」と負のオーラになっちゃったわけですね。しかしそんな中、井原浩二先生が一言、「断られてから始まるんだ」「あ、そうか。俺ら、ここでやめたらあかんのや。ここでやめたらこのプロジェクトは終わっちゃうやん」。ここから「やったろやないか」ということで発起したのが。

太田黒 発起したのが井原先生の言葉で一番燃えたのが弁当班リーダーの倉本君です。彼は薬膳弁当の時、何度も生協に交渉しにいかけてくれたんですけど、断られてしまって、でも井原先生の言葉を聞いて、さらに折衝しにいかけてくれました。そこで弁当として販売するのは不可能なんですけど、単品として食堂にメニューとして販売させてもらうことが決定しました。二つのキャンパスの食堂で販売が決定いたしました。これが私たちがつくったメニューです。こういう立て看板によるプロモーション活動も行いました。食堂の卓上プレートとしてPOPを置かせてもらいました。食べてもらうだけでは私たちが伝えたい正しい食事、薬膳が伝わらないということで、クイズとか薬膳や食事についての知識を書いたPOPを置かせてもらいました。

白井 一方、薬膳講習調理実習の方ですが、国際高校の教頭先生との3回目の交渉で、とりあえずリハーサルを見てからという条件つきでOKをいただきました。リハーサルでハイレベルなプレゼンでなければ断るつもりだったそうです。

太田黒 そうなんです。リハーサルを見てからと言われたんでリハーサルが私たちにとって大きな壁だったんですね。私は講師としてプレゼンさせてもらったんですけど、内容を何度も遂行している時、内容を自分が本当に理解していないと伝えられないので、たくさん勉強しました。そして薬膳という未知のものを人に伝えるのですが、どうやったら伝わるのだろうと何回も伝え方を考えました。そしてハイレベルなプレゼンを求められていたので大きなプレッシャーを感じながら何度も練習しました。

白井 そして調理実習が物理的に無理だということで、薬膳を家庭でも、ということで薬膳冊子をつくりました。その中には自分たちで考案した薬膳メニューを5つ載せています。巻末に薬膳についての説明、季節の野菜特集、『東方栄養』新書という我々が薬膳の参考資料にした辞書代わりの本がありますが、この厚さをこれだけの薄さにまとめたんです。皆さんにもこの冊子を自由にお持ち帰りいただければうれしいです。

太田黒 そして本番を迎えることができました。事後にわかったことですが、学生が出前授業として国際高校に行ったのは国際高校の29年間の歴史の中で初めての試みだったそうなんです。

白井 これは参考ですが、我々が国際高校で薬膳講習を行ったことが朝日新聞と毎日新聞に写真付きで掲載されて国際高校の受講生の方だけでなく、新聞を見てくださった方にも食と健康の大切さが伝えることができたのではないかなと思います。

そしてプロジェクトの中で学んだこと、いろいろあるんですけど。

馬 私たちは食を通して、自然の中で生かされていることを学んで、プロジェクトを通して自分を生かしてくれるメンバーであったり、先生であったり、場所とか人とかいろんな周りの存在に多く気づかされました。私たちにとって、この1年間が目には見えないですが、一番の大きな成果だったと、すべてだったと思います。最後にちょっと見てもらって。(映像)

白井 プロジェクトが終わった後、皆で感謝したかった方への感謝の気持ちを述べて、これが仲間同士で、よくやったぞと。ということでプロジェクト科目「食育と健康」完了ということでご清聴ありがとうございました。

事例報告 2008年度プロジェクト科目履修生による学生事例報告 2

■今出川校地開講科目「私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう」<春・秋連結科目>

司会 それでは学生事例報告2番目に移りたいと思います。今出川校地開講科目「私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう」。科目担当丸池藤井株式会社三甲野春二。科目代表・商学部教授・中村宏治。学生報告者は文学部・福井景子さん、文学部・川又夕さん、法学部・田中佑実英さんです。



田中 皆さん、こんにちは。それでは「私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしよう」を発表します。田中です。福井さん、川又さんです。

本日の流れとして私たちがどのようなプロジェクトをこの1年間やってきたかを簡単に説明します。次に1年間のモチベーションの流れを見て私たちの活動を振り返ります。そして事例として、どのようにチームワークを生むプロジェクトマネジメントをしていったのかを具体例を踏まえて見ていきたいと思います。

私たちは着物業界の活性化の一端を担うという大きな目標を持ってプロジェクトを始めました。その一つ目のアプローチとして「今までにない気軽に着ることができる着物の制作」ということで着物制作の面と、固定観念を払拭して「一人でも多くの若者に気軽に着物を着てもらおう」という情報発信の二つの面からアプローチを始めました。

まず着物制作の面ではターゲットを着物に興味はあるけれど、着たことがないという同志社生を据えました。そしてコンセプトとして、ちょっとしたおしゃれをしたい時に着られる洋服感覚の着物を挙げました。そして私たちが今日、3人で着ている着物がこの1年間、制作した着物です。

次の情報発信のアプローチとして、同志社EVEで出店を行い、着付け体験と作った着物の展示を行いました。そしてホームページとブログを作成し、着物の情報を若者に伝えることを試みました。先日、私たちの活動の締めくくりとして藤井さんでのプレス発表を行いました。

次にプロジェクトで学んだこと。チームで一つの目標に向かって共同してやり遂げる力を私たちは挙げました。具体的には目標に向かって細かくマイルストーン設定をしていくこと。相手を思いやる気持ちを持つこと。意志をはっきりすること。常に情報共有、報告、連絡、相談をすることを挙げました。これが私たちの1年間のモチベーションですが、谷もあり、山もありというところです。まず4月、皆、やりたいこと、「こんな着物をつくりたい」という思いを持って活動が始まりました。谷があり、山があり、ポイント1ですが、私たちは春学期の成果報告会に向けて活動を始めていきました。ポイント2ではEVE祭に向けてだんだんモチベーションが上がっていったということです。ポイント3として、いろんな上がり下がりがあったんですが、振り返って思ったことは悩んだ後、乗り越えた先には私たちはすごい成長したなということが挙げられます。今回の発表では成果報告会とEVE祭をメインにして私たちがどのように問題点を解決してチームを動かしていったのかについて言及していきます。

福井 春学期の成果報告会について採り上げて説明します。この時のチームの状況。個人の役割がはっきりしなかった。問題が漠然としており、やるべきことが不明確だったということが挙げられます。そこで全員で目標をなし遂げる機会として春学期成果報告会に注目してそれに向けて取り組んでいきました。そのための具体策として、一つ目は成果報告会の発表は全員が役割を持って行える、プレゼンターだけでなく役者、照明係、音響係も果たせるような寸劇形式で行いました。二つ目。プロジェクト科目の受講生は忙しい人が集まる傾向があるんですね。個人がプロジェクトに常に参加できる機会ばかりではなく、それぞれの状況に応じた役割分担や工夫が必要だというわけです。具体的に計画的に作業を行うにはメンバーの予定を調整することが大切です。忙しい時期に協力して一つのも

のをつくることでは仕事量に差が出てしまうことは避けられませんでした。その解決策としてそれぞれが自分の状況、参加できる時間などをきちんと報告、共有することが大切でした。そのためにCNSというプロジェクト科目専用のmixiのようなものもあり、それを有効活用しました。CNSのスケジュールのところに参加できない人はその理由とスケジュールを書き込みました。それによって互いの状況をメンバーが知ることができ、フォローした環境、メンバーを思いやる気持ちが生まれました。会議に参加できないメンバーは家で一人でやれるレジュメ作成などの作業を担当しました。CNSを活用し、WEB上で意見交換を行い、家でも学校でも意見が言えたり、会議ができたりして、常に今の進行状況がわかるように全員が目標や状況を共有することができました。結果的には仕事量に差はあったとしても、お互いにできる限りの協力というものができました。

結果。活動を通して全員参加で一つのことをなし遂げることで、今まで遠慮して意見が言えなかった、相手のことがわからなかったという状況から脱して、互いに腹を割って話し合える環境が整いました。その環境ができたことによって最終的に着物をプロデュースするという目標に向かって協力しあえる関係ができました。それと同時に全員が主体的に成果報告の準備を行うことによって春学期の活動の振り返りを深く掘り下げることができました。その気づきをもとに最終目標の達成のために夏休み、秋学期以降の活動が明確になりました。

2点目のEVE祭について言及していきたいと思います。当時のチームの状況。夏休みに燃え尽き症候群に陥ってしまいました。成果報告会でやりきった感があったんですね。夏休み期間なので皆、実家に帰ったりして何かと皆、忙しくて、その結果、一部のメンバーに仕事が偏るといった状況に陥ってしまいました。そこで次の新たな目標設定を行いました。成果発表会の時の一部の人が大変になることの反省も踏まえて役割分担をして全員を巻き込んで目標をなし遂げる機会として同志社EVE祭に注目してそれに向けて取り組んでいきました。具体策の一つ目。役割分担。前回の成果報告会ではリーダー一人の負担が多かったので、今回のEVE祭では役割分担を前回以上に明確に行い、リーダーは全体を統括する。そしてそれに従うものとして展示担当、連絡担当、着付け担当をおきまして、4人を中心に他のメンバーに仕事を的確に割り振っていくことをしました。これによって徐々に周りのメンバーを巻き込みチーム全体のモチベーションを上げることができました。

具体策の二つ目として明確な目標設定が上げられます。初期段階で明確な目標設定と計画を行っていき、EVE出店の目的はエンドユーザに情報提供する、その反応を検証することに着目しました。展示と意識調査など5点を中心に行ってきました。これを初期段階からメンバー全員が共通意識として定着していくことによってモチベーションが下がらないという効果もありましたが、計画段階の話し合いが今までよりスムーズにいくことができ、作業もスムーズに進む要因になったように思います。結果。役割分担、目標設定、周りを巻き込む組織運営によってプロジェクトの進行がスムーズになるとともに成功をおさめることができました。特に初期段階でのしっかりとした目標設定は常にチームワーク形成の鍵だと思います。今回のプロジェクトではチームワークを焦点にしていました。このような技術のスキルアップも達成することができました。

まとめに入りたいと思います。今回の主題はなんだったんでしょうか。そうです。今回の主題は「チームを生むプロジェクトマネジメント」です。チームワークを生むプロジェクトマネジメントはチームで一つの目標に向かって共同してやり遂げる力を私たちに与えました。その力は私たちが社会で活躍するための基礎的諸能力、つまり総合的人間力を身につけることができたのです。私たちのプロジェクト科目は3回生が多く、今年、就職氷河期と言われていまして、そちらの方に全身全霊、込めがちな皆を、まとめつつ、それでもここまで最後の目標達成をできたことが皆に対して感謝しております。それだけではなくこの場をお借りしまして同志社大学教務課のプロジェクト科目事務局の皆様、プロジェクト科目にかかわる皆様にお礼を申し上げます。それでは私たちの発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

事例報告 2008年度プロジェクト科目履修生による学生事例報告 2

■今出川校地開講科目「演劇で地域の子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト<春・秋連結科目>

司会 学生事例報告、3番目の報告をお願いいたします。「演劇で地域の子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト」。今出川校地開講科目です。科目担当NPO フリンジシアタープロジェクト。科目代表文学部教授・山田和人。報告者は経済学部・梅本修人さん。経済学部・三宅鮎美さん。文学部・竹澤啓二さんです。



梅本 みなさん、こんにちは。「演劇で調査の子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクトの学生事例報告を始めさせていただきます。発表者は竹澤啓二。パワーポイントは三宅鮎美。今回、リーダーを務めさせていただきました梅本修人で行います。

私たちは本プロジェクトでは子どもたち、小学生が皆で劇をつくる過程で、人と人とのつながりについて考え、将来、自分を表現していくきっかけをつくってほしいと思い、1年間活動してまいりました。これがスケジュールです。4月にプロジェクトがスタートし、企画立案、演劇ワークショップについて学びながらコンセプトを立ち上げ、6月には小学校との交渉を行い、7月、同志社小学校でのワークショップを秋学期と春学期にやらせていただくことが決まりました。秋学期から劇をつくる約束ができたので7月、導入としての演劇ワークショップを3コマ行いました。8月、学生が自主的にリトリートセンターで演劇合宿を行い、その後、9月から実際に劇づくりに入っていきました。11月15日、劇の本番を迎え、終わってから振り返りをして私たちの活動を広めていきたいと思い、シンポジウムを企画して1月に実施したという流れになっています。

本日は特に9～11月にかけて劇づくりを子どもたちにも行ったところを詳しく聞いていただきたいと思います。本番の映像を先に見ていただきましょうか。

(映像)

オリジナルソングもつくったりして、メッセージを伝えたという劇です。手作り感のある本番を迎えるまでにはたくさんの苦勞の道のりがあったわけですが、その道のりを流れ図にしていました。テーマが始まり本番まで9～11月の時期。はじめはテーマがぐにゃぐにゃしていて、やりたいことは啓発劇であればいいかなど。環境、食育とか、どうしようかと。そこで子どもたちにアンケートをとって持ちかえってテーマを絞り込み、また話しあうことでテーマを決定しました。それをもとに台本作成も子どもたちと一緒につくっていきこうと子どもたちと話しあって台本の大枠を持って行って、セリフも配役も子どもたちに考えてもらって台本完成となりました。台本完成まで来て、やっと演技が始まるのですが、ここから演技の班と裏方、音響、照明、衣装、小道具とか二つのチームをつくってそれぞれ両方に子どもたちに所属してもらって舞台の裏方もやりながら役者もやってもらおうという取り組みでした。子どもたちは「自分たちで劇をよくしよう、楽しませよう」という気持ちが出てきて始めてきたので、子どもたちのリーダーを立てて自分たちでチームを動かして劇をよくしてもらおうと。リーダーを中心に活動を続けていき、本番を迎えることができました。

言いたいのはこれをやっていくと、ぐるぐるした手順を矢印の方向で追っていくと、ここに注目していただきますと、スタートからはじまり、テーマがぐにゃぐにゃした状態、子どもたちにアンケートをとって意見を聞いてテーマを絞って、一緒に考えて決めていく。この後部のやりとりが何かに似ているかなど。これを振り返りで考えました。

竹澤 これは皆さん、ご存じの餅つきです。学生がはじめ、ほんやりしたテーマを持って行って、それを小生がつかう。また私たちか学生がこねる。交互のやりとりによって劇づくりが進んできたわけです。

これを「餅つきメソッド」と称して説明したいと思います。3日前に思いつきました。餅つきメソッド、従来の小学生と大学生の連携と何が違うのかから考えてみたいと思います。従来は大学生が小学生に何かを教える。体験させるものなんですね。これだと小学生に自主的な学びがない。しかし小学生に自主的な学びを持った活動もあります。これ自体、素晴らしいもので、私たちも小学生の自主的に任せた活動を行ってもらおうと考えていたんですが、よくあるのは、やり方を教えて、先に小学生に自由にやらせる。大学生はそれに干渉しないという姿勢が多いんですが、そうすると大学生のよさが十分に活かされないのではないかと考えました。では餅つきメソッドは何が違うか。小学生と大学生が一つのチームになって機能していたと言えるのではないか。それによってどういうことが起こるか。お互いのよさが発揮され学び合いが生まれる。大学生がどのようにどういうテーマにするか、抽象的なことは小学生には考えにくい。正義とは何かということを小学生に聞いても答えにくいと思います。大きなことを大学生が考えて、具体的なことを小学生が考えてつくる。その交互のやりとりによって私たちの活動が進んできたと言えると考えています。

小学生と大学生の連携教育の新たな形として3つのポイントを考えました。これが重要だったことですが、答えのないもの、正解のないものを小学生と一緒に悩みながらつくっていく。知識を教えたり、丸投げにしてつくらせるのではなく大学生と小学生と一緒に、しかも演劇は無形のもので、正解がないものですが、答えのないものを一緒に考えていく。餅つきのやりとりで考えていくことが一つのポイントです。それを支えていたのが小学生と大学生によるチームです。

さらにその中でキッズリーダーをおくことによってプロジェクトとして小学生とかがかわってききましたが、小学生の中にも自分たちの劇をよくしていこうという動きが出て、リーダーを置いたことで小学生にもプロジェクトが乗り移ったと考えています。小学生と大学生、大きな目線で見ると、一つのチームになっていて、その中で小学生と大学生、それぞれのプロジェクトが生まれていったのではないか。それによって私たちの劇はわりと成功したのではないかと考えています。私たちは餅つきメソッドを今後の将来の新しい形としてぜひ推していきたいと考えております。詳しい説明がなかったかと思いますが、ありがとうございました。

<会場との質疑応答>

司会 ここから質疑応答に入りたいと思います。プロジェクト科目検討部会長の山田先生、司会をお願いします。

山田 皆さん方からご質問を受けたいと思います。プロジェクトに取り組んでいただき、こういう点がしんどかったと、具体的にお話していただきましたので。3つのプロジェクトについてこれは聞いてみたいということをお感じになられたらどうぞ。

会場 「私の「着てみたい・きもの」をプロデュースをしてみよう」で私だけが着て終わりなのか、それをもっと広げていこうとされているのか。そこについて。

川又 最初にチームとして何をつくってみたいかということから始まったんですが、EVE祭、成果報告会で評判がよくなったので丸池藤井さんと商品化していくという、テキスタイルをどうするかという話も出ております。いまずぐ製品化とはいかないんですが、その方向で考えております。

会場 このプロジェクトの発表がモチベーションを開けてチームワークができたという、いい成果だと思います。ところで今、学生としてこういうプロジェクトをやった結果、大学の専攻にどんなフィードバックがあったか。そういうことを感想ながら聞かせていただけたらと思います。

梅本 私は教職課程を履修していて、子どもと学ぶということだったので、3回生で教職で授業計画の書き方を学びます。それが見事に小学校に行く時の授業計画を書く時に役に立って、さらにそこでだんだん先生がおっしゃっている説明とかが、すごくリアルに伝わってくる。大学の専攻としてやっている勉強とプロジェクトがリンクしていることを今年、感じることができました。

- 白井** 商学部ですが、薬膳を学びまして同志社国際高校、生協に薬膳をと言ういと、「それ、いいね」と言ってもらわないとだめ。採用してやろうよと。薬膳をやりたいというだけでは一緒にやろうとにならない。企画書の部分で、どう言う相手方にメリットがあるか。それに気づかされたことがあります。本学とのかかわりではレポート、プレゼンで相手が何を面白いと思って聞いてくれるか。相手方の意識も考えて発表することが意見を述べる場合に大事だという気づきはありました。
- 会場** 大学教員です。私の大学でも同じようなことをやっていますが、問題になるのはチームで取り組んだ時、モチベーションが下がったり、踊り場という話もありますが、その中で大切になるのはチームの力ではなく、個の力が重要になると我々は考えています。チームで群れてやるのではなく、そこで一人ひとりが自分の課題、問題に自分自身を徹底的に見つめ直すところから、バンと飛躍が出るということを今までの経験で感じています。皆さんの場合、いかがだったか。問題が起こった時、ここで一回、チームで話しあったりするのはなく、自分自身の問題を個々で向かい合う時間帯をお持ちになったのかどうか。
- 白井** 薬膳というのは食育と健康のプロジェクトで13名いましたが、皆、食育、薬膳に興味があって共感してきているという全員の個別の共通感がありました。どうやって広めるか、一回、挫折を経験して、その時、皆が広める目標があって、どうやって広めるか。プロジェクトを仲良し、こよしでやりたいのか、目標達成を優先したいのか。合宿中迷いました。目標達成したいと共感しているなら、そのために自分たちに何ができるか、何ができないのかを、一人ひとり落としこむ必要があったので、プロジェクトのリーダーとして誰が何が得意で、何が得意でないかを把握しながら責任を分担していく、ほぼ何も僕はしていないんですが、ここが活かせる場をつくることでリーダーとして工夫してきた部分がありました。「私だったらこうする」と個々同士で話し合っただけで成功した部分もあり、個々が「私はこうしたいから、その人、必要だね、この知識が必要だ」と周りを巻き込んでいくということで、プロジェクト外にも輪が広がっていったこともありました。
- 田中** 着物プロデュースでリーダーをしておりまして、モチベーションが下がった時、誰か一人「これは大変だ。やらないといけない」となるとチームより個人がCNSに企画を出してアップした後、それから皆がコメントしていくという形で、何か生み出すのは個人でした。そこからグループとして活動していくという形で、いつもチームでやることができない時には、割り振りをしながら成功するように努めました。
- 梅本** 演劇プロジェクト13名でやってきて、リーダーを務めさせていただいて、リーダーに関して悩んでいました、ずっと。引っ張っていかないといけない。しかし自分に実力がないことに気づいて、有能な人を見ていると、リーダーとして大切にしてきたことは自分が力にないことがわかってから、時間を費やすしかなかったんです。12月頃、それがコンプレックスになっていったのです。その時に悩んでしまってプロジェクトから離れて逃げ出しそうになった時期がありました。2週間くらい音沙汰なく。自分の実力がないのではないかと悩んで。きっかけというのはメンバーからメールをいただいて、見て、CNSもあってやっている、他のメンバーは僕の負っていた部分も、僕だけではなく、他のメンバーがフォローしてくれて、ちゃんとプロジェクトは進んでいたんです。必要ない人間ではないかと思っていたのが変わってきて、自分だけではなくチームで誰かがやるんだから、それに対して信頼というか、卑屈になるのではなく、誰かがやるんだと思ったら、自分もやろうと思うようになって。皆に謝ってから復活したという話なんですけど。何がしたいかという、ちょっとわからないんです。そういう感じです。すみません。(拍手)。拍手までしていただいて。
- 山田** 復活に対する拍手だったかと思いますが。それでは、もう一人。
- 会場** コーチングの役割もあるかと思いますが、小学校では先生がプロジェクトにかかわられて、先生の指導と学生の指導との関係で、どんなコーチングが有効だったのかをお聞かせください。
- 梅本** 企画が進みはじめてから劇づくりの話ですか？ 6月に小学校に提案した時、約束したことがあって

「これは教育の現場である」と同志社小学校の先生方に念押しをしていただき「子どもたちには真摯に対応すること」。授業計画の提出などハード面も取り揃えて、責任をとる約束して、秋学期からの劇づくりを時間にして20コマ以上、かなり長い時間をいただきました。授業中も先生方は部屋の隅で眺めている。僕たちは子どもたちと一緒に説明した通りのことをやって。先生方と学生のかかわりは一言でいいますと、セーフティネット。僕たちが子どもたちのとかかわりで悩んでいた時に先生方がカツを入れてくれて、メリハリを入れるというアドバイスもいただいてプロジェクトが動きだしこともありました。全面的に学生に信頼をおいた上でのセーフティネットの役割を果たしてくれたのではないかなと思います。

竹澤 科目担当者という意味でのコーチングもあったと思います。今回は劇団フリンジシアターの方が来ていただいて、その方から、はじめは演劇の要素を抽出したワークショップ、ボール投げゲームとか、教えていただいたり、ゲストスピーカーに来ていただき、企画書の書き方、報告書の書き方も教えていただきました。活動が秋になって本格化してから担当者は口出ししないような形で、それまでの期間で演劇についての基礎的な知識を教えていただく形になっておりました。

川又 着物プロジェクトでは科目担当者、先生方は粘り強く見守ってくださって、私たちがやりたいことを出してみる、聞く時には答えてくれるということで、モチベーションが下がった時、危機感を持った時にはメールで「頑張ってください」とメールを送って、見守ってくださりつつ、あたたかい言葉をかけてくださりつつ、ということでした。コーチングに関しては、あたたかい意味で外側から見守ってくれるという形で、そんなに一杯これもして、ということではなくやっていただきました。

福井 着物をつくるにあたって伝統を踏襲していくという色が強くて、そういう意味を持つ着物だから、それを押しつけないで、私たちが自発的に知りたい、こんなものがいいという思いを言うてくるのを待ってくださっていたという感じですね。

白井 井原先生は見守ってくださいました。出てくるところは「ノー・グッド」というところでした。僕はそれを言われまくってたんですが。プロジェクト全体を見渡しながら、ここで何が必要か、ちょこっと、「それはあかん」と言いつつ、見守って、ほぼ僕たちに任せてくださったと思います。とてもやりやすかったと思いますね。

山田 結論は「あまり口出しすな」ということかもしれませんが。コーチングの技術を発揮しようと、これをしなればならないと思ひ込んでしまうと、それがうまくいかなくなる。個の力を引き出すことにもならない。彼ら自身、お互いに学びあうことが大きかったのだらうと思います。皆、頑張っって受け答えしましたね。はい、以上で終わりたいと思います。

司会 どうもありがとうございました。

「第2弾 学びの原点—プロジェクト型教育の挑戦!!—地域・社会が学生を育てる」アンケート

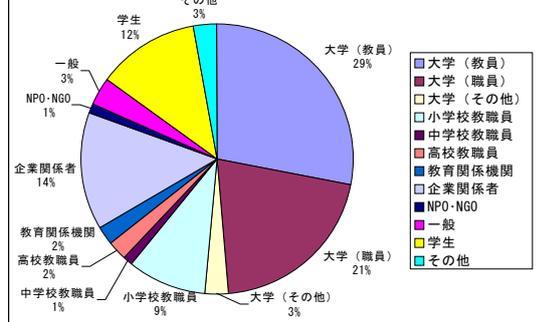
文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム
第2弾 「学びの原点-プロジェクト型教育の挑戦!!-地域・社会が学生を育てる」

— アンケート結果について —

●シンポジウム参加者の内訳

所属	人数
大学 (教員)	50
大学 (職員)	37
大学 (その他)	5
小学校教職員	17
中学校教職員	2
高校教職員	4
教育関係機関	4
企業関係者	25
NPO-NGO	2
一般	6
学生	22
その他	5
合計	179

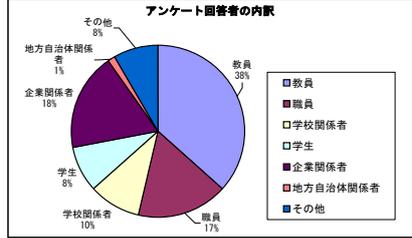
シンポジウム参加者の内訳



■アンケート結果について

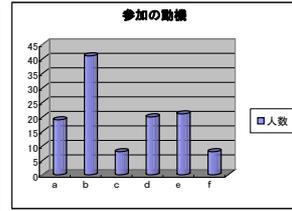
●アンケート回答者の内訳 ※参加者中、アンケートにご回答頂いたのは、約39.6%でした。

所属	人数
教員	26
職員	12
学校関係者	7
学生	6
企業関係者	13
地方自治体関係者	1
その他	6
合計	71



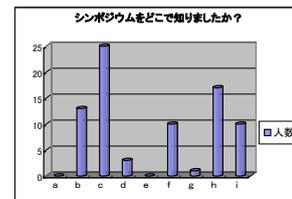
●参加の動機 (複数回答可)

参加の動機	人数
a 地域の連携に興味があった	19
b PBLに興味があった	41
c 関係者から勧められた	8
d 学生の自主活動に興味があった	20
e ポートフォリオに興味があった	21
f その他	8



●シンポジウムをどこで知りましたか? (複数回答可)

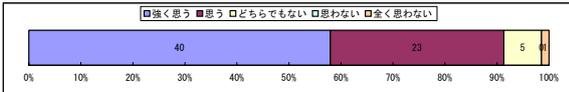
シンポジウムをどこで知りましたか?	人数
a 新聞広告	0
b 同志社大学のホームページ	13
c 案内パンフレット	25
d 学内のポスター	3
e 学外のポスター	0
f メーリングリスト	10
g 文部科学省ホームページ	1
h 関係者に勧められて	17
i その他	10



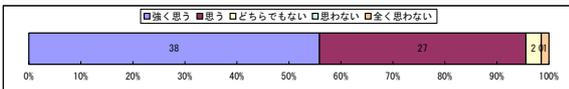
アンケート項目	強く思う	思う	どちらでもない	思わない	全く思わない
(1)PBLを大学でもっと普及させるべきである	40	23	5	0	1
(2)PBLは、大学においても有効な教育手段となる	38	27	2	0	1
(3)大学と小学校～高校はもっと連携するべきである	32	24	9	1	3
(4)大学は地域・社会ととも連携すべきである	39	22	5	1	1
(5)学生にはもっと社会人基礎力を身に付けさせるべきである	37	23	5	1	0

※表の数値は、人数を表わす。

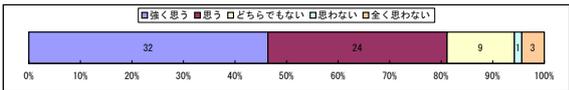
(1)PBLを大学でもっと普及させるべきである



(2)PBLは、大学においても有効な教育手段となる



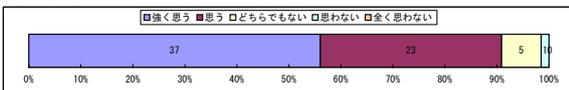
(3)大学と小学校～高校はもっと連携するべきである



(4)大学は地域・社会ととも連携すべきである

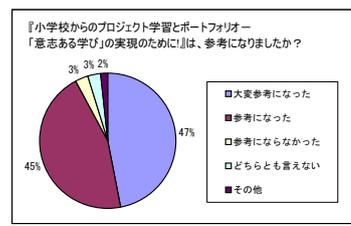


(5)学生にはもっと社会人基礎力を身に付けさせるべきである



■講演「小学校からのプロジェクト学習とポートフォリオ―「意志ある学び」の実現のために!」は参考になりましたか?

回答	人数
a) 大変参考になった	30
b) 参考になった	29
c) 参考にならなかった	2
d) どちらとも言えない	2
e) その他	1



【教員】

- Web のビデオで拝見したことを再確認できました。
- 自己の学習経過を本人が確認できる。
- 3回目の研修会の参加であるが、言葉の概念をさらに理解する事が出来た。
- 教養科目、専門科目の教育において能動的な学びを推進するために、ポートフォリオがどう活用できるか今ひとつはっきりしなかった。
- ゴールに向かって進むことの重要性が良く分かった。
- ポートフォリオについてよく知らなかったため、大変参考になった。
- 具体的にとても分かりやすかった。内容が多いので60分あった方がよいのでは。

【職員】

- 普段考えている事、課題だと認識している事を「セルフコーチング」「俯瞰」「メタ認知」といったことで整理、確認することが出来た。
- 鈴木先生のパッションに共感しています。PBL を FD と関連づけて、未来教育に役立ててほしいです。

【学校関係者】

- プロジェクト学習を実施しており、大変納得できた。

【学生・生徒】

- 「考える」ということの道筋を知って、それはどんな年齢の人にも当てはまると感じたから。
- Vision ⇒ Goal というシンプルな事が、医・看護・介護業界で役立っている事が分かった。
- 小学生にはこんな事が出来るのか…と驚いた。要はコーチング、可能性を引き出せるか否かか感じた。

【企業関係者】

- ポートフォリオの重要性を再認識いたしました。
- 考え方が新鮮に受け取れました。
- PBL の具体的な内容や効果のイメージが持てた。
- 目的と目標をしっかりと把握することの大切さを理解することが出来ました。

■ 講演「小学校からのプロジェクト学習とポートフォリオ「意志ある学び」の実現のために！」の内容についての意見・感想(自由記述)

【教員】

- 大変有意義なシンポジウムだった。
- 経営学のポートフォリオを導入しようという試みだと思いが、何の意味があるのかわからない。ポートフォリオは企業がリスク分散のために多角化することではないのでしょうか？概念の定義が極めて曖昧である。
- 今後も、研究会・発表会があれば参加したい。
- エネルギーシナプレゼンテーションでした。
- 未来教育に共感しました。
- PBLの意義がよくわかりました。特に、同志社でやっている共通教育段階でPBLをやっている実践は参考になる。プロジェクトにおいてのプロセスこそが、学生においての社会人基礎力を育成するものとなると思いました。
- 山田先生との対談を楽しみにしていましたが、時間がほとんどなくなってしまい残念です。
- 内容を3分の1程度にした方が、却って効果的なような気がします。

【職員】

- パワーポイントだけでは飽きてしまうけれども、動きや具体例が途中入り、大変分かりました。メリハリがついてよかったです。
- 今後も、研究会・発表会があれば参加したい。
- プロジェクト学習を進める際の困難や失敗談も聞けると良かった。
- 普及させるにはコーチ役を担う教員向けのFDが重要となる。
- プロジェクト学習を教育課程のどの部分どの程度入れるべきか。

【学校関係者】

- ポートフォリオが可視化する手法、振り返る手法は目標実現に有効な手段と思いました。学校でももっと研究する必要を感じました。

【学生・生徒】

- 具体的なプロジェクトをもっと見せて欲しかったです。

【企業関係者】

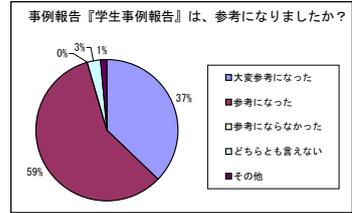
- 現在の職場での仕事スタイルにおいても、改めて見直すきっかけとなりました。

【その他】

- 生物モニターを使ったコンピューターは心を持つか？DNAの配列によって人体を作ったとして、脳だけに心があるとは思えない。ポートフォリオを持ったコンピューターが自らコンピューターを製造して行くのだろうか。
- もっと質問・意見を聞く時間を設けてほしかった。
- 自分が参加することの素晴らしさを実現できる教育を支援して欲しいです

■ 事例報告『学生事例報告』は、参考になりましたか？

事例報告『学生事例報告』は、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	25
b) 参考になった	39
c) 参考にならなかった	0
d) どちらとも言えない	2
e) その他	1



【教員】

- 当プレゼンテーションに至った経過を知ることができた。
- 学生たちは極めて優秀な方が多く、素晴らしい。
- 学生の学びのプロセス、成長を如実に伺えることが出来た。
- 学生の事例については、本当に参考になることが多く、彼らの成長にプロジェクト科目が有効であったと確信できた。
- 教養科目のPBLという同志社の特徴は、学生間のコミュニティ形成のプロセスが達成されるということが、最大公約数に集約されることに終結するのではないかと。

【職員】

- リアリティがあり、学生の皆さんの成長度が伝わってきました。
- いきましている姿、様々な問題にぶつかり、問題を乗り越えて1つのかたちにして発表することができて、成長しているのが見て取れた。
- どのようなPJ科目があり、活動していることは知っていたが、実際のように活動し、疑問にぶちあたった時、具体的にどう対処してきたのか聞いて良かった。今後の取組みに活かしていきたい。

【学校関係者】

- 大学生もキャリアデザインを行っていることを知り大変参考になりました。
- 大学生のもつ力がPPTやプレゼンまで内発的な力が発揮されていたと思う。指導者のコーチング「言わないでも大切だと思います」。
- 学生側からの一方的な発表ではなく、そのプロジェクトの進行を客観的に評価し、全体的なプロジェクト学習の向上につながる構成にしてほしかった。

【学生・生徒】

- 他の学生も自分達と同じだったというのを知ったので参考になった。
- 私自身の7年度プロジェクト科目の受講生です。モチベーション維持や、苦勞感、感謝の気持ちはよくわかります。非常に共感しました。

【企業関係者】

- 学生の自主性が大変参考になった。
- 学生の皆さんの成長が感じられました。
- 独自性が感じられました。
- 今の学生の行動力に驚きました。自分の意見を持ち、ちゃんと伝える力もあり、プロジェクトから派生するスキルも養っていることが分かった。

- PBLの具体的な取組内容、成果がイメージできたので参考になった。
 - 若者らしく伸びているのには好感が持てた。それぞれ、「何か」を修得しているのがよく分かりました。
- 【その他】
- 食育についての報告プレゼンテーションが大変よかった。プレゼンの素材づくりがなかなかいい。新聞2紙に取り上げられたのはすごいことです。

■ 事例報告『学生事例報告』の内容等についての意見・感想(自由記述)

【教員】

- 具体的な成果を学生自身が報告することはとても説得力がある。
- 事例そのものは素晴らしい。学生も真面目で頑張ってますね。ただうまくいかなかった事例とかは、なかったのでしょうか。やや学芸会的な報告であったことは残念。しかし学生は優秀ですね。
- 3チーム以外の事例についても、資料等を配布していただけたとありがたい。
- 熱心な取組の様子がよく分かりました。参加者の成長が感じられます。
- レベルの高いプレゼンが並びました。特に「食育と健康」が素晴らしい。

【職員】

- 学生が主体で考え、行動し、挫折もあったと思うけど、先生(科目担当者)は見守る形で、学生自身が成長していくことに感じました。
- 聞き手に分かりやすい(また聞き手が何を知らたいのかを想定した)報告であったと思います。
- 学生との質疑応答の時間はとても良い企画です。本章の部分も聞けた。
- 学生の発表はよくできており、PBLの成果として人としての巾ができたのではないのでしょうか？

【学校関係者】

- 同志社大学生の質の高さを改めて感じました。
- 地域・社会から学ぶ側面の事例があればと期待していました。
- 学生達は、それぞれに自らの思いや行動でプロジェクトにあたり、発表までこぎつけた満足感で自分達を評価するが、実はそれぞれのプロジェクトがどの程度の評価を得る内容であったか、そして、そこからどうすればさらに高い到達点に向かうのかについて、実践を共有し、協議出来れば良かった。
- 13年前に卒業した時期に比べ、かなり多角化した授業構成になったことが羨ましく思います。近年、新入社員を見ていると、如何に仕事をやるか、無目的な印象を受け、職場でもどう接してよいかわからないケースがあります。今後も学生に対し、このようなプロジェクト型の授業を増やし、率先して行って戴ければと思います。

【学生・生徒】

- 山田先生のおっしゃる通り、学年学部の違いを乗り越えて共にプロジェクトを進められた事が1番の学びでした。今振り返ると、価値観の違いを感じる日々でした。

【企業関係者】

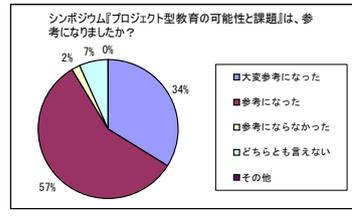
- プロジェクトの完成度が高いので弊社も応募があれば申し込みたいと思った。

【その他】

- テーマを食育・演劇・きものなど身近なものにしほるのではなく、もっと広いテーマにすべきである。
- 今後の展開ビジョンや、ゴールについて継続する為のアイデアをもっと聞きたい。
- 小学生、教員、企業、法人の立場を、学生生活の間に体験できることを素晴らしいと感じました。企業、法人、大学(教育現場)の相互発展(相乗効果)がある。

■ シンポジウム『プロジェクト型教育の可能性と課題』は参考になりましたか？

シンポジウム『プロジェクト型教育の可能性と課題』は、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	20
b) 参考になった	34
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	4
e) その他	0



【教員】

- 事例を数多く見ることで、導入に弾みをつけたい。
- 各自が意見を述べるだけで終わってしまった。
- プロジェクト学習を教育のカリキュラムとして入れる上での参考になりました。
- いろいろな大学やプロジェクトの事例について知る事が出来たため、大変参考になりました。

【職員】

- 各大学がプロジェクト型の教育を行っていることを知り、うれしく思いました。
- 発表の仕方、時間を守るのも大きな課題。

【学生・生徒】

- 学生としての目線でもしかプロジェクト科目を見ていないところがあったので、どちらともいえない。
- 先生方のディスカッションを聞きたかったです。
- 時間が短くて残念でした。

【企業関係者】

- PBLのテーマや提案の募集方法にも、大学により様々な方法があるのが分かり、参考になりました。
- 将来的な学生の志向に幅を持たせるものであると考えられました。
- 良いところだけではなく、課題、問題点も示されており、説得力がありました。ただのフォーマットではなく参考になりました。
- 各大学の切口の違うプロジェクトを知り、良かった。

【その他】

- 宮本先生の発表が大変参考になった。
- それぞれの大学の取組みが良かった。

■ シンポジウム『プロジェクト型教育の可能性と課題』の内容等についての意見・感想(自由記述)

【教員】

- 本音で話してもらわないと、深まらないし、意味が無いと思う。
- 大学の運営にとって、大変参考になるディスカッションになっていると思う。
- PBL が OJT で終わってしまったのは、学生の能動的な学びを推進できないのではないか。PBL は社会適応能力の中心のものなのか。

【職員】

- 時間が少ない中話していただき、もう少し聞きたいところもありました。少し濃度が濃かったように思います。GP 採択された大学の実際の活動内容を聞いて、参考にしたい事がありました。

【学校関係者】

- 大学における課題、プロジェクト教育の現状を知る事ができてよかった。

【学生・生徒】

- PBL 学習に対して、非常に情熱を持っていらっしゃる先生が集まっていたので、もっと時間があれば今後の PBL 学習の発展に役立つ議論が、もっとなされたのではないかと思います。質疑応答の内容では、質問された方と回答された方しか理解できなかったのでは？と、失礼を承知で思いました。
- 社会人スキルと、学問(教養・専門)能力の何を育成していくのか？どちらなのか？おそら初年次と三年以降では異なると思うが、ここの整理が必要だと感じた。

【企業関係者】

- 各大学の取組みが良く分かり、参考になりました。
- 大学の取組みについては理解できましたが、企業側の意見も聞ければよかったと思います。
- 他大学のプロジェクト科目の実施状況、条件の違いが分かり、複数の大学から招聘したのは良かったと思います。
- 社会人として、大学生が入社してくる時に受ける GAP が少なくて済む分、企業側からすれば離職率の低下につながるのではと考えられます。

【その他】

- 質問・意見発表の時間を設けてほしかった。
- 昔から「今の若者は…」と言う言葉、言い方がありますが、昔も今も変わらないなと思いました。少子化の時代、「高期高齢者大学」なんてあってもおもしろいのでは？
- 地元企業との協力、学生から企画を募集して決める、というのはユニークだが継続学生の資質が問題。
- 「評価」とは一体誰が必要としているのか。企業が、新卒学生に添えられている数値に興味を持っているとは思えないと感じました。
- 生きる力を学ぶために学生が失敗し、社会規範を知る事、その重要性を大学が学生に教える事が大事だと思います。「多様性に向き合う」「多様な学生とプロジェクトを組む」、いい言葉です。

■ その他、意見・感想(自由記述)

【教員】

- 英語の授業に生かそうと思ってやっています。PBL は教育を変える最も有効な方法の一つだと思います。
- 今後も、PBL に関する集会が続く事を願っています。日本の若者が希望を持てる大学になるよう、教育改革が進行する事が重要と考えられます。
- パネルをもっと聞きたかったです。
- 失敗例にクローズアップした報告会も意義が大きいのでは？

【職員】

- 全体を通してもう少し時間が欲しかった。発表された先生や学生の熱い気持ちを、もっと時間をかけて聞きたかった。
- 全体としてとてもよく練られた構成だったと思います。様々な大学がこういう取組みをされていることに安心しました。

【学校関係者】

- こうした企画、とてもよかったです。
- 全体としてとてもよく練られた構成だったと思います。特に鈴木敏恵さんのお話は5年ぶりですが、やはり元気が良かったです。ありがとうございました。様々な大学がこういう取組みをされていることに安心しました。

【学生・生徒】

- プロジェクト科目の担当の先生と、コンソーシアムを通じて知り合って、聴講生として途中からプロジェクトに参加していました。他大学の学生と知り合って、真剣に人と向き合う事を学んで、互いが互いを補い合っていて、これは自分が通う大学の友人とは全然違った絆を、つながりをいただけたと思っています。同じ事を志していれば、本気で話せる仲間に出会えることを今年度学びました。
- シンポジウムで他校の先生方が、今後PJ型教育を続けていく上で問題をおっしゃっていましたが、同大でPJ型教育を受けていた本人(私)は、何も考えずに活動していました。いかに同大のPJ型教育の環境が整えられていたのか…ということを感じました。“人の役に立つ”“社会貢献”という気持ちの大切さを改めて考えさせられました。
- 学生の立場から、PBL から学ぶことは大きい、賛成です。しかし、モチベーションの維持、組織の在り方を学生だけで保つことは難しいです。先生方の良いタイミングでの助言が頼りです。また、低学年からの参加ができたなら、思う存分取り組む事ができるのありがたいです。

【企業関係者】

- プロジェクト型教育は、人材育成に役立つと思います。産学連携教育の一つだと考えていますが、企業や社会からの意見や考えも、もっと取り入れていける方法も検討する必要があると思います。
- 企業サイドからの教育はインターシップなどがあり、大学サイドからは自発的なプロジェクト型授業があり、これらがお互いにコラボレーションさせられる動きがあれば、更に効果が上がるのではないのでしょうか、プロジェクトとしてのKPI(Key Performance Indicators: 重要業績評価指標)を何に設定するか、達成度としての評価も冷静に計ることも参考になると思われます。

【地方自治体関係者】

- 社会人基礎力を身に付けさせるのに、PBL が有効であることは理解できますが、それを大学で行うべき教育なのか、という点については、疑問を感じています。本来であれば自分自身で身に付けなくてはならない力ではないでしょうか(大人から与えられた場ではなく)？社会から要請されている部分は否めないので、企業が「即戦力を求めている、ということもあります」。PBL、PBL と呼ばれていると、大学とは何を学ぶところなのかと考えざるをえません(私は学問を学ぶ場であると考えています)。様々な疑問はあるのですが、私が学生であれば受講したいと思う科目であるのも事実で、複雑な心情ですが、本日は様々な大学・先生の取組みが聞けて、勉強になりました。

【その他】

- プロジェクト型教育を次代のリーダー育成の方法として、活用する方法を考察すべきではないかと考える。
- すでに子育ての世界(分野)では『子育ては親育ち』と言われていて、それと通じるものを感じました。PBL は学生の成長を支援する一つの手段として大変有効だと思いますが、大学でそのような手法云々することに対して、何か中等教育(中学・高校)あたりで大きな問題を抱えていることの象徴と感じました。大学入試にPBLを取り入れると面白いでしょうね。
- 「自分の考えを捨てる」→「相手の話に耳を傾ける時間を長くする」という視点が大きい印象です。学生に機会を与える(学生の意志を受容する土壌を作る)大人社会を構築することで、地域社会はもっと発展していくと思います。一人一人が「一國の良心」を感じられる教育を続けて下さい。

⇐ PBL研究会(Society for Project-Based Learning)について ⇐

PBL (Project-Based Learning) に関する各大学等の先進的な取組や研究について情報交換を行い、効果的な授業運営や成績評価のあり方等の事例研究を通して、プロジェクト型教育の理論と方法を考究し、現場の授業運営に応用・実践していくことを目的<PBL研究会会則第3条(目的)>として、2007年6月より同志社大学教務部教務課内に事務局を設置し、PBL研究会を発会した。

主な事業は隔月毎に①研究発表会を開催し、情報交換・事例報告を行うこと、②シンポジウムの開催(年1回)、その他必要な事業を行った。会員は本会の目的・事業に賛同する所定の手続きを行った個人(学生を含む)または法人(法人格のない団体を含む)をもって構成し、会員同士の活発な情報交換や意見交換を行うため、メーリングリストを作成した。また、会長1名、副会長1名、顧問1名を置き、本会の運営方針を立案・事業推進を行った。

(1) PBL研究会(Society for Project-Based Learning) 会則

第1条(名称)

本会は、「PBL研究会」と称する。

英文名は、" Society for Project-Based Learning " とする。

第2条(事務局)

本会の事務局は、同志社大学教務部教務課(TEL: 075-251-4360, FAX: 075-251-3064)内に設置する。

第3条(目的)

本会は、PBLに関する各大学等の先進的な取組や研究について情報交換を行い、効果的な授業運営や成績評価のあり方等の事例研究を通して、プロジェクト型教育の理論と方法を考究し、現場の授業運営に応用・実践していくことを目的とする。

第4条(事業)

本会は、次の事業を行う。

1. 研究発表会・シンポジウムの開催

・研究発表会を年数回実施する。また、毎年、シンポジウムを開催する。

2. メーリングリスト・掲示板での情報交換

・会員同士の活発な情報交換や意見交換を行うため、メーリングリストを作成し、運営する。

・事務連絡は、メーリングリスト及びホームページを通じて行う。

3. その他必要な事業

第5条(会員構成)

本会の会員は本会の目的、事業に賛同し、所定の手続きを行った個人(学生を含む)または法人(法人格のない団体を含む)をもって構成し、その名を会員名簿に記載する。

第6条(法人会員)

1. 法人会員は、代表者1名を決め事務局に届け出なければならない。

第7条（役員）

1. 本会には、次の役員を置く。

会 長 1名
副 会 長 1名
顧 問 1名

2. 会長は、本会を総括し、役員会ならびに総会では議長となる。副会長は、会長不在の場合等その必要のある場合には、会長の職務を代行する。

3. 顧問は、本会の基本的な運営方針に意見を述べ、もしくは助言を行なう。

4. 役員会は研究会をはじめとする本会の事業の運営方針を立案し、これを推進する。

5. 上記役員のほか、本会の事業推進に必要な役職分担者若干名を置く。

第8条（役員の選任および任期）

会長および副会長は、役員会の互選により選出されるものとし、その任期は1年とし、再任は妨げない。また、顧問は、役員会の推薦により選任されるものとし、その任期は1年とするが、再任は妨げない。

第9条（会費）

会費は当面、徴収しない。

第10条（総会）

本会の総会は研究会の期間中に開催し、事業、会則の改正等を定例議事とし、その他、会務の立案、事業に関する重要事項を審議する。

第11条（会計年度）

本会の会計年度は4月1日より3月31日までの1カ年とする。

第12条（会則の改正）

本会の会則の改正は、役員会の議決とその後開催される総会の承認に基づいて行われる。

第13条（会の存続）

2009年3月末日までとし、その後の存続は、役員会が討議し、役員会が必要と認めれば本会は存続するものとする。本会の終了は、役員会がこれを議決し、その後開催される総会で出席会員総数の2/3以上の賛成を受けて決定する。

(2) PBL 研究会 名簿

中村 尚五 東京電機大学 情報環境学部教授 PBL 研究会顧問（2007年度・2008年度）
山田 和人 同志社大学 文学部教授 プロジェクト科目検討部会長 PBL 研究会会長（2007年度・2008年度）
飯田 周作 専修大学 ネットワーク情報学部助教授 PBL 研究会副会長（2007年度）
小林 隆 専修大学 ネットワーク情報学部教授 PBL 研究会副会長（2008年度）
成溪大学経済学部 非常勤講師
土肥 紳一 東京電機大学 情報環境学部准教授
小濱 隆司 東京電機大学 情報環境学部講師
宮川 治 東京電機大学 情報環境学部講師

斎藤 博人	東京電機大学	情報環境学部講師
今野 紀子	東京電機大学	情報環境学部講師
宗前 尚子	東京電機大学	情報環境学部事務部課長
齋藤 雄志	専修大学	ネットワーク情報学部教授
石槌 英也	専修大学	ネットワーク情報学部教授
二上 貴夫	専修大学	ネットワーク情報学部非常勤講師 (株)東陽テクニカソフトウェア・システム研究部
望月 俊男	専修大学	ネットワーク情報学部講師
石川 博三	同志社小学校	学務幹事 教諭
井上 明	甲南大学	情報教育研究センター准教授
宮木 いっぺい	法政大学	地域研究センター特任准教授
金田 重郎	同志社大学	理工学部教授 プロジェクト科目検討部会委員
角谷 哲史	同志社大学教育支援機構	教務部教務課 課長 PBL 研究会事務局
中原 伸夫	同志社大学教育支援機構	教務部教務課 教務係長 PBL 研究会事務局
弘田 一恵	同志社大学教育支援機構	教務部教務課 プロジェクト科目コーディネーター PBL 研究会事務局

(3) PBL 研究会実施日程

《2007年度》

【第1回】 2007年6月23日(土) 13:00~17:00 同志社大学 有終館会議室

- 目的の確認 ●年間予定(研究会の活動内容)
- 研究会について ・会則の確認 ・MLの登録 ・文献リストの作成

<参加者10名>

東京電機大学(中村・土肥・宮川・斎藤)、専修大学(飯田・石槌)、同志社小学校(石川)、同志社大学(山田)、事務局(中原・弘田)

【第2回】 2007年8月24日(金) 11:00~17:00 東京電機大学 千葉ニュータウンキャンパス

- 事例報告:
東京電機大学2008年度開講科目について「コース・学年横断型 PBL(Project-Based Learning)、IBL(Issued-Based Learning)の取組みについて」
報告者:東京電機大学 宮川 治
- 施設見学:東京電機大学 情報環境学部

<参加者14名>

東京電機大学(中村・土肥・小濱・宮川・斎藤)、専修大学(飯田・石槌)、同志社大学(山田)、東京電機大学理工学部・矢口博之、東京電機大学教務部(宗前・宮本)、事務局(角谷・中原・弘田)

【第3回】 2007年10月27日(土) 13:00~17:00 同志社小学校

- 事例報告:
専修大学プロジェクトのとり組みについて「専修大学での PBL の取組み概要」
報告者:事例発表:専修大学 飯田 周作
- 施設見学:同志社小学校

<参加者13名>

東京電機大学(中村・土肥・小濱・宮川・斎藤)、専修大学(飯田・石槌)、

同志社小学校（石川）、同志社大学（山田・金田）、事務局（角谷・中原・弘田）

【第4回】 2007年12月15日（土） 13:00～17:00 専修大学 生田キャンパス

●専修大学情報ネットワーク学部 プロジェクト発表会見学

●専修大学 GP 関連研究会 ●2007年シンポジウム「学びの原点」打合せ

<参加者13名（専修大学 GP 関連研究会参加者、成蹊大学関係者を除く）>

東京電機大学（中村・土肥・小濱・宮川・斎藤）、専修大学（飯田・石槌）、同志社大学（山田・金田）、事務局（中原・弘田）

【第5回】 2008年2月23日（土） 13:00～17:00 同志社大学 明德館1番教室

●文部科学省現代的教育ニーズの取組支援プログラム「公募制のプロジェクト科目による地域活性化」シンポジウム「学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦!!-地域・社会が学生を育てる-」

来場者：132名

◇あいさつ：同志社大学副学長 田端信廣

◇報告：「プロジェクト科目が目指すもの」

同志社大学 プロジェクト科目部会長 山田和人

◇学生事例報告1：

同志社大学2007年度プロジェクト科目『量から質への「京都型ニューツーリズム」の開発と流通』受講生（3名）

◇学生事例報告2：

同志社大学2007年度プロジェクト科目『子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト』受講生（3名）

◇シンポジウム「PBL型教育の可能性について」

同志社大学 山田 和人、東京電機大学 土肥 紳一、専修大学 飯田 周作、

同志社小学校 石川 博三、堀兼小学校 岩瀬 直樹

司会：同志社大学 圓月 勝博

◇学生展示報告1：

同志社大学2007年度プロジェクト科目『食育と健康（薬膳の食養生を中心として）』受講生（2名）

◇学生展示報告2：

同志社大学2007年度プロジェクト科目『京都の文化的景観 その保全活用とまちづくりを結ぶ』受講生（2名）

◇学生報告事例3：

同志社大学2007年度プロジェクト科目『新しい京都の逍遥ガイドンスを作ろう!!』受講生（2名）

《2008年度》

【第1回】 2008年6月28日（土） 13:00～17:00 同志社大学 寒梅館208番教室

●事例報告1：「実システム開発を通じた社会連携型PBLの実績」

報告者：同志社大学 金田重郎

●事例報告2：「PBLによる情報教育-学習評価をどうするか-」

報告者：甲南大学 井上明

<参加者13名>

東京電機大学（中村・土肥・小濱・宮川・斎藤）、専修大学（小林・斎藤）、

同志社大学（山田・金田）、甲南大学（井上）、事務局（角谷・中原・弘田）

【第2回】 2008年9月4日（木） 12:30～17:00 東京電機大学 千葉ニュータウンキャンパス

●事例報告1：「PBL教育における学生のモチベーションと満足度の評価」

報告者：東京電機大学 今野 紀子

●事例報告2：「PBLにおける社会人基礎力の育成」

報告者：東京電機大学 小濱 隆司

<参加者13名>

東京電機大学（中村・土肥・小濱・宮川・斎藤）、専修大学（小林・斎藤）、同志社大学（山田・金田）、甲南大学（井上）、事務局（角谷・中原・弘田）

【第3回】 2008年10月25日（土） 13:00～17:00 同志社大学 東京オフィス

●事例報告1：「学習意欲を誘発する SNS の開発と運用～ PBL 教育の実践を通して～」

報告者：同志社大学 中原伸夫

●事例報告2：「法政大学地域研究センターの取組みについて」

報告者：法政大学 宮木いっぺい

<参加者10名>

東京電機大学（中村・宮川・斎藤・今野）、専修大学（小林）、同志社大学（山田）、法政大学（宮木）、事務局（角谷・中原・弘田）

【第4回】 2009年1月24日（土） 13:00～17:00 専修大学 神田キャンパス

●事例報告1：大学におけるプロジェクト学習と ICT 活用

報告者：専修大学 望月 俊男

●事例報告2：飛行船、海を渡る

報告者：専修大学 二上 貴夫

<参加者12名>

東京電機大学（中村・土肥・小濱・宮川・斎藤）、専修大学（望月・二上・小林・斎藤）、同志社大学（山田）、甲南大学（井上）、事務局（弘田）

【第5回】 2009年2月21日（土） 13:00～17:00 同志社大学 明德館21番教室

●文部科学省現代的教育ニーズの取組支援プログラム「公募制のプロジェクト科目による地域活性化」シンポジウム「第二弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦!! 地域・社会が学生を育てる -」

来場者：179名

◇あいさつ：同志社大学副学長 田端信廣

◇報告：「本学の取組みについて」

同志社大学 プロジェクト科目部会長 山田和人

◇講演：

『小学校からのプロジェクト学習とポートフォリオ「意志ある学び」の実現のために!! 千葉大学教育学部 特命教授、中部学院大学 客員教授 鈴木 敏恵

◇対談：鈴木敏恵・山田和人

◇学生事例報告1：

同志社大学2008年度プロジェクト科目『食育と健康（薬膳の食養生を中心として）』受講生（3名）

◇学生事例報告2：

同志社大学2008年度プロジェクト科目『私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう』受

講生（3名）

◇学生事例報告3：

同志社大学2008年度プロジェクト科目『「演劇で地域の子ども達と学ぶ」企画実践プロジェクト』受講生（3名）

◇シンポジウム「プロジェクト型教育の可能性と課題」

千葉大学 鈴木敏恵、同志社大学 山田 和人、法政大学 宮木いっぺい、京都文教大学 森正美、広島大学 森玲子、司会：同志社大学 圓月 勝博

◇学生展示報告1：

同志社大学2008年度プロジェクト科目『出会いを楽しめる空間づくり～遊空間プルデュース』受講生（2名）

◇学生展示報告2：

同志社大学2008年度プロジェクト科目『「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト』受講生（2名）

調査訪問・シンポジウム等への参加

PBL型教育を展開する各大学・教育機関、特に人文学系に対し、正課科目・課外活動を問わず実施状況の調査を行った。

《2006年度》

- 2007年3月5日 ◇東京電機大学 情報環境学部「プロジェクト科目」
 情報環境学部は東京電機大学の中で7年前にできた3番目の学部。教授陣の半分近くを企業退職者が占める。3年次で基礎プロジェクト、4年次は開発プロジェクトの授業展開をしている。
 調査：山田和人・吉田由紀雄・中原伸夫・弘田一恵
- 2007年3月6日 ◇早稲田大学 オープン教育センター
 オープン教育センター設置科目、テーマカレッジの説明をうける。学部間の壁が伝統的に高い校風であるが、総合大学の利点を引き出そうという流れのなかでオープン教育センターを設立した経過を聞く。
 ◇専修大学 ネットワーク情報学部「プロジェクト」
 専修大学の6学部ある中でネットワーク情報学部は唯一の理系学部。プロジェクト科目は3年次の必修科目であり、学部教員全員参加型、通年で履修、学生主体で活動する。公開の成果報告会を開催。
 調査：山田和人・吉田由紀雄・中原伸夫・弘田一恵

《2007年度》

- 2007年6月29日 「Building the 21st Century Campus —グローバル化時代の大学経営—」
 参加：中原伸夫
- 2007年8月3日 「意思ある学び—未来教育プロジェクト全国大会」 講師：鈴木敏恵他
 参加：弘田一恵
- 2007年8月23日 ◇立教大学 経営学部
 経営学科のコアプログラムであるPLP (Business Leadership program) をプロジェクト型授業で展開。学生のリーダーシップの育成を目的とする。OBなど学外協力者の層も厚い。
 調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵
- 2007年8月24日 ◇埼玉県狭山市立堀兼小学校 (岩瀬直樹氏)
 小学校5年生の授業でプロジェクト型の授業展開を行う。教室の空間を工夫した授業運営。地域との交流を通して教育効果をもたらす授業に取り組む。
 ◇未来教育 (鈴木敏恵氏)
 小学校・医療系教育機関等でポートフォリオを学習方法に取り入れたプロジェクト型教育の実践を行う。
 調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵
- 2007年11月17日 広島大学現代 GP 企画
 「学生自主活動ネットワーク 第2回合同フォーラム in 広島」
 参加：中原伸夫
- 2008年2月9日 平成19年度大学改革推進プログラム合同フォーラム 参加：中原伸夫
- 2008年2月19日 ◇大阪産業大学 大学院工学研究科 アントレプレナー専攻
 工学部長主導のもと、産学連携による「ものづくり」を通して、アントレプレナー型エンジニアの育成を目指すプロジェクトを推進。成果物は実用品も多い。クリエイトセンターでは専用の作業室を提供している。
 調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵
- 2008年2月28日 ◇茨城大学教育学部
 教育学部情報文化課程で1998年よりプロジェクト学習を実施。1年次から履修ができ、

多人次が同じテーマに取組。正課科目。プロジェクト履修卒業型と卒論による卒業が可能。

調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵

2008年2月29日 経済産業省「社会人基礎力フォーラム2008」

参加：山田和人・中原伸夫・弘田一恵

2008年3月9日 サービス・ラーニング・フォーラム「評価について考える」 参加：山田和人

2008年3月18日 Hitachi アカデミックシステム研究会 参加：中原伸夫

《2008年度》

2008年6月27日 「Building the 21th Century Campus ―グローバル化時代の大学経営―」

参加：中原伸夫

2008年8月20日 ◇法政大学 地域研究センター

中小企業の抱える問題を経営学を基本に学生が提案を行う。問題解決型の授業。サテライトオフィスが拠点。テーマはコーディネーターが予め選択。前期は講義、後期は実践型の授業を行い、個別の発表会も行う。

◇法政大学 キャリアデザイン学部 人間科学研究科

キャリア相談実習は学部の全専任教員が各クラスを担当。実習先の発掘・連絡ファック相談アドバイザー、キャリアアドバイザーが授業を補助する。職業意識を持たせることを目的とし、実習先は学生自身が開拓して申請する。

調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵

2008年8月21日 ◇早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター

ボランティア論などの講義科目と実習科目と組合せる授業形態。海外実習、農村実習、ハンセン病患者との長期交流など多様。発表会開催。

調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵

2008年11月29日 京都文教大学特色 GP シンポジウム

「現場主義教育充実のための教育実践～その現状と課題～」 参加：中原伸夫

2008年12月26日 ◇三重大学 高等教育創造開発センター

共通教育「統合教育科目」では多数教員による総合科目、1・2名の教員による系統的講義の通常科目、少人数セミナーに加え、PBLセミナーを開設。合同発表会を開催する。

調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵

2009年1月12日 平成20年度大学改革推進プログラム合同フォーラム 参加：中原伸夫

2009年1月13日 平成20年度大学改革推進プログラム合同プログラム 参加：中原伸夫

2009年1月29日 早稲田大学 WAVOC 主催シンポジウム 参加：弘田一恵

2009年2月10日 経済産業省「社会人基礎力グランプリ2009」

参加：角谷哲史・中原伸夫・弘田一恵

2009年2月18日 広島大学現代 GP 「フロントランナープログラム活動報告会」 参加：平田有喜宏

2009年2月20日 東京大学現代 GP シンポジウム

「アクティブラーニングのための学習空間を創る」 参加：角谷哲史

2009年3月2日 ◇山口大学 学生支援センター おもしろプロジェクト

学生が申請したテーマを学内選考委員が採択・認定し、学生が自主的・創造的に運営する。年間活動費が支給される。1996年より学長主導で実施。今後単位化の方向を検討中。専用の自主活動ルームがある。

調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵

2009年3月3日 ◇東海大学福岡短期大学 地域総合連携研究室

地域の企業・NPOの問題に学生が取組み、学外活動を主体とした授業展開。正課授業。学生の活動に利用できる専用の地域総合連携研究室がある。専任スタッフが常勤。

調査：山田和人・中原伸夫・弘田一恵

2009年3月12日 東京電機大学情報環境学部主催シンポジウム 特色 GP フォーラム「学生の自主・自立を支援する個別重視型教育～情報環境学部のこれから～」 参加：中原伸夫

学外報告

本学が取り組む「プロジェクト科目」の報告の依頼を受け、他大学が主催するシンポジウムで講演を行った。

《2006年度》

- 2006年11月12日・13日 大学教育改革プログラム「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」
合同フォーラムポスターセッション 報告者：山田和人・中原伸夫
- 2007年2月10日 帝塚山大学政策学部主催シンポジウム
会場：東生駒キャンパス 報告者：田端信廣
講演「往還型地域連携活動の趣旨と目的、経過と今後の展望」
- 2007年2月26日 長岡大学主催 現代GP教育フォーラム
会場：長岡グランドホテル 報告者・シンポジスト：山田和人
報告「同志社大学現代GP公募制のプロジェクト科目による地域活性化」
シンポジウム「学生の人間力・社会人基礎力をどうつけるか」
- 2007年3月2日 東京電機大学情報環境学部主催 特色GPフォーラム「学生の自主・自立を支援する個別重視型教育～これからの大学教育～」
会場：千葉ニュータウンキャンパス 報告者：山田和人
来賓講演「プロジェクト型教育の可能性と問題点」

《2007年度》

- 2007年11月17日 広島大学キャリアセンター主催 現代GPフォーラム
「学生自主活動ネットワーク 第2回合同フォーラム in 広島」
会場：千田キャンパス 報告者：山田和人
パネル討論「プロジェクト学習と学生の人材育成」
- 2008年3月7日 東京電機大学情報環境学部主催 現代フォーラム「学生の自主・自立を支援する個別重視型教育～個別重視型教育から研究・開発への波及効果～」
会場：千葉ニュータウンキャンパス 報告者：山田和人
パネルディスカッション「個別重視型教育から研究・開発への波及効果」

《2008年度》

- 2008年9月3日 教育改革IT戦略大会 発表者：山田和人・中原伸夫
- 2009年3月12日 東京電機大学情報環境学部主催 特色GPフォーラム「学生の自主・自立を支援する個別重視型教育～情報環境学部のこれから～」
会場：千葉ニュータウンキャンパス 報告者：山田和人
講演「初年次教育とプロジェクト学習」
パネルディスカッション「情報環境学部のこれから」

CNSの開発・運用について

同志社大学では、SNS (Social Networking Service) をベースにプロジェクト科目で活用できる CNS (Communication Networking Service) の開発を進めてまいりました。2007年12月にテスト運用を開始し、機能強化を行って2008年4月よりプロジェクト科目での利用を開始しています。

本システムは、2006年度に現代 GP で採択された「公募制のプロジェクト科目による地域活性化 ～往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して～」の取り組みの一環として、『3つのC (Community, Communication, Collaboration)』をサポートし、PBL (Project-Based Learning) を円滑に支援するコミュニケーションシステムとして、2005年度に構想、2007年度から独自に株式会社 SIGEL と共同開発を進めていたものです。PBL 学習においては、学生同士は当然のこと、指導教員、あるいはスタッフをも含めた活発なコミュニケーションや協働の学修が求められますが、本学が提供している従来のシステムでは、これらの要望を単一のシステムで提供することができず、コミュニケーション機能の強化、連絡や情報共有機能・スケジュール管理機能の充実が要望されておりました。また、既に提供している学修支援システムは、授業科目を中心に置いた構成となっており、受講期間の終了とともに当該授業コンテンツにアクセスできなくなるなど、学生の継続的・総合的な学びを支援することができないという欠点がありました。



CNS システムでは、SNS の機能を基本として、個人の主体的・自立的な学びに焦点をあてつつ、社会や地域との連携強化をはかるために授業科目自体をコミュニティとして設置します。学びの中心に学生を据えて個人の学修履歴を記録し、加えて、様々な授業科目コミュニティにおける学修履歴をコミュニティに記録していくことで、授業期間中はもちろんのこと、授業終了後もポートフォリオとして常に参照・活用することができ、科目間の学修における有機的な結合や気付き、振り返りの機会を得ることができます。

また、個人の学修や興味を、より一層喚起する様々なコミュニティ (学部や学科を横断するコミュニティ、大学の授業科目として提供できない特定領域一例えば”能”や”歌舞伎”、”町家”などといったキーワードを研究する学生や教員のコミュニティ、OB や OG・学外のサポーター・ゲストスピーカーのコミュニティ、ブックレビューコミュニティ、FAQ コミュニティなど) を提供することにより、これらの様々なコミュニティへの参加を通じて、社会を実感し、総合的な学びを支援するものです。さらに、コミュニティを工夫・活用して、人材データベース (公開された個人の技能や特技などを検索) やナレッジデータベースの構築も行います。コミュニティ間の連絡やお知らせを簡単に発信することができますので、冒頭の『3つのC』を重視したポータルシステムとして利用することも可能です。さらに、学修における協働作業を一層支援するための情報共有ツール (お知らせ機能、スケジュール管理機能、活動報告掲示板機能) も充実させています。

さらに、携帯電話対応機能の充実等、機能の追加、強化を継続的に行っていきます。

既に無償で提供されている SNS もあり、たくさんの方が利用されています。これらのシステムでは、利用者は全てフラットの関係に位置付けられており、誰でもいつでもどこでも利用することができます。しかし、教育の現場では、このままでは利用することができません。なぜなら、実際の教育現場においては、教育者と学習者、スタッフ、協力者、あるいは父母といったように、立場の異なる人が存在します。現実の社会がそうであるように、全てのコミュニティがフラットな訳ではありませんし、コミュニケーションも必ずしもフラットに行われる訳ではありません。むしろ、指導する教員と学ぶ学生がフラットな立場であるべきでないコミュニティも存在します。

そこで、本学では、これらの立場の違いを SNS で実現するため、コミュニティ毎に権限を設定し、利用できる機能をコミュニティ毎に選択・制限できるようにシステム設計をしました。また、できるだけ管理を簡素化するため、階層型構造を取り入れ、簡単にコミュニティの下にコミュニティを (何階層でも制限なく) 作成することができるよう配慮しています (これは、教育現場において、例えば科目の運営で、さらにそれらの構成員を少人数グループに分けるなどの作業ができるようにと意識したものです)。

また、汎用 SNS では、日記を書くことになりませんが、CNS システムでは、(学びの) ジャーナルと命名し、各自の学修履歴を振り返るツールとして位置づけており、個人的な感情の吐露の場とは区分しています。